

バカと鈍感と召喚獣

咲推しのだいちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コロナのおかげですることなくなってもうたし、最近自分が読みたいものも多くないなあ。

せや、自分で作つたら！

っていうノリで書いていきます。

基本的に作者は文才が0というよりマイナスぶっちぎっているの
で期待しないでください。

漢字の間違い、文章の乱れ等々ありましたら教えていただけると嬉しいです。

スキマ時間を見つけて書いていくので基本不定期ですが完結目指して頑張りたいと思います。

よろしくお願いします。

目次

設定	1
プロローグ 3年ぶりの故郷	5
第1章 第1次試召戦争編	
転入！問題だらけのクラスへ！	7
戦争の引き金と切り札たち	13
作戦会議と真司の闇	22
Dクラス戦と戦後対談	31
改心と卑怯者	37
魔王降臨と抱えた罪の隠されし真実	47
挑め！”最強”のFクラスの集大成	73
開戦！明かされる闇	81
限界突破！闇をぶっ飛ばせ！	89
再開！Aクラス戦	101
激闘！Aクラス戦	109
奇跡よ、おきろ！	116
決着！最後の戦い	124
瑞希と初デート	129
第二章 清涼祭編	
清涼祭へ向けて	137
不穏の始まり	143
ファーストラウンド	153

設定

設定

今回のテストの総合科目は現代文、古典、数学、理科（物化生地から2科目）、社会（日本史、世界史、地理、倫理政経から2科目）、英語、保健体育、技術家庭、家庭科、音楽の12科目の合計値を使うという設定にします。また上限はないのでテストの点数が1000点を越える超インフレ状態になっていきますが、後々また強そうなやつを出す予定なので一強は長くは続きません。作者はバカテストの知識自体曖昧で今漫画を読み直していますが、おそらく設定のガバが大量に出てくるかと思えます。暖かく見守ってくださいるととても嬉しいです。

藤堂真司（旧姓：織田）

3月14日生まれ、B型

吉井と幼馴染だったが、中1の誕生日に両親が事故に遭い、死去
双子の弟がいるが、両親の死後、別々の家庭に引き取られ音信不通
になる

弟と顔は似ていない

こっちは藤堂カヲルに引き取られた

恋愛相談をされる回数が多く、自分の気持ちや自分に向けられている感情以外に対してはとて敏感で的確なアドバイスが出せる

しかし自分が絡むと途端に鈍感になるため周りには何かあるのではないかと不安になっている

姫路のことが気になっているが鈍感なので自分の気持ちにも気づいていない

総合科目の学年順位は常に1位であったが、言語が壊滅的にできなかったため、科目ごとの順位では得意科目（数学、日本史）と苦手科目（国語、英語）の間に越えられない壁がある

テストの点数

現代文 106点

古典	68点
数学	1092点
物理	404点
化学	385点
日本史	750点
倫理政経	523点
英語	67点
保健体育	468点
技術家庭	333点
家庭科	459点
音楽	357点
合計	5012点
右投左打	
ポジション：投、外、一	
球速：147 km	
コントロール：D 56	
スタミナ：B 70	
変化球：ドロップカーブ3	
縦スライダー4	
サークルチェンジ1	
???	
特殊能力：対ピンチB、打たれ強さA、回復A	
奪三振、対強打者○、闘志、根性○	
変幻自在	
弾道：4	
ミート：D52	
パワー：B70	
走力：B74	
肩力：D50	
守備力：B76	
捕球：A85	

特殊能力：チャンスA、走塁A、パワーヒッター

三振、一球入魂、プルヒッター

満塁男、サヨナラ男、代打○

霧島猛（旧姓：織田）

3月15日生まれ、A型

真司の生き別れの弟

両親の死後、霧島家に引き取られ養子となる

兄貴のことが気になって今の家族と馴染めていなかったが、ある事件をきっかけに仲良くなった

学業成績は凡人並というよりほぼほぼバカに近いが、家庭科は大得意で学年トップレベル

（女子の心を折る）必殺料理人

憎めない愛すべきバカ

テストの点数

現代文 46点

古典 28点

数学 12点

生物 10点

化学 5点

日本史 30点

世界史 43点

英語 17点

保健体育 57点

技術家庭 63点

家庭科 559点

音楽 65点

合計 935点

右投右打

ポジション：捕

弾道：2

ミート：B 7 8

パワー：C 6 2

走力：D 5 2

肩力：A 8 4

守備力：B 7 6

捕球：A 8 5

特殊能力：チャンスA、キャッチャーA、流し打ち

一球入魂、アベレージヒッター

満塁男、サヨナラ男、逆境○

2人が双子なのに誕生日が違うのは生まれてくるときに兄の真司くんは3月14日の23：59に、弟の猛くんは15日の0：00に生まれたからです。

基本的に原作メンバーは変更なしだが、姫路は吉井に惚れていないので吉井をボコる描写はなし

霧島翔子は義理の弟に懐柔されてるので原作ほど嫉妬深くない

竹原苦勞人

プロローグ 3年ぶりの故郷

『僕ね、お別れしなきゃいけないみたいなんだ。』

『え?○○君と離れるのなんて嫌!』

『じゃあ約束しようよ、×ちゃん。』

『約束?』

『そう、約束。この木に誓うんだ。僕たちはまたこの木の下で必ず会うって。』

『そしたら○○君とまた会える?』

『きつとまた会えるよ。×ちゃん。×僕が望んでるんだから。』

『じゃあ約束だよ?』

『『ゆーびきーりげーんまーん嘘つーいたーら針千本のーます』』

『『指切った!!!』』

—————

キーン

「ふう…やつと着いたか…」キリッ

たった今かつこつけようとしたこのバカが今回の主人公、藤堂真司その人である。

「…って地の文でなんてこと言ってくれてんの!？」

地の文なんだから突っ込むな

閑話休題

さて、舞台となるこの文月市だが、真司にとっては中一の終わりでを過ごした思い出の地である。

そして高校2年になるこの春、再びこの地に戻ってきたのだった。

閑話休題

「さて、俺ん家はここか。あのババア散々人を振り回しやがって…。」
親に向かってなんと躊躇のない罵倒だろう…。この子には親を氣遣う心つてもんがないのだろうか…。

ガチャ

「おお、広い広い。至れり尽くせりじゃん、あのババア」

…掌を返すのが早過ぎやしませんかね？

「さて、振り分け試験は受けらんなかったし、強制でFクラスか…。先が思いやられる…。」

こちら辺で藤堂真司が転入する高校について説明しよう。

名を文月学園と言う。今話題の試験校であり、年度末の振り分け試験の成績でクラスが決まる完全実力主義の学校である。

ちなみにこの振り分け試験、遅刻、途中退席は0点扱いなんだそう。…入試本番でも流石に途中退席はそこまでの試験結果くらい使うぞ…。

そんな大事な振り分け試験であるが、なぜ真司が受けていないのか。理由は簡単である。この男、まだ文月に帰ってきたばかり。そもそもテストを受けられるような状態になっているわけがない。

しかし、元々は間に合わせるつもりはあったのだ。ここに来るまでいた北海道が季節外れのホワイトアウトにさえ、なっていなければ…。

「ホワイトアウトで3日動けないのは流石に痛すぎたよ…。なんで3月にもなつて一面の雪景色を見にやらんのよ…。ちつたあ自重しろや、冬將軍！」

こんなことを言いたくなる気持ちもわからんでもない。

「まあ明日は始業式らしいからとりま早く寝ちまうか。」

これはそんな頭が良くてバカでその上お人好しな男のある一年を追った物語である。

第1章 第1次試召戦争編 転入！問題だらけのクラスへ！

次の日朝4時

「シー、よく寝た。コースは懐かしのとこでいいか。」

読者にはこの少年が何言っているのかわからない、という方が多いであろう。ということここで藤堂真司の朝について説明させてほしい。

藤堂真司の朝は異常に早い。朝4時に起きて周辺を走る。こうすることによって街を見ることができて気分がいいのだそうだ。一切理解できない。(ちなみに作者はただ走るのがこの世の何よりも嫌いです。)

2時間ほど走った後、シャワーを浴びて昼の弁当作り、朝食作りと続く。8時に家を出るのだが、それまでに時間がある時は数学の解けなかった問題を見ながら時間いっぱい悩む。この時間を作るためというのも朝が早い原因らしい。

ここまで地の文を読んだ読者はもう気づいたことであろう。この男、究極の変態ドMバカである、と。普通は悩むただけにそこまで気合を入れて家事を終わらせる人間は存在しないし、ましてや数学にそこまで時間を割くバカもいない。(数学関連の仕事をされている方、ごめんなさい。貶しているわけではありません。)

さてそんなこんなでもう8時である。

「もう時間か。仕方ない、この問題は学校で解くでしょう。進学校なら勉強ができる人間が多いに違いなし、1番取れんのかなあ。まあどうにかなるか。よし行こう。行ってきまーす！」

当然ながら返事はない。一人暮らしの家で返事が返ってくるのは怖すぎる。

く学校到着く

真司「おはようござい…て、え!?なんでこんなところに伝説の傭兵ガア」

西村「人をスークと一緒にするな。ん？見ない顔だな。俺は生活指導担当の西村だ。お前の名前は？」

真司「ええと、今日から転入する藤堂真司です。よろしく願います、西村先生」

西村「おお、お前が転入生だったか。早速で悪いんだが、学園長室によつてくれ。そこでクラスを教える。場所は…そうだな、木下姉！こいつを学園長室まで連れて行ってやってくれないか？」

優子「わかりました」

西村「本来ならば俺が行くんだが、生憎クラス分けを渡さなきゃいけないくてな。それじゃ頼んだぞ」

真司「うえーい」

西村「返事はいだ。次はないぞ。」

真司「すみません。それでは…木下さんでしたっけ？よろしく願いします。」

優子「よろしくね、転校生君（なんで転校生の案内しなきゃなんないのよ！）」

真司「自己紹介がまだだったね。俺、藤堂真司。真司でいいよ。苗字に慣れてないから。」

優子「(苗字に慣れてない?)木下優子よ、弟がいるから優子でいいわ」

真司「優子さん、だね。改めてよろしく。早速学園長室に向かおうか。どうせババアのしょーもない頼みだろうし。」

優子「真司君、学園長に対してババアはないんじゃないかしら。年上にはちゃんと敬意を払って接しなきゃ駄目よ。」

真司「あの婆さんには貸しが大量にあんだから別にいいんだよ、つともう着いたのか。優子さん、ありがとう。」

優子「わからないことがあったらいつでも聞きにきなさい。」

真司「そう言ってもらえると嬉しいよ。その時はまたよろしく。それじゃまたね」

コンコン

真司「入るぞ、クソババア」

カヲル「部屋に入る時はノックして返事を待ってからって教えたはずだよ、クソジャリ」

真司「んなことどうでもいいんだよ。今度は何やらかしたんだ、ババア」

カヲル「まあ、待つさね。まだ役者が揃ってない。」

コンコン

カヲル「入んな」

竹原「失礼します。今度はなんの実験の失敗の尻拭いでしょうか、妖怪ババア」

カヲル「あんた達には誰が上の人間なのかはつきり教える必要がありそうだね。」

真司「やれるもんならやってみる。俺と竹さんがどれだけ苦労したと思っただ。あんた、竹さんからクーデター起こされても文句言えねえよ。」

カヲル「そ、それはすまなかったね。時間もないから本題に入るよ。実は黒鉄の腕輪なんだが、不具合があつてね、入力が高いと暴走しちゃうんだ。2人にはアタシを手伝ってバグ取りをしてほしいさね。ちなみに拒否権はないよ。」

真司、竹原（このババア、確実に殺る、殺りきってやる）

カヲル「それじゃそれぞれ戻るさね。あたしやこれでも忙しいんだ。」

真司「あ？話がちげえぞババア。ここで俺のクラスわかんじやねーのかよ」

カヲル「忘れてたさね。アンタはFクラスだよ。」

真司「ババア今晚覚悟しとけよ。逃げたら殺すからな。んじや竹さん、無理だけはしないでください。」

竹原「真司君ありがとう。ただここでは生徒と先生の関係だ。竹原先生と呼びなさい。」

真司「はーい。竹原先生」

竹原「よろしい。では頑張りなさい。」

（移動中）

真司「つと、ここが俺のク：ラス？豚小屋の間違いじゃないのか？」
そう言いながらドアに手をかける。最初の挨拶のイメージを固め、
いざ出陣！

真司「おーはようござ雄二「遅えぞ蛆虫野郎」はい？」

雄二「すまんバカが来たと思っただがとうやら違ったようだすま
なかつた」

真司「へえ謝って済むと思ってるんだあ。幸せだねえ。」

雄二「何をする気だ？」

真司「まあ何もしないんだけどね」

「「しないんかい!!」」

真司「うわっ、うるさっ。まあいいや、席は？」

雄二「自由席だ。」

真司「ふーん、ありがとう」

明久「遅れまし雄二「とつとと座れ、蛆虫野郎」最悪だ！誰だ！こ
んなことを言うのは、つてなんだ雄二か。雄二はなんで教壇に立つて
るの？」

雄二「担任が遅れているみたいでな、兵を確認するためにも代わり
に俺が立ってみた。」

明久「てことは雄二がこのクラスの代表？」

雄二「そう言うことだ。おつと先生が来たみたいだな。座ろうぜ。」

明久「席は？座席表あるでしょ？」

雄二「自由席だ」

明久「…」

ガラガラ

福原「皆さん席についてください。えーおはようございます。Fク
ラスの担任を務める…福原慎です。よろしくお願いします。」

真司（ここチョークすらないのかよ！）

福原「皆さんに卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれ
ば申し出てください。」

真司（不備しかねえよ！どっから突っ込むべきなのか分かんなく
なってきた）

「せんせー、俺の座布団に綿が入ってませーん」

福原「我慢してください」

「せんせー、俺のちゃぶ台の足が折れてまーす」

福原「我慢し真司「できねえよー」はは笑

冗談です。木工用ボンドが支給されるので自分で直してください。
い。」

「せんせー、スキマ風が入ってきて寒いでーす」

福原「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますのであとで直してください」

真司（俺はもうツッコまんぞ。精神削られるわあ…）

いくらバカなFクラスとはいえこの環境は不便である。しかし、ここまであしらわれるともう諦めるしかない。そのままの流れで自己紹介が始まった。

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

真司（あれが優子さんの弟？妹の間違いじゃないのか？まあ実の姉なら間違うわけないか。あんだけ似てんだし間違いはないか。）

康太「……………土屋康太」

某女子高に放り込まれた男性操縦者レベルの自己紹介である。

真司（ここに女子はいないのか、女子は。50人男はむさ苦しすぎるぞ。ん？女子の声？）

「……………です。ドイツ育ちで、日本語で会話はできるけど読み書きは苦手です。英語も苦手です。趣味は吉井明久を殴ることです！」

なんとも物騒な趣味である。流石にこんな自己紹介は聞いたことがない。というか聞いたことがある人は名乗り出て欲しいレベルの自己紹介である。少なくとも女子がしているものではない。

明久「誰だっ!?恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持っているのは!?!」

美波「はろはろー、吉井。今年もよろしくね」

真司（ふむ…なかなか良い趣味をお持ちじゃないか。しかし明久ま
でいるとはなあ。あいつ相当のバカだったが、マシになったのか？）
その後も自己紹介は順調に進み

猛「霧島猛です。得意科目は家庭科、趣味は義姉霧島翔子の旦那である霧島雄二をいじることです！」

雄二「誰が旦那だゴラア！まだ結婚してねえ！」

猛「まだ」って言ったね？する予定はあるんだあ笑笑」

雄二「シマッタア」

真司（目に入れても痛くない我が弟までいるとは！これは相当なバカクラスで確定ですな。）

このブラコンは弟が可愛いのか、ひたすらバカにしているのかはつきりしない。そう真司が考えている間にも自己紹介は進み、真司の番がやってきた。

真司「藤堂真司です。この春この学校に転校してきました。気軽に真司って呼んでください。」

明久、猛「ええええええええ！」

猛「なんで兄貴がここにいるんだよ！」

明久「そうだよ！なんで真司がここにいるのさ！」

真司「俺にもいろいろ事情があるんだよ。まあまたよろしくな！」

猛「後でちゃんと話してよね。」

真司「はいはい」

福原「それでは次…」

ガラガラ

「え？」

??「すみません、保健室に寄っていたら遅れてしまいました。」

Fクラスには決していないはずの彼女がそこにはいた。

戦争の引き金と切り札たち

福原「今自己紹介の途中ですから、姫路さんも自己紹介をしてください。」

瑞希「は、はい。姫路瑞希です。よろしく願います！」

「質問です！」

どこかから声上がる。

真司（あれは…確か須川くん、だっけか？）

須川「なんでここにいらっしゃるんですか！」

それはこのクラスでは当然の質問であるが、それにしても聞き方つてもんがあると思う。

瑞希「あ、はい。振り分け試験の途中で熱が出てしまいました…途中退席で0点になってしまいました。」

「俺も熱（の問題）が出たおかげでできなかったんだよな。」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったよな」

「俺は俺も最愛の弟が熱を出してな…」

「黙れ一人っ子」

「俺も前日の夜に彼女が寝かせてくれなくてな」

「二次元力○ジョだろ？ただオ○つてただけじゃねえか」

…予想以上にバカと性欲にまみれたクラスである。この時某クラス代表は本当にここで目的を達成できるのか不安になったそうだ。

福原「はい、皆さん静かにしてください。まだ自己紹介は終わっていませんよ？」

パンパン

バキッ

「へ？」

まさか立って手を叩いただけで教壇が壊れるとは誰も思っていなかった。

福原「新しい教壇を持ってきますので自己紹介を続けてください。」

瑞希「ふう…緊張しました…」

明久「あ、ねえ姫…雄二「姫路」

真司「こいつ、わざと被せる技術高いな。明久はさめぎめと泣いてるし笑笑」

瑞希「あ、はい。何ですか？えーっと…」

雄二「坂本雄二だ。体調はもう良いのか？」

明久「あ、それは僕も気になる。」

瑞希「吉井君もいたんですね。もうすっかり元気です。って、え!」

雄二「明久がブサイクですまん。」

瑞希「いえ、そんなこともないと思いますよ。私が驚いた原因は吉井君ではないですしね。」

雄二「そう言われると確かに見てくれは悪くないかもな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいた気もするし。」

真司「へえ、それって誰なんだ？」

瑞希「やっぱリシン君？なんでここにいるの？」

真司「後で話してやるよ。ところで坂本だっけか？明久なんぞに興味を持つ物好きって誰なんだ？」

雄二「雄二で良いぞ。どうやら明久と猛の知り合いのようだな。っと明久に興味を持つ奴だったな？確か久保…利光だったな。」

久保利光。学年次席クラスの学力を持つが、名前で察する通りれっきとした男である。この事実には流石の明久も啞然と…いや泣いてたわ笑笑

真司「おい明久、さめぎめと泣くのをやめろ笑笑」

明久「雄二、真司。ちよつと話があるんだ。廊下に来てくれないかい？」

真司「もう泣き止んだのか、明久。別に構わんが。」
ガラガラ

明久「ねえ2人とも、せつかく2年生になったんだからAクラスを相手に試験召喚戦争をやってみない？」

真司「急に何があったんだ？訳を話せ、俺が納得できる訳を」

雄二「どうせこいつのことだ、何を考えているのかは大体わかる気がするが一応聞いてやろう。何故だ？」

明久「いやあ、僕にはAクラスの…真司「嘘だな」…つてせめて最後まで言わせてよ！」

真司「どうせ瑞希のためなんだろう？お前のことだ、体の弱い瑞希を氣遣ったんだろ？お前バカのかくせにそういうところだけは頭回るかな。」

明久「真司、せっかく人が言わないようにしてたことをあつさり出さないでくれるかな？しかもさりげなく人をバカにしてるし。」

真司「それは違うぞ、明久。」

明久「え？」

真司「さりげなくじゃなくてしつかりがつりバカにしてんだ。まあそういうことなら協力してやらんでもないな。」

明久「最悪だつ！このヒトデナシ！協力してくれるのは良いけど相変わらずの性格の悪さだね？」

真司「んなこと言うなら協力しないぞ。まあお前が大好きな瑞希のためになんとかしたいって気持ちだけは買ってやるが。」

明久「すみませんでした、真司様！なんでもするのでとりあえず協力してください！」

真司には一切逆らえない明久である。弱いなお前…

真司「仕方ないなあ、明久君。そこまで言うなら協力してやるよ。ただししばらくはお前、俺の奴隷な。こき使ってやるよ。」

明久「なんでそうなるのさ！」

真司「だつてお前なんでもするつて言ったよね？俺がバカにされたらお前どうなるか、わかってたのに言ったんだから相応の罰は受けてもらわんとなあ笑笑」

明久「うっ…まああんまり変なことはさせないですよ？んで、雄二はどうなの？」

雄二「あ、ああ。まあ良いぞ。俺もやろうとは思ってたからな。それに…」

明久「それに？」

雄二「お前が大好きな姫路のために頑張りたいって言ってんだ、親友として協力してやるよ」ニヤニヤ

明久「聞かれちゃいけない奴に聞かれたっ！最悪だっ！」

雄二「おっと、そろそろ先生戻ってくるから教室戻ろうぜ。」
ガラガラ

福原「自己紹介はどこまでいきましたか？」

雄二「次は明久だな。」

明久「そつか。ええと…吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでください♪」

「「ダーリン！！！！」」

明久「失礼、忘れてください…」

言った本人、吐きそうである。明久が席に戻ると顔を真っ青にした…憤怒がいた。

真司「明久、てめえ何してくれてんだ？おかげでこっちまで吐きそうだ…」オエツ

明久「いや、僕なりに場を和ませようと思ったんだけどどこまで乗ってくるとは思わなかったんだ…」

福原「それでは最後、クラス代表の坂本君お願いします。」

福原先生のその言葉に対し、無駄に溜めながらうなづく雄二。あいつは一体何をしでかす気なんだろうか？

雄二「このクラスの代表になった坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きないように呼んでくれ。」

猛「んじゃあ、赤ゴリラ？」

雄二「猛、てめえなんてこと言ってるんだ！」

猛「だって好きなように呼べって言うから…」

雄二「やつぱり坂本で頼む。さて、このクラスの全員に聞きたい。」
そこで言葉を切り、教室をゆっくり見渡す雄二。クラスのみんなもそれに釣られるように卓袱台、座布団、壁と視線を向けていく。

雄二「Aクラスはリクライニングシートにシステムデスク、更には菓子や飲み物が完備されているが、不満はないか？」

「「大アリじゃああああ！！」」

「Aクラスと俺らって学費一緒だよな?」

「これは流石にやりすぎだろ！」

雄二「そうだろう。俺もこれには問題を感じている。そこで、だ。我々FクラスはAクラスに対し、試験召喚戦争を挑もうと思う!!」

こうして我らが代表は戦争の引き金を引いた。しかし…

「いや、流石に無理があるだろ。」

「これ以上設備落とされたくはないしな。」

「姫路さんと秀吉がいれば他に何もいらない。」

クラスから不満が上がる。(約1名瑞希と秀吉にラブコールをして
いる奴もいたが…)

雄二「そんなことはない。このクラスには試召戦争に勝てる要素が
沢山ある。それを今から説明してやる。…おい康太、姫路のパンツ覗
いてないでこっちに来い。」

康太「(ブンブン) ……そんな事実を確認されていない。」

瑞希「キヤア」／／／

事実も何も畳の跡がついているため、バレバレである。

雄二「こいつの場合は名前よりもこっちの方が知られているな。こ
いつがかの有名な寡黙なる性職者(ムツツリーニ)だ!」

「バカな、奴がああムツツリーニだと言うのか?」

「だが、あからさまな覗きの証拠をもみ消そうとしてるぞ。」

「ああ、ムツツリーの名に恥じぬ行為だ。」

恥ずべき名称である。ここでムツツリーニについて説明しておこ
う。簡単に言うただだのエロガキである。学校中に盗聴器とカメラ
をローアングルで仕掛け、女子のスカートの中身を日夜狙っている。
しかし、自身がその耐性がないため、すぐに鼻血を出してしまうので
ある。撮影された写真は自身が経営するムツツリ商会で取引される
ため、男子からは畏怖と畏敬の念を込めて、女子からは軽蔑を持って
挙げられる。

(注：盗撮、盗聴は犯罪です。実際にはしないでください)

雄二「姫路のことは説明不要だろう。みんなだってその力はよく
知っているはずだ。」

瑞希「え?私…ですか?」

雄二「ああ、うちの主戦力だ。期待している。」

「そうだ、このクラスには姫路さんがいるんだ！」

「彼女さえいれば他に何もいらぬいな。」

真司（…さつきから瑞希にラブコールをしてるのは誰なんだ？）

雄二「それに木下秀吉だっている。」

「おお、あいつ確か木下優子の…」

「ああ、妹だ。」

「姉がすごいから妹もすごいんだろう。」

「秀吉さえいれば他に何もいらぬいな。」

秀吉「わしは男じゃ！」

「「なにっ!?!」」

「いや待てよ、あいつは男と言ったが女でないとは言っていない。つまり第3の性別、秀吉だ！」

「「それだっ!!!」」

秀吉「もういいのじゃ」グスン

流石に秀吉が不憫である。この国では一応男と女以外に性別がないはずだ。

雄二「更には霧島猛に島田美波だっている。」

美波「え?ウチ?」

雄二「そうだ。お前も数学はBクラス並みの点数があるじゃないか。」

「島田って実はすげえ奴なのか!?!」

「霧島って確かAクラス代表の弟だよな！」

「家庭科の神って聞いたことあるぞ！」

雄二「当然、俺も全力を尽くす。」

「思い出したぞ、あいつ確か小学生の頃神童って呼ばれてた奴だ。」

「つてことは振り分け試験の日は調子が悪かったのか？」

「何にせよ、Aクラスレベルが4人もいるつてことじゃねえか！」

「これはいけるかもしれないぞ！」

ここで考えて欲しい。雄二は自分たちの点数を言っていない。つまり本当はAクラスレベルの人間はそんなにいないのだが、点数を隠すことで士気を高めているだけなのである。

雄二「それに、吉井明久だっている。」

シーン

一気に士気が下がる…

明久「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を出すのさ！そんな必要まるでないじゃんか！」

「誰だ？吉井って」

「そんな奴うちのクラスにいたか？」

「聞いたことないぞ？」

どうやらこのクラスではもうすでに先程のダーリンの件を無かつたことにしているらしい。お前ら大合唱してたよな？

明久「ほら！せつかく上がった士気が下がったじゃないか！なんで僕の名前を出したのさ！僕は雄二とかと違ってなんの肩書きもない普通の…なんだ！そのお前のせいで下がったみたいなのは！僕のせいじゃないよね！」

雄二「落ち着けよ、明久。それにお前だつて立派な肩書きがついているじゃないか笑笑

” 観察処分者 ” っ て肩書きが、な」

「観察処分者だと？」

「たしかバカの代名詞じゃなかったか？」

明久「違うよ！ちよつとお茶目な16歳に送られ：雄二「いかにもバカの代名詞だ。」ちよつと雄二！そこは否定するところだよね！」

観察処分者とは…

バカなだけでも問題を起こすだけでも手に入れることはできない。その両方を兼ね備えて初めて与えられる肩書きである。要するに究極のバカな問題児、ということである。

瑞希「あのう…観察処分者ってどういうものなんでしようか？」

雄二「簡単に言えば教師の雑用係だな。特例として観察処分者の召喚獣には物理干渉ができるようになってる。その力を使って力仕事をこなすという感じだ。」

瑞希「召喚獣の力は人間の何倍もあるそうですからすぐく便利です
ね！」

雄二「ただ、教師のいるところでしか召喚はできないし、観察処分の召喚獣にはフィードバックがついている。つまり、召喚獣が傷つけば本人も傷つくってこったな。」

「それっておいそれと召喚できない奴がいるってことじゃないか。」

雄二「気にするな。どうせいてもいなくても変わらん雑魚だ。」

明久「ちよつと！そこはフォローするところだよ、雄二。それに戦力だったら真司でしょ。」

瑞希「そうですね。点数の面ではシン君ほど頼りになる人もいないですしね。」

猛「兄貴の点数はエグいからな。」

雄二「そんなにすごいのか？」

真司「おいおい、買いかぶりすぎだ。俺はそんなに凄くないぞ。」

瑞希「何言ってるの？英語と国語は壊滅的だけど、他は異常に高いじゃん。」

雄二「ほう、それなら十分に戦力になるな。よし、それでは俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服しようと思う。勝ちたい奴はペンを取れ！Fクラスの真の力を上にいる優等生たちに見せつけてやろうぜ！」

「「オオーーーーー!!!」」

瑞希「お、おー」

真司「瑞希、無理しなくてもいいんだぞ。」

雄二「それでは明久、代表として命じる。Dクラスに宣戦布告をしてこい！見事、大役を果たせ！開戦時刻は…今日の午後でいいか。」

明久「ちよつと待つてよ、雄二。下位クラスの使者つて酷い目に遭うんだよね？」

雄二「心配するな、奴らがお前に危害を与えることはない。騙されたと行って行ってみろ。」

明久「それ本当？」

雄二「俺を誰だと思ってる？」

明久「わかったよ。それじゃあ行ってくる」
ガラガラ

雄二「それじゃあ、明久が戻ってきたら作戦会議をするぞ。今名前の上だったものは屋上に来てくれ。」
Fクラスの戦いはここから始まったのである。

作戦会議と真司の闇

明久「騙されたあ！」

雄二に騙され、Dクラスに逝かされた明久が教室に戻って最初の一言がこれである。この男はいつか詐欺に遭うんじゃないかな？

雄二「よし、じゃあ作戦会議するぞー。」

明久「雄二！やっぱり使者への暴行があつたじゃないか！」

雄二「当然だ。そんなことも予想できないで代表なんて務まるか。」

明久「少しは悪びれろ！」

そんな言い合いをしている明久に瑞希と真司、美波が近づく。

真司「ずいぶんこつ酷くやられたな笑笑」

瑞希「吉井君、大丈夫ですか？」

まさに悪魔と天使である。

明久「大丈夫、ほとんどかすり傷だから。でも真司は止めてくれないも良かったんじゃないかな？」

真司「何も知らん転校生の俺にあの場を止めろと？笑笑」

美波「吉井、本当に大丈夫？」

明久「島田さんも心配してくれるの？（いつか真司も同じ目に合わせてる）」

真司「決意してるとこ悪いが、そうなたらお前俺の肉壁な」

美波「よかった、ウチが殴る余裕はまだあるんだ…」

明久「あぁっ…もうダメ！死にそう…（あれ？声に出してたっけ？）」

真司「お前の場合表情でモロバレだ」

瑞希「シン君、あんまり吉井君をいじめたらダメだよ？」

真司「ほいほーいっと」

雄二「屋上行くぞー」

明久「待ってよ、雄二」

く屋上く

何やら恐ろしげな美波とビビってる明久がいたが、まあ気にしなくてもいいだろう。

雄二「さて、作戦会議を始める。明久！ちゃんと宣戦布告はしてきたか？」

明久「うん。一応昼休みが終わってからって伝えただけ」

真司「それじゃあ先に昼飯だな」

雄二「そうなるな。明久、今日くらいはまともな飯、食えよ」

瑞希「吉井君でお昼食べないんですか？」

明久「いや？食べてるよ？」

雄二「違どうぞ明久」

明久「何が？」

雄二「お前の主食は水と塩だろ？」

明久「失礼な！ちゃんと砂糖と油も食べてるよ！」

そういう問題では無いと思う。こいつの生命力はゴキ??リ並か？

真司「お前…流石にそれはないだろ。しかも水と塩と砂糖と油って食べる”とは言わんしな。」

秀吉「舐める、もしくは飲むが正解じゃな」

康太「……………驚異の生命力」

雄二「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

明久「し、仕送りが少ないんだよ！」

真司「ようし、瑞希。携帯貸せ。」

瑞希「何する気？」

真司「こいつの親に現状を報告する」

明久「やめてよ！そんなことされたら僕はおしまいだあ…てかなんで真司がうちの親の電話番号知ってんのさ？」

真司「仕送りが少ないんだろ？だったら親に頼むしかあるまい。それに電話番号についてだが、お前ん家に行ったら「明久がなんかしたら連絡してくれ」ってお前の母ちゃんケータイの番号くれたぞ？」

明久「あの人はなんてことしてくれてんだ！これじゃあ僕は平穩な毎日を送れないじゃないか！しかも僕がやらかすの前提なの!？」

真司「むしろやらかさないと思っていたのか？ハハッ、これは傑作だ笑笑」

明久「そう言われると何も言い返せない…」

美波「あんた、昔からってどんだけやらかしてんのよ…」

明久「それはともかく、作戦会議だったよね？雄二、なんでDクラスなのさ？」

真司「あ、話逸らした」

瑞希「あのう…もしよかつたら明日、私がお弁当を作ってきましたよ
うか？」

真司、明久、猛「彘？」

美波「機能停止してる吉井はともかく、藤堂、霧島、なんであんた
たちまでそんな反応してんの？」

真司「島田さん、真司でいいぞ。君たちはこいつの料理に何が入っ
ているのか知らないからそんなことが言えるんだ」ブルブル

猛「あれはトラウマものだったよ」ゲツソリ

秀吉「真司よ、どういふことなのじゃ？」

真司「こいつは昔から台所に立ちたがっていてな、あれは中学に上
がる頃、だったか。その日はたまたま俺と猛が瑞希ん家に遊びに行っ
ていたんだ。あの頃からこいつ、化学だけは得意だったんだよなあ。」

く 中学入学3日前く

瑞希「今日はみんなのために私がご飯を作るね！」

瑞希父「瑞希が作ってくれるのか！これは楽しみだ！」

瑞希母「あら、私の料理じゃダメっていうの？」

瑞希父「そういうことじゃない。父親なら娘の手料理を食べてみた
いってというのが夢なんだよ。な、真司君、猛君」

真司「おじさん、まだ俺ら小学生だからそれはわかんないよ」

瑞希母「それなら仕方ない。瑞希、包丁と火の扱いには気をつける
のよ？」

瑞希「大丈夫。私、この日のためにこっそり練習したの！」プクッ

姫路母「そう、それなら安心ね。何かあったら必ず呼ぶのよ？」

姫路父「真司君、君ならわかると思うが、今の瑞希の顔のおかげで
僕の鼻から熱いリビドーが出そうだよ…」

真司「出たよ、親バカ」

く 瑞希、料理中く

真司「なあ猛、なんか悪寒がしないか？」

猛「兄さん、体調悪いんじゃない？大丈夫？」

真司「そういう悪寒じゃないんだよ。何かまずいものが出てくる気がするな」

猛「そう？そんな感じしないけど。まあ瑞希なら大丈夫でしょ」

瑞希「出来た！舌もとろける特製の肉じゃがです！」

瑞希父「おお、肉じゃがが！これはうまそうだ！」パクツ

瑞希「お父さん、つまみ食いはダメだよ」

バタツ

真司「おいおい、何が起きたんだ？猛、状況を説明してくれ。俺は理解できない」

猛「兄さん、偶然だね。僕もわからないよ。瑞希の手料理を食べてすぐ倒れたってことしか。」

真司「俺の感は正しかったのか：瑞希、これは何が入っているんだ？」

瑞希「特別なものは入っていないよ？玉ねぎとにんじんとじゃがいもと牛肉、それからしらたきだね」

真司「俺が知りたいのはそこじゃない。その辺なら見りゃわかる。調味料に何を使ったのかと聞いているんだ。」

瑞希「お砂糖とお塩、お醤油、みりん、それから隠し調味料だよ」

真司「そこまでは普通の肉じゃがだな。ん？隠し調味料？お前は隠し調味料と称して何を入れたんだ？それを入れなきゃ普通の肉じゃがなのにな」

瑞希「それを言ってしまうと隠した意味がないんだけど、濃硫酸とクロロ酢酸、それに硝酸カリウムだよ」

真司「お前は料理を化学実験か何かと勘違いしてないか？わからないなら教えてやる。それでは質問だ。第一問、塩にクロロ酢酸を加えると何ができる？」

瑞希「私に化学で勝負を挑むの？クロロ酢酸ナトリウムと塩酸だよね？」

真司「正解だ。では第二問、硫酸に硝酸カリウムを加えると何がで

きる?」

瑞希「まだやるの? 硫酸カリウムと硝酸だよね?」

真司「ここで気づいて欲しかったんだが仕方ない。では最終問題だ。塩酸と硝酸を混ぜると何ができる?」

瑞希「最後にしてはとても簡単ね。王水…あつ!」

猛「兄さん、王水ってなんだ?」

真司「お前が知らんのも無理はない。王水は高校行ってから習うものだからな。王水は金をも溶かす最強の酸化剤だよ。」

猛「サンカザイ? ってのがわからないけどとりあえずやばいってことだけはわかったよ…」

〜回想終了〜

真司「あいつは無自覚に化学兵器を作っていたんだ。流石に王水が出てきたときはビビった。俺も存在は知っていたが、この目で見る日がこんなにすぐくるとは思わなんだ。あいつが作った料理は文字通りおじさんの舌を溶かしかけたんだ…」

美波「瑞希、あんたすごいもの作ってたのね…」

瑞希「シン君、やめてよ! それは昔の話だよ! 今はそんなことないのに!」

真司「本当か? 俺はあれ以来好きだった肉じゃがが食えなくなったんだぞ? トラウマで」

瑞希「それは…ごめんなさい…」

明久「まあまあ真司、それくらいにしておきなよ。姫路さんも悪気があったわけじゃないんだからさ。」

真司「お前あのととき大変だったんだぞ。おじさん息してなかったから救急車呼んで病院連れてって。医者にこの話するのは忍びなかったが、話したよ。あの時の医者引きつった笑みは忘れられない。瑞希、ちゃんと薬品は全部処理したんだろうな?」

瑞希「あ、当たり前だよ! もうあんなお父さんは見たくないし!」

真司「それならその言葉、信じるでしょう。だが、次やったらどうなるか、わかっているな?」ニッコリ

瑞希「わ、わかっています! もうしません!」ガクブル

雄二「もう痴話喧嘩はいいか？それでは明久の質問に答えるとしてよ。簡単な話だ。Eクラスは戦うまでもなく勝てる。ただ俺の話をいまいち信じ切れてないあいつらに勝って調子をつけてやりたくてな。明久、お前の周りには今誰が座っている？」

明久「え？美少女が2人とムツツリスケベが1人、天敵が2人と後はバカが2人だね」

雄二「おい、誰が美少女た！」

明久「え？なんで雄二がそんなこと言ってんの!？」

康太「…………ポツ」

明久「ムツツリーニまで!?!どうしよう!ツツコミが追い付かないよ!」

雄二「茶番はこのくらいにして、お前らが協力してくれば俺たちは負けない。いいか、俺たちは…………最強だ！」

秀吉「気になったのじゃが真司と猛、姫路の関係性はどうなってるのじゃ？よほど親しいと見えるがの？」

真司「…俺と猛は兄弟だよ。親が交通事故で死んで別々の家に引き取られたんだ。瑞希は親同士が仲良くてな、物心ついた時から一緒にいる。いわゆる幼馴染ってやつだ。ついでに明久は小学校から同じだ」

明久「僕はついでの!？」

秀吉「辛いことを思い出させたの。すまなかったのじゃ。」

真司「いいんだ。いつかは話そうと思っていたから。ただ飯って感じでもなくなつたな。俺ちよつと離れるよ。あんまり食欲ないし。雄二、Dクラス戦は俺は出ないんだろ？」

雄二「その予定だったが、大丈夫なのか？」

真司「大丈夫だよ。心配しないで。」

ガチャ…バタン

猛「兄貴、やっぱあの時のこと、まだ自分を責めているんだ。」

明久「どういうこと？あれはただの事故じゃないの？」

猛「もちろんただの事故だ。ただ、あの日、俺たちは誕生日だったんだ。兄貴と俺は大会に出てたからそれが終わってから家で瑞希ん

とこの家と一緒に誕生日パーティーをやる予定だった。ただその試合前にあんなことがなけりやそのまま予定通りに進んだのかもしれなかつたけどな。」

美波「あんなこと？」

猛「兄貴はお袋だけじゃなく、親父にも試合を見にきて欲しかったんだ。親父は土日も働いてたから中々試合も見に来れなくてな。その日は兄貴が先発だったから自分が投げる試合で勝って親父に自慢したかったんだろう。あんたの息子はあんたに教えてもらった野球でこんな成長したんだよって。でも親父はやっぱ仕事だった。そんな親父に兄貴は「そんなに仕事が大事なら息子に野球なんか教えんな！」ってな。初めてだったよ、あんなに怒った兄貴を見たのは。そしてそれが親父と兄貴の最後の会話だった。その後、親父とお袋は俺たちの試合を見に行く途中で事故に遭ったから。だから兄貴は自分を責めるんだ。あんなことを言わなければ事故に遭うことも、それが最後の会話になることもなかつたってな。悪りい、こんな話して忘れてくれ、俺もちよつと離れるよ。」

美波「そんなことって：瑞希は今の話知ってたの？」

瑞希「はい、知ってました。その後、そのことを忘れようとして練習し過ぎ、左腕を壊したことも。」

雄二「そうか、だから中3の時に唐突に翔子に弟ができたのか。とここであいつらの旧姓は？」

瑞希「織田です。織田真司と織田猛。」

雄二「ん？織田？おい、姫路、それは本当か？」

瑞希「はい、そうですけど何かあつたんですか？」

雄二「俺が神童と呼ばれていた頃、県の模試で1科目だけ1位を取れなかつたのがあつたんだ。」

瑞希「もしかして算数ですか？」

雄二「流石に姫路はわかるか。そうだ、俺が算数でどんなに高い点を取ろうが常に1位には同じ名前と同じ点数が載っていた。織田真司100点てな。目を疑ったよ、算数でどれだけの難問が出題されてもあいつは必ず100点をとるんだ。正直勝てるとは思えなかつた

よ。どれだけ勉強してもあそこまではたどり着けなかった。不思議と悔しさはなかったんだ。あいつには何をしても勝てないと本能でわかっていたんだろうな。」

瑞希「シン君の算数や数学は無類の強さを誇りますからね。小学生で大学の数学を解いていたのはシン君だけじゃないでしょうか。」

雄二「それならあの点数も納得だ。さて、作戦会議に戻ろうか。作戦は簡単だ。姫路の補充試験の時間を俺たちが稼ぐ。姫路は試験が終わったら下校する生徒に混じって平賀を討て。」

明久「それだけ？なら真司も出して無双させた方が良かったんじゃない？」

雄二「戦力はなるべく見せたくないからな。あいつは今回は休みだ。いいか、お前らが協力してくればこの戦争は勝てる。俺たちは：最強だ！」

その言葉に根拠はなかったが、不思議と自信が湧いた、とのちにここにいたメンバーたちは語っていた。

一方その頃、屋上を離れた真司は新校舎にいた。

真司「父さん、母さん、あの時のわがままのせいでごめんな。もうわがままは言わない。だから、天国から見てください。」

優子「わがままがどうしたの？」

真司「うわっ！……ってなんだ優子さんか。びつくりさせないでよ。」

優子「びつくりもなにもあなた、ここはAクラスの前よ。Aクラスの私がいちやいけくない？」

真司「ここはAクラスだったのか。ごめんね、優子さん。」

優子「気にしてないからいいのよ。それより真司君、あなたのクラスは？ここじゃないでしょ？」

真司「ああ、Fクラスだよ。振り分け試験受けてないからね。」

優子「ということではこれから試召戦争じゃないかしら？姫路さんもここにいないってことは途中退席かなんかでFクラスだろうし、作戦会議に出なくていいの？」

真司「いいんだよ。今回は俺、試召戦争出ないし。」

優子「そうなの？それならいいけど。それはそうとわがままってな

んのかしら?」

真司「聞いてたの?どこまで?」

優子「わがままって言葉だけよ。なにを言っていたのかは聞こえてないわ。」

真司「そっか。それならいいや。優子さん、家族は大事にね。それじゃ」

優子「なんだったのかしら?まあいいわ。次の自習の準備をしなくちゃ。」

そして運命のチャイムが鳴る…

Dクラス戦と戦後対談

「Dクラス代表平賀、討死！」

代表の戦死、それは戦争の終結を意味する。

ここで試召戦争について説明しておこう。

試験召喚召戦争、縮めて試召戦争はその名の通り戦争である。但し、生徒自身が戦うわけではない。生徒が召喚する召喚獣同士で戦うのだ。そして相手の代表を倒せば終戦となる。極端な話クラス50人のうち49人が倒されても残った1人が代表であれば負けないのである。そしてその召喚獣の強さを決める上で重要なのがテストの点数なのである。テストの点数そのものが召喚獣の体力となり、テストの点が高いほど戦死しにくくなるのだ。更に点数が高くなるほど召喚獣も強くなり、一撃で与えるダメージも多くなる。だからFクラスも最初は反対したのである。文月学園では振り分け試験の結果が高い方からAクラス、Bクラスというふうに分けられ、残った50人がFクラスとなる。すなわち、スペックの上ではAクラスが最強、最弱がFクラスとなる。そうなると逃げ続けなければならないかもしれないが、敵前逃亡や捕虜は戦死、つまりテストの点数が0になったとみなされ、西村先生に連れられて補修室に行かなければならない。この補修は鬼の補修と呼ばれ、長い時間補修室にいると「趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎」という風に洗脳されると噂まで立つレベルなのだ。（これは西村先生が実際に言ったとされ、恐れられている。）また、試召戦争中は何度でも回復試験を受け、点数を回復することができる。

時を戻そう。

Fクラスほぼ全員が開戦に向けて準備する中、瑞希と真司は回復試験の会場にいた。

瑞希「いよいよ始まるね。」

真司「ああ。ま、今回は俺出ないから気楽でいいんだけどね。回復試験もいる場所がないから受けているだけで受けなくても問題ないわけだし。それより今回の戦争は頼んだよ、Fクラスの主戦力さん」

瑞希「うう…そう言われると緊張するう。私なんかでいいのかな？」

真司「出た、瑞希のネガティブ病。大丈夫だよ。多分雄二はそれだけ瑞希を買っているんだ。多少のミスくらいはカバーしてくれるさ。戦争は1人が強くても勝てないからね。」

瑞希「それだと私が要らない子になっちゃうよ！シン君には私がこの3年でどれだけ成長したのか、たっぷり見せつけてあげるんだからね！」

真司「それは楽しみだ。さて、回復試験が始まるぞ。」

高橋「それでは回復試験を始めます。カンニング等の不正行為はもちろん禁止ですので疑われることのないようお願いします。それでは、始め！」

カリカリカリカリ

明久「総員突撃ー！！」

「お姉様アーーーーー！！」

ピンポンパンポーン

「連絡いたします。船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と先生の垣根を超えた、男と女の大事な話があるそうです。至急体育館裏までお越し下さい。」

明久「須川アーーーーー！！」

カリカリカリカリ

瑞希「そろそろ時間ですね。高橋先生、採点をお願いします。」

高橋「わかりました。今、採点します。」

真司「俺ももうやーめた。飽きたし、だるいし、必要ないし、もう英語なんて見たくない。」

瑞希「やつぱりシン君は英語が苦手だったんだ。その調子だと国語の苦手も相変わらず？」

真司「その通り！」エッヘン

瑞希「シン君、威張ることじゃないよ。定期試験が近づいてきたら勉強会、しようね。」

真司「うえつ、それ絶対俺強制参加のやつじゃん。しかも国語と英

語しかできんやつ。俺は数学と日本史があるからいいの！それ以外はあんまりやりたくないの！」

瑞希「そうは言っても中学校の時はなんだかんだで国語と英語以外は上がったじゃないの！大丈夫だよ。やればできるから！」

真司「100%善意なのが辛い…わーったよ。やればいいんだろ、やれば」

瑞希「言い方は悪いけど、そういうこと！約束だよ？」プクツ

真司「あれ？瑞希ってこんなに可愛かったっけ？これは明久が惚れ込むのもわかる…ってなに考えてんだ俺！」カオマツカ

瑞希「どうかしたんですか？顔が赤いですよ？風邪ですか？」

真司「ああ、いや、大丈夫だ。ちよつと昔の黒歴史を思い出しちゃつてね、恥ずかしさで体温が上がっただけだ。」

瑞希「そうなんだ。あまり深くは聞かないでおきましょう。」

真司「あぶねー、なんとかごまかせた。」

瑞希（とか思っているんだろうなあ。シン君の嘘を暴くのは朝飯前だし。なんてったって幼馴染だからね♪しかしなんだったのかは気になるなあ。坂本君当りに聞いてみれば聞き出しやすい方法が見つかるかもしれないし、後で聞いてみよつと！）

そんな恐ろしい計画が始まったのに気づかず、真司は自分がおかしくなったのではないかと呑気に考え込んでいるのだった。

そして冒頭へと戻る。

平賀「まさか姫路さんがFクラスだったとは」

瑞希「すみません、本当に」

平賀「いや、いいんだ。これはFクラスだからと油断していた僕の責任だ。」

雄二「それでは戦後対談といこうじゃないか。」

平賀「ああ、構わない。ただ教室の移動は明日でいいか？今日はみんな疲れているだろうし。」

明久「それでいいよね？雄二」

雄二「必要ない。教室の交換はなしでいい。」

「どうなつてんだ、坂本！」

「俺たちが勝ったんだから当然の権利だろうが！」

雄二「お前ら忘れたのか？俺たちの最終目標はAクラスだ。中途半端なところで交換は必要ない。」

平賀「それはありがたいが、いいのか？」

雄二「代わりと言ってはなんだが、俺が指示を出したらあれを壊して欲しい。」

平賀「あれってBクラスの室外機か？」

雄二「そうだ。設備を壊すから多少は先生に睨まれると思うが、悪い話じゃないだろう？」

平賀「それだけで設備が守れるのであれば願ったり叶ったりだ。喜んで引き受けよう。」

雄二「それじゃあ対談は終わりだな。みんな！今日はお疲れさん！明日は補充試験だ！今日は早めに寝るんだぞ！解散!!」

平賀「それじゃあAクラスに勝てることを祈ってるよ。」

雄二「お世辞はいらん。どうせ勝てるわけないと思っっているだろう？」

平賀「そりやそうだけど社交辞令ってやつだよ。それじゃ」

真司「お疲れさん、雄二。次はBクラスかい？」

雄二「そうだ。次はお前にも頑張ってもらうんだ。明日はしっかりと点を取れよ？但し、数学以外な。数学の本気はAクラスまで取っておけ」

真司「ええ…仕方ないなあ。大将がそういうのなら兵士は黙って従いますよ。」

雄二「物分かりが良くて助かるな。次は頼んだぞ」

真司「はいはい、んじやな」

雄二「気をつけて帰れよ」

明久「あ、なら真司、一緒に帰ろうよ。久しぶりにさ」

真司「すまん、明久。俺ちよつと野暮用があつてな。先に帰っててくれ。」

明久「仕方ないなあ。じゃあまた明日ね！」

真司「おう」

真司（きて、屋上に行くか）
ガチャ

真司「やっぱりここには誰もいないな。それじゃあ今日もおつ始めますか。」

??「……………何を始めるの？」

真司「誰!？」

翔子「……………霧島翔子。で、何を始めるの？」

真司「霧島つてことは、あの親父さんのとこの1人っ娘か。大企業の娘さんがここには何の用で？霧島さん」

翔子「っ！なんでそれを？」

真司「霧島つて言ったら有名な財閥じゃないか。誰でも辿り着ける話だよ。」

翔子「……………そつちじゃない。あなたは今1人っ娘と言つた。なんでそれを知ってるの？」

真司「そりゃあ簡単な話だ。あの時生き残つた片割れが俺だからだよ。猛が世話になつたみたいだ。ありがとう」

翔子「……………納得。それから翔子でいい。猛とかぶるから。それであなたは何を？」

真司「(チツ)まかせなかつたか)屋上つて1人になれるじゃないか。今は1人になりたくてな。翔子さんは？」

翔子「……………優子が昼休みにあなたに会つてから様子が変だつたら。理由を知らないかと思つて追つてきた。」

真司「優子さんが？なんでだろう？わからないな。」

翔子「……………でも今の話でわかつた。もう十分。」

真司「?まあいいや。それじゃあ翔子さん、また会おう。」

翔子「……………また」

ガチャ

真司「ふう……………まかせたか。しかしやっぱりあの一言だけじゃ伝わらなかつたのか。まあ心に刺さつたみたいだから別にいいか。もう2度と俺のようなことが起こらないように、ね。よし、それじゃあ始めようか、”右投げ”の練習を」

ブンブンブンブン

〜1時間後〜

真司「そろそろ終わるか。ん？ペットボトル？誰が置いていったんだろう？手紙？…『今日のごことは黙っておく』か。変な気遣わせちやったかな？明日にでもお礼言いにいこう」

改心と卑怯者

真司「おはようございます、西村先生」

西村「おはよう、藤堂」

真司「ところでAクラスの霧島さんでもう学校にいますか？」

西村「来ているが何かあったのか？」

真司「いえ、少し親切にしてみました、お礼を言いにくいところかと」

西村「そうか、てつきり吉井辺りが何かしでかしたのかと」

真司「ハハツ、流星にそれは…ない…と…」

西村「言い切れるのか？」

真司「無理でした」

西村「そういうことだ。さあ、遅刻しないようにさっさと行け。」

真司「ありがとうございます。では」

→Aクラス→

真司「霧島さんはいるかな？」

優子「代表？代表ならあそこよ」

そう窓側の1番端を指差す。

真司「ありがとうございます、優子さん」
スタスタ

真司「翔子さん、昨日は水分置いてってくれたみたいでありがとうございます、助かったよ」

翔子「……………大したことはしてない。気にしないで」

真司「そう言ってくれると嬉しい。それじゃあまた今度」

翔子「……………また」

優子「代表、真司君といつの間にも仲良くなったの？」

翔子「……………猛がお世話になったから」

優子「ああ、Fクラスの。弟さんだっけ？納得だわ。ありがとうございます」
その頃Fクラスでは処刑の準備が整っていた。

須川「諸君、これ以上転校生藤堂真司を野放しにしてはいけません。情報によれば、奴は姫路瑞希と幼馴染であり、我らがオアシス秀吉と

も仲が良い。更にはAクラスの木下優子、霧島翔子とも話しているよ
うだ。許せるか？」

「「許せん!!!」」

ガラガラ

真司「おはよう」

須川「諸君、ここはどこだ？」

「「最後の審判を下す法廷だ!」」

須川「異端者には？」

「「死の鉄槌を」」

須川「男とは？」

「「愛を捨て、哀に生きる者!」」

須川「よろしい。これより2—F異端審問会を始める」

真司「は？何コレ？どうなってるの？」

須川「被告人、藤堂真司の罪状は？」

真司「え？被告人？罪状？」

福村「ハッ、被告人藤堂真司は我らがクラスのオアシスである姫路
瑞希と：須川「長い、簡潔に」ハッ、女子と仲良くしてて羨ましいで
あります!」

須川「よろしい。藤堂真司、遺言はあるか？」

真司「え？まさかの遺言!?しかも瑞希と：須川「被告人、とつとと
死刑!」嘘でしょ!」

そう言うや否や即蓑巻きにされる真司。巷ではこういう時に『ぴえ
ん超えてぱおん』などと言うのであろう。(作者はこの言葉の使い所
も意味も全くわかっていません)

真司「いてええええええ!」

バタツ

「「え?」」

ガラガラ

瑞希「シン君!?皆さん何してるんですか!」

須川「いや、我々の血の掟に背いた異端者を処刑しよう」と…」

瑞希「そんなことのためにここまでしたんですか!最低です!シン

君は怪我のせいでもう左手が使えないんですよ！とにかく、早く縄を解いてください！」

須川「あ、ああ。すまなかった。」

10分後

真司「なんか柔らかい。ここは？」

瑞希「シン君、気がついた？左腕は痛くない？」

真司「瑞希？俺はもう大丈夫だよ。それよりなんで真上に瑞希の顔が？」

瑞希「寝かせるのに頭は高い位置で柔らかいところに置いたほうがいいと思ったので、畳の上よりはと思って私の膝を使ったの」／／／
真司「そ、そうか。（女子ってこんな柔らかいの!?ど、どうしよう!?）」カオマツカ

美波（瑞希って積極的なよね。見習わなきや。ウチも吉井に：ダメだ、あいつは余計なこと言いそう…）

明久（真司いいなあ。姫路さんの膝枕。僕も姫路さんとか秀吉とかに膝枕してもらいたいなあ…って何考えてんだろ？）

須川「すまなかった！」

「「すんませんでした!!」」

真司「え？」

須川「我々は取り返しのつかないことをしかけていたようだ。だから、すまなかった！」

真司「本当に反省してるなら許そう。でももうこんなことしたらダメだ。わかるな？」

須川「分かっている。これから我々FFF団は世の女性のための活動をしようと思う！」

真司「そっか。ならいいぞ。頑張ってくれ」

須川「ありがとう」

スタスタ

瑞希「本当に良かったの？気絶したんだよ？」

真司「あれでいいんだ。改心したと言っている以上それを信じてみるさ」

瑞希「それなら私は何も言わないよ。本人が許している以上、周りがとやかく言っても意味ないからね」

真司「ありがとう、瑞希。それじゃ、補充試験、総合科目で勝負しないか？昔やったる？いつもみたいに負けた方は勝った方の言うことをなんでも1つ聞くつてやつ」

瑞希「いいよ！やろう！今回は負けないよ？」

真司「俺だってまだまだ瑞希には負けんよ」

雄二「さて、みんな聞いてくれ！次はBクラスを落とす！各自回復試験に専念してくれ！」

キーンコーンカーンコーン

船越「それではテスト、始め！」

キーンコーンカーンコーン

明久「午前中ずっと試験なんて疲れたよ」

雄二「まあお前は違う意味でも疲れたと思うがな。結局船越先生とはどうなったんだ？」

明久「近所に住んでいるお兄さん（39歳独身）を紹介することでなんとか収まったよ」

……明久よ、それは本当に”お兄さん”なんだろうな？

雄二「そ、そうか。さて、今日の昼はは学食でも行くか。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにするかな？」

真司「雄二、奇遇だな。俺もラーメンと牛丼と餃子定食にするつもりだ」

猛「兄貴が行くなら俺も行こうつと。何食おっかなあ」

明久「僕はちよつとリツチにソルトウォーターでも食べようかな？」

真司「：明久、頼むから二度と塩水をリツチと言わないでくれ。今日の昼くらいは俺が奢つてやるから」

明久「真司、それ本当!?久しぶりにカロリーが摂取できそうだよ」

真司「…雄二…」

雄二「何も言うな、虚しくなるだけだ…」

美波「吉井たちも学食行くの？ウチも行つていい？」

明久「島田さんも来なよ！」

瑞希「あ、あのう…」

美波「瑞希も学食行くの？珍しいわね」

瑞希「あ、いえ、そうではなくて…」

秀吉「もしや昨日話しておった弁当かの？」

瑞希「はい！皆さんよろしければ是非…」

雄二「それじゃあ屋上だな。作戦会議もしたい」

秀吉「今日は晴れているし屋上が気持ち良さそうじゃのう」

康太「…………俺も行く」

真司、猛「俺たちは行かん！」

瑞希「グスン…そこまで言い切らなくてもいいのに…」

明久「あーあ、真司と猛が泣かせちゃった」

真司「あーもう！行くよ！俺も行く！」

猛「ちよっ、兄貴！裏切んのかよ！」

真司「猛、俺は流石にこの状況を返せるだけのものは持ってない。

瑞希が泣いた以上俺が取れる選択肢は1つしかない」

猛「本当兄貴は瑞希に甘いんだから…家の墓参り、もう1回行つと

けばよかったなあ…」

瑞希「それじゃあ行きましょう♪」

真司「ちよっ、おまつ、嘘泣きかよ！」

猛「だから兄貴は瑞希に甘いって言ってるの！嘘泣きくらい気づく

だろ！」

真司「気づかんかったんだからしょうがないだろ！まあいい、それ

じゃあ屋上に行こうか」

雄二「それでは俺は飲み物でも買ってこよう。Dクラス戦でのお礼

も兼ねて、な」

美波「それじゃあウチも行く。坂本1人じゃ持ちきれないと思う

し」

真司「じゃあ飲み物は雄二と島田さんに任せるよ。俺たちは先に屋

上に行つてよう」

く屋上く

瑞希「レジャーシートも持ってきたんだよ？」

真司「お前、準備いいな。てか弁当箱お重かよ！」

瑞希「みんなの分も、と思っただけだから！それでは、どうぞ？」

真司「明久、お前がまず食えよ。姫路はお前の栄養を考えて作ってきたんだからな」

明久「いやいや、女心的にまずは真司が食いなよ。きつと姫路さんは真司に食べてもらいたいはずだよ？」

真司「女心のわかってないお前だけには言われたくないな。瑞希のためにもお前が食え」

秀吉「今回ばかりは明久に賛成じゃな。真司よ、お主が食べるのじゃ」

康太「……………（ヒョイ、パク）美味しい」

明久「あ、真司がもたもたしてるせいで先にムツツリー二が食べちゃったじゃないか！」

真司「明久、お前がもたもたしてるからだろ！……………おいムツツリー二、お前今なんて言った？」

康太「美味しいと言ったんだ。これは明久クラス」

秀吉「ムツツリー二よ、それは本当かの？これはますます楽しみじゃ」

真司「瑞希、疑って悪かった。ちゃんと味見してたんだな」

瑞希「もう！私だって成長してるんだからね！」エツヘン

真司（確かに成長しているな、特に胸が…ゲフンゲフン俺は今何を考えた？瑞希を異性として見た？あり得ない、あいつは幼馴染だぞ！?）

幼馴染だからといって性の対象にならないとは限らんぞ、真司よ

雄二「買ってきたぞ。おつ、美味そうだ。（ヒョイ、パク）美味しいじゃねえか、姫路。真司、猛、お前ら昨日は騙したな？」

真司、猛「それだけは絶対はない」

真司「しばらく会わないうちに瑞希が腕を上げたらしい。俺も予想外だった…」

瑞希「そんなに言うならシン君は食べなくていい！」プクツ

真司「(…可愛い)悪かった。ごめんなさい。私めにも少しでいいので分けてください」土下座

雄二(秀吉、あいつの目見たか?)

秀吉(見たのじゃ。あれは完全に両思いじゃな)

雄二(だよな。あれだけの過去を聞いたんだ。俺たちで応援してやろうじゃないか)

秀吉(同感じゃな)

雄二(他のやつにも声をかけておく)

秀吉(そこは任せるのじゃ)

美波「瑞希、これすっごく美味しいじゃない!どうやってるのよ?」

瑞希「これはですねえ、カクカクシカジカって感じですね」

美波「へえ、今度うちもやってみようっと」

瑞希「是非!それはそうと土屋君、さつき吉井君クラスと言っているんですがどのくらいなんでしょう?」

猛「あ、そっか。瑞希はこいつの料理食ったことなかったか」

瑞希「うん、だから少し気になったの。」

康太「……………明久はプロ級」

瑞希「吉井君て実はすごい人だったんですね!主食がお水とお塩とお砂糖と油と聞いていたのでそこまではないと思っていました。すみません」

真司「気にすることはないぞ、瑞希。こいつはそう思われても仕方ない生活してんだ」

明久「それは事実だけど真司が言うことじゃないよね!」

真司「明久、うるさいぞ」

明久「君のせいだからね!」

雄二「さて、飯も食ったことだし、Bクラス戦の作戦会議始めるぞ」

明久「なんで次はBクラスなのさ。Aクラスは?」

雄二「今のうちの戦力じゃどう考えてもAクラスには勝てん。」

美波「じゃあBクラスに標的を変えるの?」

雄二「いや、Aクラスをやる」

明久「雄二、矛盾してるよ?」

真司「明久、お前矛盾なんて難しい単語知ってたのか！お兄さんは感動したぞ…」

明久「今それを言うタイミングじゃないよね!?で、どうなの?雄二」
雄二「明久の指摘も最もだがあくまで勝てんと言ったのは普通に試召戦争をやった場合だ。Aクラスの40人はどうにかなるが、あとの10人は別格だ。どれだけ数を割いても焼け石に水だろう。だから一騎打ちに持ち込む。」

真司「お前のシナリオが読めたぞ。なるほど、そういうことか。ならBクラス戦もうなずけるな」

明久「真司、勝手に1人で納得しないで説明してよ」

真司「瑞希も気づいていたんだが…いいか、明久。今の状態でAクラスに行つて素直に一騎打ちにに応じてくれると思うか?答えは否だ。しかしBクラスをダシに使えばどうだろう?連戦するぞと脅せば確実にこつちに引き込める。そう言うわけだ。だよな、雄二」

雄二「その通りだ。流石だな」

真司「褒めるほどのことじゃねえよ。それに明久以外は最初の問いかけ聞いた時点でわかってたからな」

明久「最後までわかんなかったの僕だけ!」

秀吉「それはいいのじゃが、それだとBクラスに負けてしまったのは元も子もないのではないかの?」

雄二「大丈夫だ。俺たちが負けることはない。明久、Bクラスに宣戦布告してこい!開戦は明日の午後だ」

明久「お断りだよ!雄二か真司か猛辺りがやってくれば良いじゃないか!」

真司「お前俺との約束忘れたのか?お前が行ってこい」

明久「ウグツ…わかったよ…」

明久、Bクラスでボコられ中

明久「やっぱり殴られたじゃないか!」

真司「お疲れさーん。もうすぐ補充試験再開するぞ」

明久「君はもうちよい僕をねぎらうつてことをしてもいいと思うんだ?」

真司「ネギラウ？ナニソレ？オイシイノ？」

明久「もういいよ…」

真司「よし勝った笑笑」

「次の日、昼」

真司「瑞希、どうだったよ」

瑞希「理系科目は今回もバツチリ！家庭科が少し不安だけど、400点は固いよ。シン君は？」

真司「まだまだ甘いな、瑞希さんよお。俺は4500は固いぜ？」

瑞希「流石はシン君。でも返却されるまでテストはわかんないよ？」

「返却しまーす」

瑞希「あ、帰ってくる。結果が楽しみだね！」

真司「ああ、そうだな」

「返却後」

真司「それじゃ、まずはどっちからいくよ？」

瑞希「じゃあ私からいくよ？」

姫路瑞希 総合科目 4405点

瑞希「今回は頑張ったんだ！」

真司「ほう、なかなかやるじゃないか。じゃあ俺だな？」

藤堂真司 総合科目 5012点

真司「今回は俺も調子良かったんだ。ということで俺の勝ち」

瑞希「悔しい…」ウルウル

真司（なんで俺は最近瑞希がこんな可愛く見えるんだ？幼馴染のこんな姿なんて散々見てきただろ!?)

これぞ、タイトルになる程鈍感な男の本領である（メタア）

雄二「ん？2人して何してんだ？」

真司「瑞希と総合科目で勝負してたんだ。ま、俺が勝ったんだがな」
雄二「そうか。ところで真司、俺は数学の本気はAクラスの時まで取っておけと言ったはずだが？この1092というのはなんなんだ？」

真司「あ、忘れてた。ごめんちやい笑笑」

雄二「ごめんで済んだら警察いるかあ！とつとと数学だけ受け直してこい！」

真司「ちえ、わーったよ」

真司、またまた開始直後から回復試験確定

瑞希「もう！そう言う時に限って勝負はしないでよ！」

真司「ごめん…」

雄二「それじゃ、Bクラス戦での作戦を説明するぞ」

こうしてBクラス戦が始まった。

??「ほう、これはなかなかいい情報だな。これで脅せば姫路はこちら側だ。この戦争はもらったな笑笑」

魔王降臨と抱えた罪の隠されし真実

雄二「行け、お前ら。相手を道連れにきっちり死んでこい！」

「「オオオオオオオオ!!!」」

↳ Bクラス

「来たぞ！Fクラスだ！」

「俺たちも行くぞ！」

「「オオオオオオオオ!!!」」

康太「前衛部隊、接敵。」

雄二「了解。他にもわかったら連絡をくれ」

康太「了解」

瑞希「ハアハア…」

「来たぞ、姫路だ！」

「家庭科にしろ！奴の弱点だ！」

瑞希「その情報は古いですよ？」

姫路瑞希 家庭科 293点

「何っ？奴は家庭科が苦手なんじゃなかったのか!？」

瑞希「家庭科は確かに苦手ですが、苦手科目をそのままにはしていません！」

「まずい！戦死しないうちに回復試験を受ける！」

一方その頃Fクラスでは…

真司「また戦争できないの？なんとかしてよ、雄二イ」

雄二「我慢しろ。お前はうちの秘密兵器だ」

真司「ふうん。ま、秘密のまま負けなきゃいいけどね」

雄二「問題ない。隠せる戦力は隠した方が後のためだ」

「Fクラスの代表はいるか？」

雄二「俺が代表だが？」

「協定を結びたい。屋上に来てくれないか？」

雄二（真司、どうやら出番だ。護衛で全員連れて行く。階段に差し掛かったら教室に戻れ）

真司（了解）

雄二「わかった。向かおう」

（階段前）

真司「あ、ごめん。俺トイレ行ってくるわ」

雄二「お前何考えてんだ？戦争の結果とトイレどっちが大事なんだ？」

真司「（合わせてくれてありがとな）トイレに決まってる。漏らしたら一生の恥だからな」

雄二「はあ：行つてこい。先に屋上向かってるぞ」

真司「すぐ追いつく」

Fクラス前

「ここだよな？」

「ああ、戻つてくるとまずい。とつととやるぞ？」

ガラガラ

真司「いらっしやーい」

「え？」

真司「Fクラスお：藤堂真司が、Bクラス5人に日本史で勝負を挑みます。試獣召喚（サモン）！」

「承認します！」

藤堂真司 日本史 750点

「はあ!？」

「おいおい、おかしいだろ！なんでこんな化け物がFクラスにいるんだ!？」

「聞いてねえぞ！Fクラスは姫路と島田を抑えればいけるんじゃないのか!？」

「やべえ、逃げるぞ！」

真司「そんなことしちゃうと、ほら」ニヤニヤ

西村「戦死者は補習！」

「え？先生まだ俺ら戦つてすらいませんよ？」

西村「バカ者！敵前逃亡は戦死扱いだ！よって補習！」

「最悪ダア！」

真司「ふう：何もしてないけど疲れたな」

ガラガラ

雄二「お、無事だったか」

真司「あいつら日本史の点数見たらビビって逃げやがった笑笑」

雄二「お前の点数見たらこの学校のほとんどは逃げるだろうな」

真司「そんなもんか。それより協定の中身って何だったんだ？」

雄二「ああ、それは…」

ガラガラ

ん？」

明久「雄二！…ってあれ？秀吉、何ともないじゃないか」

真司「お前ら何しにここへ来た？」

明久「いや、秀吉がね、Bクラスの代表が根元くんだって言うから教室に何かあったんじゃないかと思って戻ってきたんだ」

真司「さてはお前俺がなんで日本史の教師を携えてこんな所で止まっているのか忘れてるな？」

明久「あ、そうだった。すっかり忘れてたよ」

真司「どう言う目に合わせてやろうかなあ」

明久「僕たちは戻るね！」

ガラガラ

真司「(チツ、逃げたか)んで、協定の中身は？」

雄二「ああ、今日の4時までには終わんなかったら明日の9時から同じ状態でスタート。その間は試召戦争に関わる一切の行動を禁止という物だ」

真司「お前は瑞希のために受けたんだろ？こりや明日は瑞希なしで戦うのを念頭に入れておかなきゃなんないな」

雄二「問題ない。元から明日は姫路を使うつもりがないからな。姫路は今日だけ相手を殲滅してくれりゃいい」

真司「ほう、そう来たか。となると今日の瑞希んところが明日は俺になるのか？」

雄二「そうなるな。最悪姫路と戦うことを念頭に入れておけ」

真司「流石にそれはないと思うけど。一応覚えておくよ。んじゃ、もう仕事もなさそうだし、今日は帰るわ」

雄二「おう、明日は頼むぞ、影のエース」

真司「任せとけ」

「次の日」

真司「おはよう」

美波「あ、真司来た。ちよつとこつち来てもらえる？」

真司「どうした？」

美波「朝から瑞希の様子がおかしいのよ。クラス全員に1人1人謝ってるし」

真司「変だな。瑞希に限ってはそういうことはしないだろうしな。こつちでさぐり入れてみるよ」

美波「任せるわ」

真司「おい、瑞希。お前クラスメイトに謝ってどうしたんだ？瑞希が謝ってる姿カメラに収めたいから俺にもやってほしいんだけど（今から屋上に来い。あそこなら盗撮、盗聴は問題ない）」

瑞希「シン君、なんてこと言ってるの！（わかった。行くよ）」

「屋上」

真司「時間もないから単刀直入に聞く。何のネタだ？」

瑞希「何のこと？」

真司「言葉が足りんかったな。何をネタに脅された？」

瑞希「流石はシン君、わかっていたんだね。でもこれだけは言えないよ。例えシン君やたつ君でも。」

真司「お前昔から勉強はできても素直過ぎるからな。美波と雄二も気付いてた。汚れは俺がやる。どうせBクラスに寝返ろつて言われたんだろ？」

瑞希「そうだったんだね。シン君はそこまでわかってたんだ。でも『俺がやる』つてどういうこと？シン君が、Bクラス側につくの？」

真司「いや、俺は脅されてないからな。Bクラスにはつかないが、お前を補習室に送る。お前のそばにいるから寝返るなら俺の側にいる奴を殺りに来い。俺が代わりに受ける。そうすればお前が根元に脅されたことは一部の人間にしかバレないし、その一部の人間も限定できる。お前はあの鉄人の補習に耐えることだけを考えろ」

瑞希「…そこまでしてなんで私をかばおうとするの?」

真司「幼馴染をかばおうとするのに理由なんかいるか?それに”あん時”のこともある。”あん時”俺は何もできんかった。無力すぎたんだよ。今は”あん時”とは違う。すぐそこに困っている人がいるんだ。今ならお前を助けてやれるんだ」

瑞希「まだ”花蓮ちゃん”のこと、自分を責めてたんだ…でもあれは!」

真司「あの後な、俺1人であいつの家に行ったんだ。あいつの母親にこつ酷く言われたよ。猛や明久みたいに矢面に立つ訳でもなく、瑞希みたいに影から支えた訳でもない。全ての原因を作った俺があいつを殺したってな。だからこれは俺の業だ。俺はあいつの分まで生きる義務がある。十字架を背負った俺がやらなきゃいけないだよ」

瑞希「シン君…(偶然か今日は花蓮ちゃんの命日なんだよね…お墓参りをしたら帰ろうかと思っていただけ、予定変更だね。花蓮ちゃんのお家に行こう)」

真司「とりあえずお前はもう行け。クラスに迷惑はかけられない」

瑞希「シン君は?」

真司「少し風に当たっていたくてな5分くらいしたら行くよ」

瑞希「わかった。試召戦争には間に合わせてよ?」

真司「Take it easy. I can assure that everything will turn out fine.」

瑞希「DUOやってたんだ。もうだいたい覚えたの?」

真司「んにゃ、ここまでしか知らん」

瑞希「それ例文2つ目とかだよね!?どんだけサボってたのさ!」

真司「英語なんて俺には必要ないもんね。言語は文字が読めて意味が分かればそれでいいんだよ」

瑞希「もう…仕方ないね。じゃあ先に行ってるから!」

真司「おう、後でな」

ガチャ

真司「行ったか…あいつがあそこまでしたんだ。おそらく自分のこ

とじゃないな。だが一体誰のことなんだ？…わからんな。情報が足りなすぎる。…考えても仕方ないか…この話は後だ。根元、お前は俺を怒らせた。それがどういう意味なのか、体にしっかり教えてやるよ…さて、教室に戻るか」

ガラガラ

真司「雄二、Cクラスが随分と意気込んでAクラスに戦争仕掛けてたが、何かあったのか？」

雄二「ああ、どうやらBクラスと協定を結んでたらしくな、こつちに飛び火しそうだったから秀吉に女装してもらってCクラスに発破掛けといた」

真司「そうだったのか。後で優子さんに謝っておけよ。身に覚えのない罪着せられてんだ」

雄二「お、おう。そうだな。宣戦布告しに行くときにそうするか。(あいつ何かあったのか？悪鬼羅刹と呼ばれた俺でさえもビビるレベルの殺気だぞ?)」

美波「真司、どうだったの？」

真司「島田さんか。脅されていたのは間違いなかったよ。中身までは教えてくれなかったが。」

美波「そ、そうなのね。あんた、今めちやめちや怖い顔してるわよ？大丈夫？」

真司「そうか？自分では気づかなかったよ。すまない。でも少しの間我慢して欲しいんだ。今は抑えられそうにない」

美波「何があつたかは知らないけどもう少し周りを頼りなさい。坂本辺りはその辺、わかってそうだしね」

真司「申し出はありがたいが、断らせてもらおう。これは俺の問題だ。俺自身が答えを出さなきゃなんないんだよ」

美波「あんたが頼るのを待っているわ」

真司「それより島田さん。開戦したらちよつと協力して欲しいんだ」

美波「協力？何を？」

真司「開戦したらFクラス前で少し待ってて欲しい。大丈夫、戦死

はさせない」

美波「瑞希のことね。わかった。そうさせてもらおうわ」

真司「理解が早くて助かる」

雄二「さて、みんな！いよいよ再開だ！今日の戦いでも敵をBクラスの教室内に押し込むことが重要となる。前線部隊の指揮は姫路と真司だ！全員きっちり死んでこい！！」

「「オオオオオオオオ！！！！」」

「姫路さんにいいところを見せるぞ！」

瑞希「ええと…みなさん、頑張りましょう！」

手を胸の前辺りで握る瑞希。その姿に真司は…

真司（グハツ…やべえ、吐血しそう。まさか、いや、そんなことはない。俺が幼馴染を好きになるはずがない）

お前、それももう好きって気付いてんだろってレベルである。いい加減素直になれよ

雄二「9時だ！さあ行け！」

「「ウオオオオオオオオ！！！！」」

真司「いよいよか」

美波「真司！ここにいればいいの？」

真司「ああ、そろそろだ」

瑞希「Fクラス姫路がFクラス島田さんに音楽で勝負を挑みます！試獣召喚（サモン）！」

真司「Fクラス藤堂が受ける！島田さん、先に行け！」

美波「どういふことかわからないけど、わかったわ」

姫路瑞希 音楽 268点

VS

藤堂真司 音楽 357点

真司「音楽にしたのか。別に化学でも良かったんだぞ？」

瑞希「私もそう思ったんだけど、化学の先生も国語の先生も英語の先生もいなかったの。だからシン君が苦手だった副教科で勝負に来た」

真司「それなら仕方ない。だが、俺が言語以外の苦手をそのままに

すると思うなよ？お前に勝ち続けるために勉強したんだ。行くぞ！」
瑞希「余計な一言のおかげで残念な感じになってるよ…でも負けな
い！」

真司「久々に本気のケンカというか。お前にビンタされて以来だ
な？」

瑞希「あれは…その…秘密にして欲しいというか…」

真司「だが、あれで俺は救われた。俺にとっては大事な思い出だ」

瑞希「そこまで言うなら仕方ないね。でも、私たちだけの秘密だよ
？」

真司「分かっているさ。では始めよう」

勝負は直ぐには終わらなかつた。お互いの手の内を知り尽くして
いる分、お互いに攻めあぐねていたのである。しかし点数が上の分、
真司が少し有利だった。

姫路瑞希 音楽 83点

VS

藤堂真司 音楽 102点

真司「ハアハア、次で最後にしないか？」

瑞希「ハアハア、そうだね。これが最後の攻撃だよ？」

真司「俺は防御はしない。攻撃を当てることにだけ神経を集中させ
る」

瑞希「やっぱりそこは変わってなかったんだね。じゃあ、行くよー」
決着は簡単にはつかなかつた。お互いの武器が交差したためであ
る。数十秒後、立っていたのは…

姫路瑞希 音楽 0点

VS

藤堂真司 音楽 7点

真司「俺の勝ち、だな？」

瑞希「悔しいけどそうみたい。それじゃあ補修室でシン君の活躍を
祈ってるよ？」

真司「ありがとう」

「Fクラス姫路、戦死！」

その知らせはすぐに前線へと伝えられた。

明久「え？なんで？姫路さんが？」

秀吉「何があったと言うのじゃ？」

美波「…真司、あんた1人で抱え込みすぎよ」

根元「あの女、しくじりやがったか。まあいい。これで相手の戦力でまとものうちとやれるのは島田の数学だけだ。数学の教師は全員別のところにいるし、姫路を戦死させた奴も姫路相手に削られて大した戦力にはならんだろう。それに回復試験でしばらくは戻ってこれない」

このとき、総合科目の先生を自分のクラスの前に固めず、国語の先生や英語の先生を配置しておけば彼の、根元の策略は上手くいったのかもかもしれない。

真司「前線部隊！被害を報告しろ！」

明久「真司、遅かったじゃないか。何してたのさ」

真司「瑞希を討つたのは俺だ」

明久「何してんの?! 姫路さんは数少ない大事な戦力なんだよ!？」

真司「うるせえ。俺の指揮に文句があるならここから去れ。ほんでもって雄二にでも文句言つて来い」

明久「そうさせてもらおうよ！」

ダツ

真司「…これでいいんだ、これで。瑞希に降りかかる火の粉は全部俺が受ければいい」

美波「本当にやったのね、真司」

真司「島田さんも迷惑をかけたな」

美波「ウチはいいんだけど、あんたはこれで良かったの？」

真司「いいんだよ、俺は。これしか知らないからな」

美波「ならウチは何も言わないけど、心配してる瑞希のこと、少しは考えてあげなさい」

真司「ああ、わかつている。皆んな！今から俺がBクラス全員に勝負をかける！流れ弾に注意しろ！」

「なんだと!？」

「Bクラスを舐めるな！」

「よっしゃ! やつと秘密兵器の出番だな！」

「秘密兵器だと!？」

「あいつ、ただのバカじゃないのか!？」

真司「Fクラスお：藤堂がBクラス全員に日本史で勝負を挑む! 試
獣召喚(サモン)！」

藤堂真司 日本史 750点

「なんだ、あの点数は!？」

「まずい! 社会特化タイプか!」

「奴に社会科目で挑むな! 理系か副教科の先生を呼んで来い! おそろ
く苦手なはずだ!」

真司「一気に行くぞ! 腕輪発動!」ゴウツ

Bクラス10人 戦死

「まずい! もう近衛部隊しか残ってない!」

「Fクラス如きが調子に乗るな!」

「魔王だ! 魔王がいるぞ!」

「魔王をうちのクラスに近づけるな!」

真司「後は前線4人と近衛10人、それと根元だけか。残りの前線
部隊も消し飛ばす! 腕輪発動!」

「ヤメロオー!!」

真司「ふう…これで前線は片付けたか。後は雄二次第だな」

雄二「俺ならここにいるぞ?」

真司「来たか。で、最後はどうするんだ?」

雄二「Dクラスに室外機は壊させた。もう窓が開いているはずだ。

真司は近衛部隊全員を相手取れ。最後のトドメはムツツリーニが指
す」

真司「わかった。科目は?」

雄二「そう言うと思って倫政の先生を用意した。ああ、それとこい
つが何か言いたいそうだな」

真司「ん? 明久? なんの心変わりだ?」

明久「真司、ごめん！姫路さんが脅されているなんて知らなかったんだ！」

真司「雄二、お前全部喋ったのか？」

雄二「ああ。別に減るもんでもないだろ？それにクラス内の軋轢は少ない方がいい」

真司「迷惑かけたな」

雄二「気にするな。気にするならお前はもつと他人を頼ることを覚えろ」

真司「ハハッ、それ同じことを島田さんにも言われたよ笑笑」

雄二「それだけお前が突っ走りすぎてるって話だ。これに懲りたのなら少しは考えてみるんだな」

真司「戦争がひと段落ついたら考えることにするよ笑笑」

雄二「是非そうしてくれ」

真司「さて、それじゃあケンカ売りに行きますか。Fクラスお：藤堂真司がBクラス代表根元に倫理政経で勝負を挑む！試獣召喚（サモン）！」

「まずい！Fクラスに社会科教師をとられていた！」

「勝てる相手じゃないぞ！どうする！根元！」

根元「うるさい！あいつに数の力を思い知らせてやれ！時間を稼げば勝てる！」

「だよなあ…チクショー！こうなりややけだ！その勝負、近衛部隊全員で受ける！」

根元「ハハッ、転校生クンよ。これで奇襲は失敗だ！どうやら負け組代表もノコノコと出てきたみたいだしこれで終わりだよ、お前らは！」

雄二「負け組代表って俺のことか？ならすぐにお前の称号になるがな。それよりこの部屋暑くないか？俺はもつと涼しいところだと思っていたんだが、これじゃあうちのクラスと変わらんなあ」

根元「負け惜しみに時間の引き延ばしか？付き合ってやってもいいが、生憎この後予定が入っているんだ。とつと終わらせようじゃないか」

雄二「そうか？それなら仕方ない。すぐに終わらせてやろう。ムツツリーニ！」

根元「何!？」

スタツ

ここで先生の特徴を説明しておこう。

先生は科目によって特徴が異なる。例えば数学の教師は点数計算が速く、回復試験が終わってから戦線に復帰するまでが早い。

では保健体育はどうか。保健体育はその科目の特殊性ゆえに体育教師が担当することが多い。それはつまりどういうことか。もうわかった読者も多いだろう。圧倒的に身体能力が高いのである。つまり屋上から窓の開いた教室までロープで下ることは容易なのだ。

康太「：Fクラス土屋がBクラス代表根元に保健体育で勝負を挑む。」

根元「ムツツリーニイイ！」

土屋康太 保健体育 441点

VS

根元恭二 保健体育 203点

勝負は一瞬でついた。

雄二「さて、嬉し恥ずかしの戦後対談だ、負け組代表さん？」

根元「クツ」

雄二「本来なら教室を交換してお前らに素敵な卓袱台を送ってやるところだが、ある条件を飲んでもらえば免除してやらんこともない」

「「なにつ!?!それは本当か!?!」」

雄二「本当だ。その条件は真司に任せる」

真司「俺でいいのか?」

雄二「間違いないとお前が今回のMVPだ。構わん」

真司「わかった。それじゃあ根元、俺から出す条件は3つだ」

根元「3つ?」

真司「1つ目は謝罪だ。但しこれは俺の目の前で、過去に起こした罪全てに対して、だ。次に2つ目は女装してAクラスに戦争の準備があることだけを伝えて来い。宣戦布告はするな。3つ目は女装写真

集撮影だ。これは上2つの内容が守られなかったときに世間にばらまく。それでいいな?」

根元「却:」「Bクラス全員で必ず成し遂げよう!」「なぜだっ!」

真司「これが今まで君がやってきたことの報いだよ。それじゃあ頑張ってるよ。」

「そんなことで許してもらえないならすぐにでも女装させよう!」

「おい、衣装はどこだ!」

「オエエエエ!これは今日は寝られそうもないぞ!」

「よし、根元、逝ってこい!」

く補修室前く

真司「瑞希、ごめんな。これしか思いつかなかったんだ」

瑞希「大丈夫だよ。補修もわかりやすかつたし」

真司「そう言ってもらえるとこっちも救われる。なあ、瑞希。」

瑞希「どうかした?」

真司「俺ってそんなに1人で抱え込んでんのかな?」

瑞希「うん!それはもちろん!」

真司「そうだよな:って、え?」

瑞希「シン君は抱え込みすぎ!私たちってそんなに信用できない?」

真司「いや、そうじゃないんだけど、迷惑はかけたくないじゃん」

瑞希「それだよ!その考え方が信用してないって言われるんだよ!友達なら迷惑かけてもいいんだよ?むしろ迷惑かけたくないって言われた側の気持ち考えたことある!?自分はいいいのかもしれないけど!言われた側は悲しいんだよ!ああ信頼されてないんだなって!」

真司「そうだったのか:ごめんな、瑞希。俺もう少し人を頼ってみるよ」

瑞希「そうしてよ。でもなんで急にそんなこと思ったの?」

真司「雄二と島田さんにも言われたんだよ。今日のこと」

瑞希「もしかしてシン君は美波ちゃんのことを:ん?:)にもって他の人も言ってたの?」

真司「瑞希と花蓮だよ。覚えてないの?」

瑞希「あの時のこと、まだ覚えてたんだ…」

真司「瑞希、今日、文月公園に行かないか？まだ約束、果たしてないだろ？それから花蓮の墓参りだ」

瑞希「そうだね！花蓮ちゃんもきつと喜ぶよ！」

真司「そうだといいな」

く文月公園く

真司「ここも久しぶりだな。約束した以来だ」

瑞希「そうなんだ」

真司「ここだったよな、このブランコ。俺が左で瑞希が右、指定席じゃないのいつも同じだったよな笑笑」

瑞希「そうだったね笑笑」

真司「なあ、いつ告白するんだ？」

瑞希「はい？」

真司「明久だよ、明久。お前好きなんだろ？」

瑞希「違う！私の好きな人は別にいるの！」

真司「明久、ドンマイ笑笑」よし、引つかかったな？それじゃ、お前の好きな人、当ててやるよ笑笑」

瑞希「っ！いいよ、絶対当たらないから！」

真司「秀吉か？それともムツツリーニか？」

瑞希「どっちも違います！」

真司「(ホッ) 雄二はやめた方がいいぞ？」

瑞希「違います！でもなんでですか？」

真司「ん？あいつにはどうやら心に決めた相手がいるっぽい」

瑞希「ちなみに誰なんですか？」

真司「流石にそこまでは俺もわからんよ。ただクラスだけはわかっている。Aクラスだ」

お前ら、猛の自己紹介のとき聞いてなかったのかよ…

瑞希「なんでわかったんですか？」

真司「戦争するって言った日あったろ？あん時の雄二の顔は好きな人に何かを見せたかって顔だったんだよ」

だからお前ら、(以下略)

瑞希「(なんで人のことはそこまでわかるのに私の気持ちには気づいてくれないんだろう?) そうだったんだ。でもなんで戦争しようと思ったの? 理由はそれだけじゃないでしょ?」

真司「そこに明久が提案してきたんだ。瑞希がこんな環境にいるのはおかしいって。そこに関しては俺も同意だ。瑞希には高いレベルで切磋琢磨する方が合ってると思ってな」

瑞希「そうだったんだ。でもそれだと試召戦争で勝ったところで変わらなくない?」

真司「だからAクラスに勝っても設備交換はしない。雄二が交渉してくれてな、勝ったらFクラスだけ再振り分け試験をしてくれるらしい」

瑞希「そうなんだ。でもシン君はAクラスに行く気はないんでしょ?」

真司「よくわかったな。俺Aクラスみたいなタイプ苦手なんだよ。蕁麻疹が出る。優等生は瑞希だけで腹一杯だよ…」

瑞希「(私はいいんだ…よし! 少し積極的になってみよう!) さっきの私の好きな人だけど、あと3回で当てられたら今日の夕飯は私の家で私が作ってあげる! 当てられなかったら花蓮ちゃんのお墓参りのお花はシン君が全額出してね?」

真司「それ俺にメリツトあるか? 悪いがそこまでお前の好きな奴に興味がないんだが…」

瑞希「へえ、逃げるんだあ。逃げるならこっちにも考えがあるんだよ?」

真司「喜んでやらせていただきます (即答)」

瑞希「よし! 乗ってきた!」(じゃあ20の扉っぽくやろう? 質問してもいいよ?)

真司「じゃあ1つ。それ本当に男だよな?」

瑞希「当たり前! シン君は私をレズにしたいの?」

真司「いや、ただの確認だ。質問は20も要らないからな。じゃあ答え行くぞ。猛か?」

瑞希「違う!」

真司「ほう、いつものメンバーじゃないのか。そんじや須川か？」
瑞希「(どんだけ鈍いの!?) 違う!あと1回!」

真司「ほんじやうちのクラスでもないか。あ、わかったぞ! Aクラス
の久保だな? これで俺の知ってる中で瑞希のお眼鏡にかないそう
なのは全部だ(なんだ? なんで俺は誰かの名前を出す度に心が痛むん
だ?)」

…もう気付けよ! 焦りたい!

瑞希「違います! これで3回、当てられなかったからお墓参りのお
花は全額シン君だよ?」

真司「(ホッ) チツ、じゃあ誰なんだよ?」

瑞希「それは秘密! 当てられなかったからね」

真司「じゃあなんでやったんだよ?」

瑞希「シン君が当てられるとか言うから…」

真司「なんだそれ笑笑」

瑞希「もう! お墓参り行くよ!」

真司「そんじや行くか」

??「お墓?そこに行けば彼が何を思ってアタシにあんなことを言っ
たのか、わかるかもしれないわね。そうとなればこのままそこまでつ
いていくわよ」

??「なんでわしまで付いて行かねばならんのじや…」

??「うるさいわよ、秀吉。ほら、さっさと行くよ!」

秀吉「姉上、待つのはじや! これ以上わしはこんなことで知りたくな
いのじや。真司がいつか話してくれるまで待ちたいのじや!」

優子「それは…そうなんだけど。でも知りたいじやない! ここまで
来て引き下がれないわよ!」

秀吉「姉上! これは最後通告なのじや。ここから先は生半可な気持
ちや好奇心で聞いていい話ではないと思うのじや。だから、わしは真
司を信じるのじや。わしはもう帰るぞい」

優子「チツ、秀吉のくせに生意気言ってるじやないわよ! アタシは
ね、あんなこと言われてから腹が立ってんのよ! 意味わかんないし、
これじやあ勉強に集中できないじやないの!」

秀吉「姉上が何を言われたのか、わしにはわからぬ。しかし、姉上はその言葉の重みを、隠された真司の思いを何かしら感じたのではないのか!?ここまで言って姉上に何も響かなければわしはもう止めぬ。ただ、自分の行動には責任を持つのじゃ」

優子「……………やめとくわ。藪を突いて蛇が出てきたら堪ったもんじやないわ。それに秀吉がどれだけ彼を信頼してるかわかったしね」
♪

秀吉「言って損した気分じゃ。姉上はここまで読んでいたのかの？」

優子「当たり前じゃない。ここまでしないとあんたの思いが聞けないと思っただからね」

秀吉「ならば姉上は不器用すぎるのじゃ…」

優子「ひくでくよくし〜?」

秀吉「すまなかつたのじゃ!あ、姉上!わしの関節はそっちには曲がら…ウギヤ〜!!」

優子「さて、スッキリしたし、帰りましょうか。秀吉、あんた今日は何が食べたい?」

秀吉「今日は姉上が作るのかの?ならば肉じゃがが食べたいのじゃ」

優子「肉じゃがね。それなら買い物してから帰るわよ。あんたは荷物持ち!」

秀吉「わかっておるのじゃ」

〜文月寺前〜

真司「ここって…」

瑞希「そう、花蓮ちゃんのお墓とおじさんたちのお墓って同じお寺なんだよ?どうせシン君のことだからおじさんたちのお墓参りもしてないんでしょ?」

真司「だから花多めに買ったのか」

瑞希「そういうこと!さ、行こ?」

真司「ああ…ん?」

瑞希「あ!」

花蓮父「君たちは…」

花蓮母「今更何しにきたの？」

瑞希「私が強引に連れてきたんです。そうでないとシン君…真司君は一生花蓮ちゃんのことを罪と思いついで生活することになりますから」

花蓮母「思い込むも何もそのブ男の罪でしょ？この人殺し！あんなに死ねばよかったのよ！」

花蓮父「まだそんなこと言っていたのか！」

花蓮母「だって事実でしょ！そこんとこどうなのよ！人殺し！」

真司「っ！…瑞希、やっぱり俺帰るよ。俺は一生花蓮ちゃんの罪を背負って生きなきゃならないから」

花蓮母「あら、人殺しにしては殊勝な考えじゃないの。そう思うんなら2度とここに来ないで！」

花蓮父「あれは彼のせいじゃない！お前ももうそれはわかっているんだろ！」

瑞希「そうです！花蓮ちゃんはそのことはシン君にバレないようにいろんなところで口止めていたんです！シン君が気づくはずありません！」

花蓮母「そこじゃないわ！こいつが花蓮の気持ちに気づいていればこんなことにならなかったはずよ！」

真司「気持ち？」

瑞希「確かにそうかもしれない！でもそうじゃなかったかもしれない！確かにシン君は鈍感で朴念仁でどうしようもないですけど！花蓮ちゃんも私もこのままのシン君が好きなんです！」

真司「…？…？」

花蓮父「別に鈍感でもいいじゃないか。僕は花蓮が好きになったのが彼で良かったと思ってる。きっと彼が彼だから花蓮も好きになったんだよ。」

花蓮母「それは…」

真司「花蓮と瑞希が俺のこと好き？…？それまじ？」

瑞希「シン君は1回黙ってて」

真司「アツハイ」

瑞希「それでもシン君が悪いと言えますか？こんなにも優しい人にこれ以上罪を背負えと本気で言えますか？」

花蓮母「……………」

花蓮父「君ももう心のどこかで許してたんじゃないかい？彼はもう十分花蓮のために苦しんだんだよ？」

真司「おじさん、もういいんです。おじさんも瑞希もこんなに俺のことを想ってくれた、それでいいんです。おばさん、僕はここに来なければならぬ理由があります。ここに両親の墓があるからです。長男として両親の墓は墓参りをしなければならぬ。でも花蓮の墓には一生近づきません。何があってもです。それじゃダメですか？」

花蓮父「両親の墓？」

真司「俺が背負わなければならぬもう一つの罪です。あの時俺がわがままを言わなければここに来ることにも兄弟が離散することもなかったと思っています。だからこの寺だけは許して欲しいんです。親不孝な息子がただ一っだけ親のためにしてあげられることをしてあげたいんです。それでもこの3年間、向き合えなくて親を待たせました。俺はどうしても自分の罪を、3人に増えた十字架を背負う勇気が持てなかった。それを彼女が、瑞希が向き合わせてくれた。勇気をくれたんです。その想いも無駄にはしたくないんです。よろしくお願いします！」

花蓮父「彼の想いに答えてあげて？」

花蓮母「……………わかったわ。なら約束しなさい。1つは毎年ここへ来て花蓮に1年間何があったのかを報告すること。もう一つは花蓮の分まで長く生きること。これが今の私にできる最大の譲歩よ。あなたがどれだけ謝ろうと私はあなたを憎み続ける。これはこれからも変わらないことよ。おそろく一生ね。だからここで誓いなさい。花蓮の分まで生きると」

真司「っ！ありがとうございます！」

花蓮母「それじゃあ私たちはもう行くわ。私の気が変わらないうちにとつとと行きなさい」

真司「はい！」

タツタツタツタツ

花蓮父「あれでよかったのかい？」

花蓮母「彼は無意識なのか意識的なのかはわからないけど自分を責めて欲しがっている。それは危なっかしい精神状態なの。本当は今すぐカウンセリングを受けて欲しいレベルだけどそれはおそらく彼が拒否するでしょう。ならば彼を責めてあげるほうがまだ精神を保っていられるのよ。それにしても辛かったわ。本当は私も許してあげたいんですもの。あなたも損な役回りさせてごめんなさいね。姫路さんにも後で謝っておきましょう」

花蓮父「君が選んだ道なら僕は何も言わないよ。黙って背中を押すだけさ。それにしてもあれはどこまでが君のシナリオだったんだい？」

花蓮母「瑞希ちゃんの暴露大会以外は全てよ。あの子があそこまで誤爆するのは流石に予想外だったけど笑笑」

花蓮父「でもよかったんじゃないかな。彼には花蓮の分まで幸せになってもらわないと」

花蓮母「そうね。今夜は花蓮が好きだったカレーにしましょう？」

花蓮父「僕らもしっかり向き合わなきゃね。それじゃあ材料を買って帰ろうか」

花蓮母「ええ」

一方走っていった真司と瑞希

真司「瑞希、ありがとうね。あんなに心配してくれてるとは思わなかったよ」

瑞希「(ーーー／＼) 大丈夫だよ？ 全て本心だから」

真司「え？ じゃあ瑞希と花蓮が俺のこと好きだっていうのも…？」

瑞希「女の子にそんなこと聞かないですよ！ もう！ あんな形で言うつもりじゃなかったのに…」

真司「え？…え？」

瑞希「あの一…せつかく女の子が勇気を出して告白したのに何もないの？」

真司「あ、いや、そんなわけじゃないんだけど…」

瑞希「じゃあ、どういうわけなの？」

真司「いや、瑞希とか花蓮とかは別の誰かのことが好きだと思っただけだし、俺なんかはそうは思われることはないと思っただけだし、そもそも好きだったのでわからんし…」

瑞希「それならシン君が答えを出すまで待つよ！」

真司「いいのか？俺がお前を選ぶとは限らんぞ？」

瑞希「それでもいいよ？私は私にできることをやったし、その上でダメなら諦められるよ」

真司「すまない…迷惑をかける」

瑞希「このくらい、迷惑とは思わないよ？それじゃあお墓参り、しよ？」

真司「そうだな。まずは花蓮か」

瑞希「花蓮ちゃんはお墓の中で暴れまわってる気がするね笑笑」

真司「ああ、それが一番しつくりくる笑笑」

パンパン

真司「花蓮、あれ以来か。もう5年も経つんだな。あの時気づいてあげられなくてごめんな？ここにも来てやれなかったし。随分と待たせたな」

花蓮「本当だよ。罰として瑞希にしつかり向き合いなさい。泣かしたらぶん殴るわよ」

真司「ハハッ、お前らしいや。大丈夫だ、どんな結論になっても瑞希は俺が守る。織田家の血に誓おう」

花蓮「それなら大丈夫そうね。また来年も来てくれるんでしょ？しつかり上から見守ってあげるからあんたは幸せになりなさい。これがアタシの最後の願いよ」

真司「ウツ…ウウ…ごめんな、ごめんな。あの時守れなくて本当にごめんな…」

花蓮「泣くな、バカ。アタシが見たいのはそんな縮こまった姿じゃないよ。もっと笑ってどっしり構えてなさい」

真司「ああ、そうする。だから今は、今だけはここで泣かせれくれ

…」

花蓮「あんたが泣くのは珍しいからここで出し切りなさい。あんたの親の前で泣いたりしたら呪い殺すわよ?」

真司「ウウ…ごめんな、ごめんな」

瑞希（シン君…今は泣いていいんだよ?花蓮ちゃんの前で思いつきり泣いて全部吐き出そ?）」

真司「ふう…ありがとな、花蓮。おかげで憑き物が取れた気がする」

花蓮「そういうのはオネエサンに任せなさい!アタシが全部受け止めてあげるから」

真司「お前…やっぱりバカだろ?笑笑」

花蓮「可愛くて聡明なアタシに向かってよりによってバカ、ですつて!?!気が変わったわ。今すぐぶん殴る!絶対によ!」

真司「そういうとこだよ笑笑」

花蓮「ムキーーーー!!」

真司「じゃあまた来るよ」

花蓮「あ、待ちなさい!今すぐぶん殴るから!…つてもういないか。サヨナラ、アタシの初恋…あいつが幸せになれないなら、カミサマ、あんたを呪うわ」

瑞希「随分と話し込んでましたね」ポンパン

真司「ああ、悪い。5年ぶりなんだ、そんなに怒るなよ笑笑（そんなに頬つぺた膨らまして…お前はリスかよ…）」

瑞希「次はおじさんとおばさんのとこだね」

真司「うええ…あの2人絶対怒ってるよ…」

瑞希「3年間来なかったシン君が悪いんだよ?たっ君は月命日の度に来てたのに…」

真司「それは悪かったと思ってる…」

瑞希「さ、とりあえずお参り、しよ?」

真司「あ、ああ」

パンパン

真司「とーさん、かーさん、元気してつか?この3年間来れなくてごめんな。後、あの時わがまま言っでごめん。本当はわかってたんだ

父さんが決勝には来てくれるって。カレンダーのその日は赤く、でっかく丸してあったから。でも決勝の先発は俺じゃなかった。だから俺が投げる準決勝を見に来て欲しかったんだよ。だから：だから、もう弱音は吐きたくないし、人に迷惑をかけることは許されない、そう思ってたんだけどなあ：今日学校の友達にも、瑞希にも言われたよ。もつと人を頼れって。まあ瑞希には昔から言われてたけどさ。だから少し、弱音を吐いてみるよ。それがどんなことであっても、ね」

真司父「お前はそんなこと気にしなくてもいいんだよ。あれは俺の不注意が起こした事故、だったんだよ。今はまだ無理かもしれない。でもいつかでいいんだ。それを克服するのなんて。その時はきつと気付かせてくれた学校の友達や瑞希ちゃんが助けになってくれるさ。」

真司母「そうよ。真司は誰かに似て不器用さんだから少し難しいかもしれないけど、何かあったらここに来なさい。話くらいは聞いてあげるからね」

真司「うん、うん、ごめんね、とーさん。ごめんね、かーさん。ウウ」
真司母「真司、男の子で猛のお兄ちゃんなんだからこんな時くらい教えたこと守りなさい？こういう時はごめんで謝るんじゃないって言うの？」

真司「うん、とーさん、かーさん、ありがとう。ここまで息子は成長しました！ウウ」

真司父「俺たちにとって真司と猛はいつまで経っても可愛い可愛い息子なんだ。このくらいさせろ」

真司母「もう！あなたつたら本当不器用ね！なんで不器用なところも鈍感なところもあなたに似たのかしら？遺伝の力って怖いわね笑笑」

真司父「かーさん、俺は恥ずかしくて死にそうだ」

真司母「あら、私たちもう死んでるのよ？笑笑」

真司父「そういえばそうだったな笑笑」

真司「とーさんとかーさんが元気そうでよかったよ。また来るから」

真司母「今度は彼女の1人や2人くらい連れてきなさいよ笑笑」

真司父「いや、かーさん、2人はまずいだろ」

真司母「あら、そうね笑笑」

真司「じゃあね笑笑」

瑞希「随分話し込んだみたいだね笑笑」

真司「俺は何を難しく考えていたんだらろうな笑笑」

瑞希「本当だよ。不器用なんだから笑笑」

真司「お前までかーさんと同じことを言うのかよ…」

瑞希「もちろん♪」

真司「……………いよいよ、だな」

瑞希「次はAクラスだもんね。どんな人たちなんだろう?」

真司「関わりあるのが2人しかいないからな、なんとも言えん」

瑞希「へえ、誰?」

真司「お前も知ってるだろ?秀吉の姉と猛の義姉だよ」

瑞希「木下優子さんと霧島翔子さんだっけ?」

真司「そうだ。学校の中案内してもらったりしたからな」

瑞希「そうだったんだ。じゃあ、帰ろっか」

真司「(なんかそっけない?)あ、ああ、そうだな。遅くなったし家

まで送るよ」

瑞希「いや、さすがに申し訳ないよ」

真司「どの道今はあの家の隣のアパート住んでんだ。帰る道、一緒

だろ?」

瑞希「そうなの?じゃあ一緒に帰ろ?」

真司(おじさん、おじさんが言ってたこと、なんとなくわかりまし

たよ…この笑顔は…反則だ…)タラー

お前もう完全に好きじゃん!まじで!イライラするわあ…

く瑞希の家前く

真司「お前ん家ここだろ?どうした?入んないのか?」

瑞希「まあまあちよつと待っててよ笑笑」

真司「?」

瑞希父「瑞希と一緒に帰るなど言語道断!なんだ君は…真司…君?

…え？」

瑞希「お父さん？そういうことはやめてって言ったよね？」ニツコ
リ

瑞希父「瑞希？落ち着いてくれないか？こ、これはだな、瑞希に近
寄る羽虫を…黙らせ…ようと…」

瑞希「お父さん？そんなことをするお父さんは嫌いだよ？」

瑞希父「え？嫌い？嫌いって…うあああん」

ガチャバタン

真司「家ん中入るの速っ！」

瑞希「もう！あれだけやめてって言ったのに続けたお父さんが悪い
！」

真司「まあまあ、おじさんも悪気があったわけじゃないんだからさ。
そこはわかってあげて？」

瑞希「それでもお父さんは過保護過ぎるよ！」

真司「過保護でもいいじゃないか…それでも会えるんだから…」

瑞希「シン君、ごめん」

真司「いいんだよ。さ、おじさんと話してきな？」

瑞希「うん。シン君、また明日」

真司「おう、また明日」

く真司家前く

ガチャ

真司「おーい、クソババア、帰ったぞ。」

カヲル「何だい？随分遅かったじゃないか、クソジヤリ」

真司「墓参りに行っててな」

カヲル「そうかい。これでも私は忙しいんだ。とつとと飯食って寝
な」

真司「クソババア、その口癖、直せって言ったよな？」

カヲル「私はクソババアなんて呼ぶクソジヤリの言うことなんぞ聞
かないよ。黙って飯食って寝な」

真司「そうかい。そつちがそのつもりならこつちにも考えがある」
カヲル「おや、私を脅すつもりかい？暇なこつたねえ」

真司「わかった。あんたはしばらく飯抜きだ。とつととくたばれ、クソババア」

カヲル「悪かったさね」平身低頭

真司「わかればいい」

カヲル「仕方ないね。ま、とつとと寝な」

真司「そうさせてもらう」

こうしてAクラス戦宣戦布告前最後の夜が明ける。

挑め!・最強”のFクラスの集大成

真司「おはよう、瑞希。早いね。…どうしたの?随分疲れている様だけど」

瑞希「お父さんが拗ねて大変だったんだよ…」

真司「そりゃ休まらんわな」

瑞希「パト??ツシユ、疲れたろう?私も疲れたんだ…なんだかとても眠いんだ、パト??ツシユ…」

真司「瑞希、落ち着いて!それ死ぬやつだから!しかもその作品はまずいつて!」

瑞希「私はこの戦争が終わったら、シン君に告白するんだ…」

真司「別の死亡フラグまで建てないで!瑞希つてそんなキャラじゃなかったよね!?!お願いだから戻って!」

〜数分後〜

瑞希「…死にたい…」カオマツカ

真司「あんまり溜め込んだらダメだよ?」

さあ皆さん声を揃えて言いきましょう。

『お前が言うな!』

真司「落ち着いたのなら学校行く?おじさんには後で俺からも言うてあげるから」

瑞希「お願いするね…」

〜Fクラス〜

真司「おはよう」

瑞希「おはようございます」

雄二「おう、やっと来たか。遅れるのかと思ったぜ」

真司「色々あったんだよ。瑞希のお父さんが、ね…」

猛「あの親バカがまたなんかやらかしたのか?それは災難だったな、瑞希」

瑞希「後でたつ君もお父さんの説得に協力してくれる?」

猛「ああ、いいぞ。あの親バカは誰かが殴らんと正常に戻らん」

雄二「おい、真司。何があったんだ?ボーっとしてみたり周りを

キヨロキヨロしてみたり」

真司「ああ、雄二か。ちよつと廊下で話そうか。あまり人に聞かれたくない。」

雄二「構わんが、今日はAクラスに宣戦布告に行くんだぞ？しつかりしてくれよ」

ガラガラ

真司「実はカクカクシカジカってことなんだけど」

雄二「はあ!?!姫路に告白された!?!」

真司「雄二、声がでかいよ。それでどうすればいいと思う？俺は瑞希をどう思ってるのかわかんないし」

雄二「お前、それ本気で言ってるのか?」

真司「本気で言ってるなかつたらこんな相談お前にしてねえよ。エヘヘヘ」

雄二「オー??リーの漫才するなよ…それでどう思ってるのか、だっけか?それお前、自分で気付いてないのかよ…こりや姫路が苦勞するわけだ」

真司「なあ、真面目な話なんだよ。ボケんな」

雄二「オー??リーに走った奴が言うことか?それ。仕方ない、俺が助言してやろう。お前心の中でいいから誰か女を思い浮かべてみる」

真司「瑞希だね（即答）」

雄二「（おいおい、これで気づかぬえのかよ…よほどの重症だな）じゃあそいつが他の誰かと手を繋いで歩いているのを想像しろ」

真司「その男を八つ裂きにして東京湾に沈めるね（即答）」

雄二「（独占欲まで強いときたか）それが好きってことだ」

真司「へえ…?…?じゃあ何?俺ってそんなに瑞希のこと好きだったの!?!」カオマツカ

雄二「お前にそんな弱点があるとは思わなかったな。それで?どうするんだ?」ニヤニヤ

真司「まだわかんないよ。でも、それなら雄二はAクラスのあの子に対してそう思ってたんだ」ムツ

雄二「なっ!翔子は今関係ないだろ!」カオマツカ

真司「俺あの子としか言っていないよ？そっかあ、霧島さんかあ。雄二も隅におけないね」ニヤニヤ

雄二「お前さつきまで激しく動揺してたくせに…」

真司「俺からかうのは好きだけどからかわれるのは嫌いなんだよ。からかうなら相応のカウンターを食らってもらおうよ？」ニツコリ

雄二「お前が敵じゃなくて本当に良かった…」ゲツソリ

真司「さ、Aクラスに宣戦布告に行こうか。メンツは？」

雄二「お前以外全員揃っているぞ。おい、お前ら、行くぞ」

明久「もういいの？」

秀吉「それじゃ行こうかの？」

猛「姉さんクラスの中で浮いてないかなあ？大丈夫かなあ？」

康太「……………シスコン」

くAクラスく

ガラガラ

雄二「失礼する！Aクラスの代表はいるか？」

優子「代表はいないからアタシが話を聞いわ」

雄二「そうか、と言っても何の話かはわかってるんだろ？」

優子「そうね。大方、宣戦布告でしょう？」

雄二「その通りだ。話が早くて助かる。だが、1つだけ”お願い”

がある。代表同士の一騎打ちにしないか？」

優子「そう、だから昨日Bクラスを来させたのね。あんたたちのおかげでこっちはトラウマものよ。…それで？何が狙いなのか？」

雄二「もちろん、俺たちFクラスの勝利だ」

優子「そう、でも却下ね」

雄二「姫路が出てくるのを心配しているのか？それなら安心しろ。出るのは俺だ」

優子「その言葉、信用できると思う？これは戦争よ？代表が負けるとは思わないけどもし代表が調子悪くて姫路さんが調子良かったら万が一が起こりかねないし、転校生君が日本史で出てきたらさすがにこちらに勝ち目はないわ」

雄二「それもそうだな。ところでCクラスのこと、すまなかったな。

あれは俺の指示で秀吉がやったものだ。本人はやる気でなかったし、あの言葉は台本だ。秀吉は悪くない」

優子「だと思っただわ。あれを本心でやってたらアタシに殺されたいとしか思えないもの」

雄二「そうか。話を戻すが責任が1人にならなければいいのだろう？なら、7人VS7人の一騎打ち7回勝負でどうだ？」

優子「それなら…でも…うーん…」

??「……………受けてもいい」

優子「代表？戻ってきてたの？」

翔子「……………今戻ってきた。それで雄二の提案は受けてもいい。ただし負けた方は勝った方の言うことをなんでも1つ聞く」

雄二「いいだろう。交渉成立だ。科目の選択権はこちらがもらうぞ？」

優子「…ああもう！そこまでは飲めないわ！選択権はこちらが3つもらうわよ！」

雄二「わかった。それじゃあ10時開戦でいいか？」

翔子「……………望むところ」

雄二「それじゃあ後でな」

ガラガラ

雄二「おい、真司、猛、翔子が入ってきてからニヤニヤするな。何がそんなにおかしい？」

真司「いやあ、ねえ？」ニヤニヤ

猛「なあ？」ニヤニヤ

雄二「お前ら兄弟が仲良いのはわかったからもうやめろ」

真司「だ、そうですねよ、霧島さん」

猛「あらあら、藤堂さん。気付いてないんですの？あれは彼なりのテレ隠し、でしてよ？」

真司「あら、それは気づきませんでしたわ」

猛「だからこういうときはすることが決まっていますの」

真司「あら、そのくらい私にもわかりましてよ」

猛「それでは揃ってやりましょうか？せーの」

真司、猛「ニヤニヤ」

雄二「だーっ！もうやめろ！」

明久「雄二、うるさいよ。雄二が霧島さんのこと好きなのはわかったから。でも残念だったね。なんてったって霧島さんは……」

真司「明久さん？それは勘違いでしょ？彼女は……」

雄二「やめろ！それ以上言うな！それからその喋り方もやめろ！」

真司「もう少しイジっていたかったけど仕方ない。戦争が終わってからやらせてもらおう」ニヤニヤ

猛「奇遇だね、兄貴。俺もそう思っていたところだ」ニヤニヤ

明久「え？どういうこと？ねえ、真司、今何言おうとしたの？」

雄二「明久、お前もー回黙れ！」

真司「後で教えてやるよ」ニヤニヤ

明久「わかった。ムツツリーニと秀吉はその話知ってるの？」

康太「……妬ましいが知っている」

秀吉「わしは知らぬが想像はつくのう」ニヤニヤ

雄二「秀吉、お前もか！」

真司「カエサルみたいなこと言わないでよ。明久がネタに反応できないだろ？」ニヤニヤ

雄二「真司、いい加減にしろ。殴るぞ？」

真司「そしたら社会的に縛るよ？」

雄二「何をやる気だ！」

真司「えー？それ今言わなきやダメー？」

雄二「大体予想ついたからいい。それだけはやめてください。すみませんでした」

明久「雄二ってこんなに弱かったっけ？」

猛「兄貴が強すぎるんだよ。雄二が弱いわけじゃない」

明久「そっか。確かに真司が口喧嘩で負けたとこ、見たことないしね」

猛「そういうこと。お、教室に着いたぞ」

ガラガラ

真司「瑞希、答えが出た。Aクラス戦が終わったら屋上に来てくれ

ないか?」

瑞希「いいけどもう出たの?早くない?」

真司「優秀な友人を持ったようだな。相談したらものの5分で答えが出た」

瑞希「すごい…ちなみに誰なの?」

真司「我らが代表クンだよ。あいつがそこまで優秀だとは思えなかったけどな笑笑」

瑞希「そこまで言わなくてもいいんじゃないかなあ…苦笑」

雄二「それじゃあAクラス戦の作戦を伝える!と言っててもAクラス戦は7VS7の個人戦だ!よってここで出るメンバーを発表する!まず1人目、藤堂真司!」

真司「俺が最初?」

雄二「そうだ。確実に勝ちに行きたいからな。向こうはお前の実力を知らない。だからおそらくお前が文系タイプの人間だと思ってるはずだ。ならば1/3の確率で数学を引ける!だからお前は科目選択権を使うな」

「確かに!これはもらえるぞ!」

雄二「次に2人目、吉井明久!科目選択権は使うな」

明久「僕も出るの!?!」

雄二「ああ、お前の本気の操作を見せてやれ。おそらく腕輪持ちでなければ勝てるはずだ」

明久「ふっ、仕方ないなあ」

「あいつって実はスゲー奴なのか!?!」

雄二「そして3人目、土屋康太!もちろん科目選択を使え。保健体育でお前が負けるのはあり得んしな!」

康太「……………当然」

「ムツッリーニ!これは勝てる!」

雄二「真ん中の4人目、霧島猛!科目選択権を使って家庭科で必ず勝て!」

猛「ま、そうなるわな」

「来たぞ!家庭科の神だ!」

雄二「次に5人目、木下秀吉！古典ならば勝ち目があるはずだ！」
秀吉「古典ならAクラス並みの成績は取れるのじゃ」

「秀吉！付き合ってくれ！」

秀吉「わしは男じゃ！」

雄二「6人目、島田美波！」

美波「ウチ!? 瑞希は出ないの!?!」

雄二「何を言っている? こんな状態の姫路をお前は使えと言うのか?」

瑞希 チーン

美波「わ、悪かったわ。それで? ウチは数学以外なら戦力にならないはずだけど?」

雄二「周りを見てみる。お前以外に戦力があるか? それに科目選択権は使ってもいいぞ」

美波「え? それはさつきと話が違うじゃない。最後は坂本が選択権を使うんじゃないの?」

雄二「最初はそのつもりでいたが、最後くらい神童と呼ばれた力を見せてやろうと思っただけ。新学期初日から力は貯めていたから問題ないぞ」

美波「それならウチが使わせてもらおうわ」

「島田ってやつぱり凄かったんだな! 流石は『彼氏にしたい女子ランキング』の覇者だ!」

美波「それは余計なお世話よ!」

雄二「大将戦は俺が出る。さつき言った通り神童と呼ばれた力を見せてやるよ」

「流石元神童！期待してるぞ!」

真司「嫁さんにいいとこ見せないとな」ニヤニヤ

雄二「それはもうやめろ! 俺に嫁はまだいねえ!」

真司「まあそう言うことにしといてあげるよ」ニヤニヤ

雄二「はあ…最後に補欠だ。何かあるかわからんから一応決めておいた。姫路瑞希! お前が最後の砦だ」

瑞希「私ですか?」

美波「ちよつと坂本！話が違うわよ！瑞希は出さないんじゃないよなかつたの!?!」

雄二「俺もそのつもりでいたんだが、何があるかわからんのでな。一応控えに回ってもらおう。大丈夫だ。おそらく出番はない。ただ、引き分けた場合は出てもらうかもしれない」

瑞希「わかりました！頑張ります！」

「姫路さん！」

「結婚してください！」

瑞希「え？ええと…ごめんなさい…」

真司「ゴゴゴゴゴ」

雄二「ただの茶番だ。だからその殺気を収めろ、真司」

真司「べつつにいく。怒ってないし」

雄二「拗ねてるだけか。それじゃあ野郎ども！戦争の準備だ！」

「オオオオオオオ!!!」

こうして決まった作戦。しかしこれこそが真司のトラウマを刺激する結果となってしまうたのだった…

開戦！明かされる闇

午前10時

Aクラスに集まったのはこのクラスを使っているAクラスの人間
だけではなかった。

「オオーーーー！！すげえぞ、これ！すげえ設備だ！」

「俺もうちのクラスを使えるのが楽しみだ！」

雄二「落ち着け。お前らが出るわけじゃないが浮かれるのはまだ早
いぞ？」

そう、言わずもがなFクラスの面々である。ただ圧倒されて浮かれ
ているだけではあったが。

高橋「それではAクラスとFクラスの試召戦争を始めます。第一試
合の代表者は前へ！」

雄二「真司、勝ってこい」

真司「なっ！お前は！」

??「おや、僕の相手は君でしたか？織田真司くん？いや、今は藤堂
と名乗っているのでしたねえ」

「織田？あいつって藤堂じゃなかったか？」

雄二「まずいな。あの感じだと真司の過去を知っている人間だ。と
いうことは苦手科目も知られている可能性が高い……」

明久「高城君は知ってるよ。真司の点数も、抱えたトラウマも……」

雄二「トラウマ？親の事故のことか？」

明久「それは僕の口からは言えない。ただ違うとだけは言っておく
よ」

雄二「そうか」

真司「高城大雅（たかしろたいが）、お前もここにいたのか」

瑞希「高城君!!」

大雅「瑞希サンもいらっしやっただんですね？どうです？そろそろ人
殺しから離れたくなっただんじやないですか？」

猛「大雅！それ以上喋るな！」

優子「転校生君が人殺し？」

「おい、藤堂が人殺しってどういうことだ？」

瑞希「シン君は人殺しじゃありません！訂正してください！」

ざわざわ、ざわざわ

大雅「皆さんも気になっていらっしゃるようですし、教えてあげましょう」

明久「やめろ、高城君！やめてくれ！」

大雅「皆さんも記憶にはあるでしょう？『睦月小女子児童自殺事件』の話を。あれは全て、この織田真司が原因だったんですよ。だから彼は人殺しなんです。彼女の精神を傷つけ、自殺に追いやったんですからね」

「おい、それって…」

「ああ、睦月小で当時小学6年生の女子児童が自殺したって話だ。生きていたら俺くらい歳のだろ？関係者がこんなところにいたとは…」

大雅「おやおや、Fクラスの皆さんも知らなかったんですか？ダメじゃないですか、織田真司くん、クラスメートに隠し事をしては。つくづく君は罪作りな人、ですねえ。花蓮サンを自殺に追い込んだ君が現場の近くでのうのうと生活しているなんて彼女のご両親に知られたらどうなってしまうのでしょうか。ねえ、人殺しくん笑笑」

明久「高城、テメエぶっ殺してやる！」

大雅「おやおや吉井くん、進級できていたんですねえ。それで脅迫ですか？それは立派な犯罪ですよ？Fクラスから犯罪者が2人も出るなんて、この学園の評判が落ちてしまいいそうなんですなえ」

猛「大雅テメエ！」

大雅「おや、そちらには人殺しの弟くんもいましたか。やはりFクラス、ロクデナシな生徒しかいませんねえ。これでは瑞希サンがかわいそうだ。どうです？瑞希サン、こちらのクラスに来ませんか？」

瑞希「高城君！最低です！ふざけないでください！シン君もたっ君も明久君もあなたの言うようなロクデナシではありません！それに例えクラスが変わったとしてもあなたやあなたのお兄さんのいるところなんて絶対に嫌です！」

大雅「おや、私も兄も嫌われてしまいましたか。しかし、あなたもあのとき織田真司クンを責めていませんか？人を殺しておい

て逃げるのか、と。」

瑞希「そんなこと言っていないません！捏造しないでください！」

真司「いいんだ、瑞希。俺は花蓮を殺したも同然なんだよ」

瑞希「シン君は罪の意識に囚われすぎ！あれはシン君のせいじゃないって何度も言ったでしょ！」

大雅「おや、そちらの人殺しは罪を認めていたようですねえ。この場にいる皆さん！やはりあの事件は彼が仕組んだことなのでしょう？皆さんも聞きましたよねえ。あなた方は彼の術に騙されていたのですよ笑笑」

「あいつ、やっぱり人殺しなのか？」

「Bクラス戦の時のあの殺気を考えてもそういうことなんだろう。信じたくはないが」

「Bクラス戦といえれば我らが姫路さんを戦死させたのって藤堂じゃなかったか？」

「あの転校生って最低なのね」

「この学校から出ていきなさいよ！犯罪者！」

瑞希「皆さん、やめてください！Aクラスの皆さんはシン君のことを知らないからそんな酷いことが言えるんです！関わったこともないのに酷いこと言わないでください！それにFクラスの皆さん！あなた方はシン君の何を見てきたんですか！シン君は誰かのためにたった1人で矢面に立って傷ついている人です！なんで、なんでクラスメートを信じられないんですか！」

優子「そうね。アタシも関わったのは少しだけだけど彼はそんな人には見えなかったわ」

翔子「……………真司は不器用だけど優しい」

秀吉「少し不器用すぎるのが玉に瑕じゃけどな？」

雄二「だがあいつは俺を悪鬼羅刹から救い上げた男の兄だ。それだけでも信用できる」

康太「……………親友だから信じる」

美波「そうよ！真司がいてくれたからウチたちは楽しく過ごしたのよ！」

瑞希「美波ちゃんの言う通りです！私はシン君がいたからここまでこれたんです！」

「そうだった！クラスの中心にあいつがいたから今までも勝てたんだ！」

「藤堂、疑って悪かった！」

「頑張れ！藤堂！俺たちはお前を信じるぞ！」

「立て！立つんだ！藤堂！」

「あいつに！撃喰らわせてやれ！」

「藤堂！藤堂！藤堂！藤堂！」

「と・う・どう！と・う・どう！」

大雅「…信じられない！彼は君たちに自分が人殺しであることを隠して接していたのですよ!?!」

「まあ人には言えない悩みって1つぐらいあるもんな」

「どうせあいつのことだ。また何か庇ってんだろ？」

「全く、1人で抱え込むっての」

「少しは人に頼れよな」

「おい、それ、今の今まで疑った俺らが言える話か？」

「違ういな」

「アハハハハ笑笑」

大雅「やはりFクラスはバカばかりだ！何も考えちゃいない！」

「でも代表が信じるんなら、ねえ」

「どうする？」

「代表も木下さんも信じてるなら少し考えてみようかな？」

大雅「なっ！Aクラスの皆さんまで！おのれ、織田真司め！これも全てお前の策略か！強いものを洗脳して自分の味方につけ、周りを煽動する気だな！僕は騙されんぞ！」

「高城君で何でそんなに転校生君を目の敵にしてるんだろう？」

利光「わからないけどなんか今の彼はなんか信用できないよ」

大雅「くっ！まあいい。勝てば官軍負ければ賊軍だ！勝てばいいんです、勝てば！高橋先生、英語でお願いします！」

高橋「今は試召戦争中ですので承認しますがあなたの行為は称賛さ

れるべきものではありません。特に模範となるべきAクラスの生徒の言動ではありません。ですので勝つても負けても職員室まで来てもらいます。いいですね?」

大雅「何故です!何故この僕が職員室に呼ばれなければならないのです!」

高橋「それは今説明した通りです。拒否権はありませんので勘違いしないでくださいね。」

大雅「くっ!試獣召喚(サモン)!」

高城大雅 英語 568点

「なっ!高すぎるぞあいつ!」

大雅「どうです?僕はこれでも海外にいたこともありましたからね。英語の点数は霧島さんを超えて学年1位です笑笑」

真司「……………」

高橋「どうしましたか?藤堂君。早く召喚しないと敵前逃亡とみなしますがよろしいですか?」

真司「……………」

瑞希「シン君!戦ってください!Fクラスの、皆んなのために!」

真司「…わかったよ。瑞希にここまで言われたんだ。もう引くわけにはいかないよな。高橋先生、遅れてすみません。試獣召喚(サモン)!」

藤堂真司 英語 168点

大雅「点数が上がっている!」

雄二「真司の英語が3桁いつているだ?!」

「おおっ!藤堂の英語が上がっている!」

「あれだけ言語を避けて通ってきた人間がついに英語をやり始めた!」

真司「これだけ瑞希に言われたんだ。俺だって勉強するさ。それも鉄人のところで、な。ま、本当は腕輸出るくらいになってから見せるつもりだったんだが…」

瑞希「シン君…」

高橋「それでは第一試合、始め!」

大雅「君の点数は少し意外でしたがその程度の点数で僕に勝とうと言うのですか!？」

真司「お前は知らんかもしれんが、この戦争では点数が全て、と言うわけではない。低い点数でも俺たちは、”最強”のFクラスは、下克上を果たしてきたんだ!それに俺は瑞希を怒らせた。それがどういうことか、忘れたわけではあるまいな?」ゴウツ

「来たぞ!魔王モードだ!」

「あいつ最初から全力だ!」

大雅「っ!しかしこれはどうでしょう?腕輪発動!」

シーン

「なあ、あいつ腕輪使ったのに何も起きないぞ?」

「奴の妄想か?」

大雅「どうやら僕の腕輪の能力は誰も知らないみたいですねえ。点数をご覧くださいよ、Fクラスの皆さん?」

高城大雅 英語 852点

「なんだありやあ!?!」

「点数が増えたぞ!」

「あれは反則だろ!?!」

大雅「皆さん、驚いてくれたみたいですねえ。実はまだ能力があるんですよ笑笑」

「何!?!1つの腕輪で2つの能力だど!?!」

「イカサマだっ!」

大雅「酷い言われようですねえ。ま、これで彼を合法的に殴ることが出来ます笑笑」

「どういうことだ?」

「俺も知らんぞ?」

「どうなんだ?」

「バカ!俺に聞くな!俺が答えられるわけないだろう!」

大雅「こういうことですよ、オラツ」

真司「グワァー!」

瑞希「っ!シン君の召喚獣が切られたところと同じ場所から出血し

ています！どうして!?!シン君は観察処分者じゃないのに!」

大雅「瑞希サンもそんなところで人殺しに洗脳されてるからこんなこともわからないんですよ?やはりあなたはFクラスに行くべき人ではありませんでしたね。バカなFクラスの皆さんに教えてあげましょう!私の腕輪の能力は自分の点数を1.5倍にし、相手の召喚獣がに80%のフィードバックを与えるといるものなんですよ。それから僕の点数がこれで800点を超えたので2つ目の腕輪も使えますねえ。こちらは:回復ですか!これは奴を痛ぶれそうだ!織田真司、あなたはただでは終わらせませんよ?惨たらしく彼女と同じくらいまで痛めつけてあげます!それが彼女への手向けとなるでしょう」

藤堂真司 英語 198点

「あいつ腕輪を相手に使ったぞ!」

「痛ぶる気だな!」

「最低だ!」

大雅「酷いですねえ、Fクラスの皆さんは。僕はただ、花蓮サンが殺された無念を晴らそうとしているだけなのに。あ、そうでした、そうでした。君は確か左手を壊したんですかね?それでは」

ザンツ

真司「うわあああ!」

大雅「おや、避けたんですか。彼女は君のせいで自ら命を絶ったというのに。まあ掠った形になりましたが左手へのダメージは入ったようですね?」

ザンツザンツザンツ

真司「ガアアアアア」

「おいやめろ!このままじゃ藤堂が死んじゃう!」

「何か手はないのか!?!」

「あいつ怪我してる左手を狙うなんて卑怯じゃないか!」

大雅「相手の弱点を責めるのは戦の基本ですよ?それにいうではありませんか。卑怯汚いは敗者の戯言、とね。悔しかったら僕みたいな点数を取って見たらどうです?まあバカなFクラスには一生かかっ

でも無理でしょうけどね笑笑」

瑞希「もうやめてください！見てもらえません！」

大雅「瑞希サンまで言いますか。いいでしょう。他でもない瑞希サンの頼みならば聞いてあげないこともないですよ？但し、瑞希サンが僕のものになるなら、ですけどね」

瑞希「わかり：真司「やめろ瑞希。そいつに従う必要はない」なんで！私はもうこれ以上シン君が傷ついていくのを見てるだけは嫌なの！」

真司「まだ俺は負けちやいないぜ？わざわざこいつが回復してくれ
たおかげでな」

藤堂真司 英語 106点

瑞希「でも！」

真司「でもストもあるか、アホ。壊れてんのは左手だけだ。まあ腹は切られているが大したことはない。まだ右手があんだよ」ハア
ハア

Aクラス戦は最悪の始まり方で始まった。果たして真司は、Fクラスは勝つことができるのであろうか…

限界突破！闇をぶっ飛ばせ！

真司「まだ右手があんだよ」

確かにそこに嘘はない。しかし、もう真司の体は限界が近いのであった。それもそのはず最初から点数差が4倍と明久であつても勝てる点差ではないのだ。

真司「まだ完成してなかったから出したくはなかったが使うしかあるまい。行くぞ、高城大雅！流派東??不敗が最終奥義、石破天??拳！」
ちよつと？真司クン？君、それはまずいって！ガン??ムはまずいって！ただでさえ誰かさんがフ??ンダースの犬やっちゃってんのに！
なんで君たちはそんなに他作品のものを出したがるの!?タグだけじゃ抑え切れないよ!?

大雅「なにつ!?!まだ立ち上がるだど!?!しかもこの僕の召喚獣に傷を与えただど!?!まあこの点数差なら大したダメージでは…:なつ!?!」

高城大雅 英語 307点

真司「大したダメージが、なんだって?次1発当てれば俺の勝ちだぞ?」

大雅「500点越えのダメージだど!?!くつ!?!こうなつてしまえば腕輪で回復を…:回復できない!?!何故だ!?!」

真司「ハッ、お前自分の腕輪の発動条件も知らねえのかよ。自分で言つてて気付かなかつたのか?お前の腕輪はそれぞれ400点、800点ないと発動できないんだろ?ならばそれ以上のダメージを与えればいい」

「俺はもう驚かんぞ?」

「奇遇だな、俺もだ。つくづくあいつはとんでもないことをやらかしてくるよ」

「1つだけ気になったことがあるんだ。言つてもいいか?」

「おそらく俺も同じだ」

「じゃあ合わせてみるか?」

「そうだな。せーの」

「二あいつもう人間やめてね?」

「やっぱりな」

「ああ、普通の人間に石破天??拳が使えるはずがない」

「しかもあいつあれで未完成って言ってたぞ?」

「こりや立派なバケモン確定だな。もう俺あいつが日の呼吸とか使って鬼切つてても驚かねえ自信がある」

「それって事実なんじゃないのか?」

「「確かに」」

おいFクラス、鬼??の刃まで手を出すな。タグ付けがしんどい。最初からつけてねえけど。それに日の呼吸は縁壺さんと竈門家しか使えんだろ。そして無惨様はこの世にいねえよ!

真司「おおい、バカども、全部聞こえてるぞ?死にたいか?」

「「すんませんでした!」」 土下座

真司「それじゃあ高城大雅、決着をつけようか?もう1度行くぞ、流派東??不敗が最終奥義、石破天??拳!」

大雅「グワァー!」

高橋「Aクラス高城大雅、戦死!よって勝者Fクラス!」

「「ウオォー!」」

「藤堂!信じてたぞ!」

「ああ、お前ならやってくれると信じてた!」

大雅「何故だ!何故負けた!何故僕はお前みたいな人殺しに勝てない!あの時もそうだ!体は奪ったのに心は奪えなかった!」

真司「お前のその言葉、あの時花蓮を犯したのはお前だな?高城大雅」

大雅「だったらなんだっていうんだ!証拠がないだろう証拠が!」
瑞希「確かに証拠はありません。でもここにいる皆さんがあなたの発言を聞きましたよ」

「それじゃあ、あの自殺つてあいつのせいじゃないか!」

「あいつ小学生で犯罪犯して人に罪着せるってどんな神経してんだ?」

「『人殺し』だっけか?それお前のことじゃん。何が騙されんぞ、だよ」
雄二「真司、お疲れさん。ゆっくり休め。あとは俺たちに任せろ」

真司「ああ…そうす…」
バタツ

「真司（藤堂）！」

雄二「救急車だ！救急車を呼べ！」

ピーポーピーポー

高橋「文月病院までお願いします」

ピーポーピーポー

雄二「これは明日に持ち越しだな。明日は土曜日だが翔子もそれでもいいか？」

翔子「……こつちもできる状態じゃない」

雄二「わかった。それじゃあ解散だ。今は真司が心配かもしれないが、あいつは自分のせいで負けたとなればまた一人で抱え込むぞ！だから今日の残りや明日の朝使って切り替えろ！」

「だけどよお…」

「坂本は心配じゃないのか？」

雄二「俺だつて心配に決まっているだろう！そもそもこの布陣を考えたのは俺だ。だから全責任は俺にある！必ずその責任は取る。Fクラスの勝利という形でな。みんな、真司が命がけでもぎ取った一勝だ！あいつの意志を無駄にするな！」

「そつか…そうだよな！」

「ああ！あいつがこんなとこでくたばるとは思えん！」

「むしろ明日にはケロっとして学校来てるんじゃないか？」

「それだ！」

雄二「発破かけた俺が言うのもなんだが、お前ら切り替えが早すぎやしないか？」

須川「坂本、だつて考えてもみろよ。あの藤堂だぜ？あいつならそれくらいやつても驚かんくらいには人間やめると俺は思うぞ」

雄二「……否定できん……」

須川「だろ？だからこれでいいんだよ。あいつが帰ってきたときにAクラスの設備で驚かせようって企画までたつてんだ。必ず勝てよ？」

雄二「ああ、残り6戦全て勝ちに行く。明久、猛、お前らもハマスんなよ」

猛「何言ってるんだ、バカ旦那」

明久「そうだよ、雄二」

明久、猛「僕（俺）が真司（兄貴）のこと、心配するわけないだろう？信じてるからね（な）」

雄二「お前ら…おいてか待て！猛！テメエ今旦那とか言わなかったか？俺はまだ旦那じゃねえ！」

「アハハハハ！」

そんなバカたちを遠くから見ている者が2人。

美波「男子ってバカよねえ。瑞希もそう思わない？」

瑞希「そうですね。私もそう思います。」

美波「でも意外だったわ。真司が倒れたとき瑞希が1番に駆けつけると思ってた。」

瑞希「私は13年間そばで見えてきたんですよ？シン君のことはたっ君の次に知っています♪」

美波「瑞希もだいぶあのバカに毒されてきたわね…」

瑞希「そうですか？さ、美波ちゃんも明日は試合なんですから、早めに寝ないとダメですよ？」

美波「わかってるわよ。それじゃあね、瑞希」

瑞希「美波ちゃん、また明日！」

雄二「おい姫路。俺たちは今から真司のところに行こうと思うんだが、お前もどうだ？」

瑞希「もちろん私も行きます！あ、でも先に連絡入れていいですか？少なくともお父さんとお母さんにはこのことを伝えなければなりませんから」

雄二「ああ、校門で待っているぞ」

瑞希「わかりました！」

スタスタ

瑞希「まずは家に電話しなくっちゃ」

（電話中）

瑞希「ふう：次は花蓮ちゃんの家にも伝えておこう」
〜電話中〜

瑞希「これで漏らしはないよね。よし、シン君のところに行こうつと」

タツタツタツタツ

明久「姫路さん、早かったね」

瑞希「はい、早くシン君の様子が見たいですから」

秀吉「それじゃあ姫路も来たことだし行こうかの？」

〜文月病院〜

真司「んん？ここは？」

??「あら、気がついたのね」

真司「あなたは!?!」

花蓮母「あら、私がいたら不満？一応、あなたの主治医なんだけど?」

真司「!?!お婆さんが、医者？」

花蓮母「聞いてなかったの？まあいいわ、あなたの状態を今から説明するわ。腹部に刃物による切り傷、これが1番不味かったわね。それから左手に浅い切り傷多数。それからインペジメント症候群ね。あなたよくこんな状態で生きていられたわね」

真司「インペジメントは3年前からです。なので問題ありません。それより腹の切り傷がまずいってどういうことですか？」

花蓮母「今からあなたには残酷な話をします。覚悟して聞きなさい。あなたの切り傷は内臓近くまで至っていた。とりあえず傷は縫ったけど筋が切れてる。それも修復不可能なまでに。歩いたりする分には構わないけど少なくとも野球やサッカーは10年はできないと思っ頂戴。体育もダメよ。右手にも多少の筋の切れが見られたから右投げの練習でもしてたのかもしれないけどこれから先10年は禁止よ」

真司「なっ！それは本当ですか…?」

花蓮母「なんであなたに嘘を教えないといけないのよ。これは本当の話」

真司「…10分でいいので少し1人してくれませんか？気持ちの整理がつかないので…」

花蓮母「いいわよ。じゃあ病室の外にいるから整理がついたら呼んで頂戴」

ガラガラ

真司「うつつうつつうう、なんでこんなことになったんだよ…高校はダメでも大学行ったらと思ってたのに…なんで…なんで！」

タツタツタツ

瑞希「ここですね！あれ？人が立ってる…花蓮ちゃんのお母さん!？」

雄二「おいそれって自殺した子の…」

猛「おいまじかよ、あの人確か兄貴のこと相当恨んでたよな？」

明久「僕の記憶でもそうだよ…」

花蓮母「あら、瑞希ちゃん、猛くん、明久くん。お見舞いは少し待ってもらってもいいかしら。今はそつとしてあげて」

瑞希「おじさんから全て聞きました。もう恨んでないんだって」

明久、猛「え？」

花蓮母「聞いたかもしれないけどその男子2人がついていけてないから改めて言うわね。私は元々彼が悪いとは思ってなかったの。でもね、彼は恨みという感情に救いを求めてしまったの。それは心理学的にはかなり危険な状態よ。だけど彼はカウンセリングも受けようとしなかった。だから、せめて彼の精神が保たれるように私が責めることにしたの。そのことで瑞希ちゃんや猛くん、明久くんには嫌な思いをさせてしまったわね。ごめんなさい」

瑞希「いいんです。なんとなくそんな気はしてましたから。それでシン君は？」

花蓮母「彼の体のことは彼から聞いて頂戴。私がおいそれと話していい内容ではないわ。彼も落ち着いたみたいだしね。何かあったらナースコールで呼んで。私は1度ここを離れるわ。友達同士で話さない。オバさんがいても仕方ないもの」

猛「わかりました」

ガラガラ

真司「おばさん、落ち着きました。もう大丈夫…お前から来てたの？」
花蓮母「それじゃ、後は任せるわ。話が終わったら誰か中庭まで呼びに来て」

スタスタ

真司「まあ、入ってよ。ここじゃなんだし」

「失礼しまーす」

真司「みんな、心配かけてごめんな。Aクラス戦はどうなった？」
雄二「それについては俺から話そう。残りの6戦は明日に持ち越すだ。当然全て勝つつもりでいく」

真司「そっか。悪いことしたかな？」

雄二「気にするな。悪いのは全て高城だ」

瑞希「それで体はどうなの？」

真司「……………」

猛「兄貴、何かあったのか？」

明久「あつたんだね？無理に話さなくてもいいよ？」

真司「いや、話すよ。どうせいつかはバレるんだ。俺の体だが、もうスポーツは無理だ。腹の傷のおかげで筋肉が完全に切れたらしい。あと10年はドクターストップだ」

「え？」

瑞希「そんな状態で戦ってたの!？」

秀吉「なんでそこでやめなかったのじゃー！」

真司「あいつが瑞希を、俺の大事な幼馴染をバカにしたし、Fクラスの間もバカにしたからだ。俺自身をバカにしただけならあのまま引き下がってもよかつたんだが、あれは我慢できなかつた。Fクラスも確かにバカの集まりだが、それがバカにしている理由にはならん」

康太「……………いつも通り」

猛「全く兄貴はバカだなあ。んなこと俺らが気にすると思うか？」

真司「確かに気にしないだろうな。でも俺は許せなかつたんだよ」

秀吉「お主らしい理由じゃのう」

明久「全く…本当にバカだね」

「お前にだけは言われたくない（だろ）」

明久「酷い！」

猛「でも兄貴はそれで良かったのか？右、練習してたんだろ？」

瑞希「そうなの!?私聞いてない！」

猛「そりゃ隠してたみたいだからな。知ってんのは俺と偶然練習現場に居合わせた姉さんくらいなもんだろ」

瑞希「そうだったんだ…でも無事で良かった…良かったよお…」

雄二「(2人にしてやるか)おい、バカども。俺らで先生迎えに行くぞ」

瑞希「それなら私も…」

猛「瑞希はここで休んでてよ。おばさんなら俺と明久がわかるからさ。体力仕事は俺ら男に任せなよ」

瑞希「それなら…お願いね？」

猛「合点」

ガラガラ

真司「……………なあ瑞希。予定が狂っちゃったけどここで返事しても良いか？」

瑞希「いいよ。名誉の負傷だもん。仕方ないよ。それにしても予想より酷かったけど」

真司「ありがとう。それで返事なんだが…姫路瑞希さん、俺はあなたが好きです。こんな俺で良ければ付き合ってください！」

瑞希「…(シクシク)」

真司「お、おい泣くほど嫌だったか？」

瑞希「違う！そうじゃないの…ただ…嬉しくて…夢、だったから…」

真司「…そうか」

瑞希「花蓮ちゃんと勝負してたんだよ？どっちが先に気づかせるかって。結果はあんなことになっちゃったけど」

真司「花蓮も上から見てるのかな？」

瑞希「きつと見てるよ。花蓮ちゃんだけじゃなく、おじさんもおばさんも。きつと上で祝杯をあげてるよ。特におばさんには応援して

もらってたから」

真司「そつか…：そうだよな」

瑞希「これで少しは軽くなった？」

真司「ああ。なあ瑞希」

瑞希「何？」

真司「今日の空ってこんなに青かったんだな…」

瑞希「きつと気持ちが晴れたんだよ。これからは苦しいことも2人で背負っていいこうね」

真司「ああ」

ガタツ

真司「誰だ!？」

明久「アハハハハ」

猛「すまん、兄貴。俺は止めたんだが…」

花蓮母「あら、お兄さんの大事な大事な人生の分岐点を見れてよかったじゃない」

猛「…：こう言われてな。俺には無理だった」

瑞希「ど、どこから聞いてたんですか!？」

秀吉「『今日の空ってこんなに青かったんだな…』のところがじゃない…」

瑞希「そ、そうなんですか？」カオマツカ

真司「きくさくまくらく！正座だ!」

明久「何怒ってんのさ」

真司「正座」

花蓮母「良かったじゃないの!」

真司「せ・い・ぎ」

「アツハイ」

真司「ガミガミガミガミ」

瑞希「…：皆さんしんどそうです…」

雄二（いつまで続くんだよ!もう30分は正座してるぞ!）

明久（もう僕は足の感覚がないよ…）

花蓮母（まさかここまでなるとは思わなかったわ）

康太（…………長い）

真司「ガミガミガミガミ。おい、聞いてんのか？」

「はい、しっかり聞いています」

瑞希「シン君、もうそこまですておこ？体もしんどいだろうし、ね？」

真司「仕方ない…今後一切こういうことはしないこと！いいな？」

「Yes, my load」

真司「ならば解いてよし」

明久「あ、足が…」

秀吉「自業自得じゃの」

雄二「おい、秀吉はわかるとしてなんで猛はそっちなんだよ。そいつが1番嬉々として覗いてたぞ？」

真司「ほう？猛？その話詳しく聞かせてもらおうか？もちろん、その五体満足な体にな？」ゴウツ

猛「バカ雄二、なんでバラすのさ！おかげで俺だけ魔王モードの相手じゃねえか！」

雄二「お前がしょーもない嘘つくからだ。こつてり絞ってもらえ」

猛「クソゴリラふざげんな！…あ、あの魔王様？私めに、な、何を…ミギヤアー！」

真司「俺は言ったぞ？体に聞くとな。それに誰が魔王だつて？ん？それと真偽は？」

猛「す、すみま…ミギヤアー！」

真司「ふう…これもきついのか」

雄二（あいつ本当に怪我してんのか？）

花蓮母（そのはずなんだけど…明日の午前中には退院できそうね…）

明久（それってどれくらい早いんですか？）

花蓮母（とりあえず本来なら2週間は入院、とだけ言っておくわ）

秀吉（人間じゃないって話は否定できんのう…）

花蓮母「それじゃあそろそろあなたたちは帰りなさい。面会時間は
終わりよ」

雄二「そうか。じゃあ帰るぞ。真司、また明日」

真司「そんなに毎日来なくてもいいぞ」

花蓮母「違うわよ。あんたは明日には退院できるって話よ」

真司「は？重傷じゃないのか？」

花蓮母「そのはずなんだけどあんたの自然治癒力が高すぎるのよ。それで？瑞希ちゃんに残る？」

瑞希「いいんですか？」

花蓮母「一人くらいこつちでごまかすからいいわよ。最悪双子の兄弟つてことにしておけば問題ないしね」

真司「おい、それでいいのか？医者は」

花蓮母「病院としては器具が壊されなきゃいいのよ。警備部には睨まれるけどね。まあ今日の宿直は私だし問題ないでしょ」

瑞希「でも…」

真司「瑞希、俺は瑞希にいて欲しい…」

瑞希「それじゃあ残るね！」／／／

花蓮母「あーはいはい、ご馳走様。これ以上見るとブラックコーヒーが欲しくなるわ」

雄二「俺たちも帰ろうぜ。俺は砂糖吐きそうだ。それじゃあな。姫路、遅れるなよ」

ガラガラ

花蓮母「するときには傷に負担かけないように瑞希ちゃんが動くのよ」

真司「おいクソ医者！なんてこと言ってるんだ！」／／／

花蓮母「クソ医者つて私のこと？これは心外ね。瑞希ちゃんの許可を出したのは私よ？」

真司「申し訳ございませんでした。撤回させていただきます」

花蓮母「わかればいいのよ。わかれば、ね」

瑞希「アウアウ」／／／

真司「おーい、瑞希ー？戻ってこーい」

瑞希「し、シン君が良ければ、その、そういうことも…」

真司「だめだこりや。完全にトリップしてる」

花蓮母「後はごゆっくり」

ガラガラ

真司「おい、この状況を投げるな！ああ、もう…瑞希！」

瑞希「ひ、ひゃい！」

真司「そ、その…俺はしないからな！そういうことは高校卒業してから…」カオマツカ

瑞希「そ、そうですよね！あれ？こんな箱って置いてあった？」

真司「なんだそれ…ってあのクソ医者…！」

瑞希「す、する？」カオマツカ

真司「み、瑞希、落ち着け！いったん話をしようじゃないか！おい、勝手に脱がせるな！」

その日、2人は文字通り繋がったまま寝たそうなの。夜は2人揃って花畑で2人で過ごす夢を見た、と後に語っている。

ピロン

真司は体力が30減った。

真司の弾道が1上がった。

再開！Aクラス戦

〜次の日〜

ガラガラ

花蓮母「朝の診察するわよ、つてやっぱりこうなったのね。ほら、診察するわよ！…瑞希ちゃん、おそらく気絶したのね…素っ裸だし…繋がったままだし…全く…このまま診察するか。…血圧異常なし。体温は…ちよつと高いけどまあシた後つて考えると誤差の範囲でしよ。後は傷口だけ…後ででいいか」

ガラガラ

真司「んん？あ、もう朝か…なんか重い…っ！」カオマツカ

瑞希「んにゅ？シン君？おはよう？」

真司「お前はとりあえず服を着ろ！」カオマツカ

瑞希「え？…あっ！」カオマツカ

真司「つたく…勝手に盛って勝手に満足して気絶して寝るなよ…」

瑞希「し、シン君だって…」

真司「俺はなんもしてないぞ？つたくそろそろいい加減に服着ねえと花蓮の母さんくるぞ」

花蓮母「もう1回来てるんだけどね…笑笑） 入るわよ」

瑞希「ちよ、ちよつと待つてください！…大丈夫です！」

ガラガラ

花蓮母「こういう時はこう言ったほうがいいかしら？『昨夜はお楽しみでしたね？』」

真司、瑞希「な、なんてこと言ってんだ（ですか）！」カオマツカ

花蓮母「あら、別に隠さなくてもいいわよ？瑞希ちゃん、『大きかつた？』」

た？」

瑞希「ふえ…？」カオマツカ

真司「あんたそれでも医者か！」カオマツカ

花蓮母「あなたたちウブねえ笑笑」

真司「とつと診察してくれよ！」カオマツカ

花蓮母「じゃあお腹の傷見せて？…うん、もう退院していいわ

よ」

真司「流石に診察が短すぎやしませんかね？」

花蓮母「体温と血圧はさつき測ったも…あ」

真司「なんでそんな時起こしてくんなかったんだよ！」

瑞希「アウアウ」カオマツカ

花蓮母「あちゃー…）起こしたわよ？あなたたちが起きなかっただけで。気持ちよさそうに寝てたわねえ、裸で笑笑」

真司「っ！」カオマツカ

花蓮母「病室に忘れ物するんじゃないわよ？あれも使った以上は持って帰んなさい」

真司「やっぱテメエの仕業かよ！」

花蓮母「私はただ箱をうつかり持ち帰り忘れてただけよ。勝手に使ったのはあなたたちなんだから開けた以上は持って帰んなさい、いいわね？」

真司「(クソ医者が！) 瑞希、いったん帰るぞ」カオマツカ

瑞希「ひ、ひゃい！」カオマツカ

花蓮母「気をつけて帰るのよ」

ガラガラ

スタスタ

真司(なんか…)

真司、瑞希「(気まずい…) …あ、あのさ…ん？」

お互い顔を見合わせる2人。

真司、瑞希「先どうぞ！…え？」

真司「じ、じゃあ俺から…その…なんだ…責任は、取るからな」カオマツカ

瑞希「う、うん。幸せにしてくれる？」カオマツカ

真司「も、もちろんだ。そ…それで瑞希は？」カオマツカ

瑞希「い…いや、何でもないの…もう解決したから…」カオマツカ

真司「そ、そうか」カオマツカ

スタスタ

真司「つともう家の前か。とりあえずお互い一旦着替えよう。そし

たら迎えに行くから…」

瑞希「う、うん。待つてるから…」カオマツカ

真司「くっ！そ、その顔は反則だぞ、瑞希！やばい、鼻から垂れてきそう…」じゃあ後でな」

タツタツタツタツ

ガチャ

カヲル「早かったさね。あの傷でこの短期間…あんた本当に人間かい？」

真司「やかましい！俺は人間だ！とつとと出勤しろやクソババア！」

カヲル「…そういうことかい」学校ではほどほどにするんだよ、バカップル」

真司「なっ！なんであんたまで知ってたんだ！」カオマツカ

カヲル「おや、カマ掛けたら当たっちゃまったさね。ま、あんまり酷いと恋愛禁止にせざるを得ないからねえ。ま、せいぜい頑張るんだね、クソジャリ」ニヤニヤ

真司「あんたに言われなくてもわかってらあ！東京湾に沈めんぞコヲア！……はあ…行ってくる」

カヲル「ま、気をつけるさね」

ピンポーン

ガチャ

瑞希母「あら、いらっしやい。花蓮ちゃんママから聞いたわよ。昨夜はお楽しみだったらしいじゃない？私のことはお義母さんと呼んでくれてもいいのよ？お父さんには秘密にしてあげるから、とりあえず交際の報告くらいしなさい」

真司「情報も展開もはええよ！…それで、おじさんは？」

瑞希母「拗ねて自分の部屋にこもってるわ。なんとなく瑞希に彼氏ができたこと、勘づいたみたい」

真司「…あの人が野生の動物だと言われても驚かない自信がつきましたよ…」

スタスタ

コンコン

瑞希父「……………入れ」

真司「失礼します。おじさん、話があつてきました」

瑞希父「……………察しはついている。何も言うな」

真司「では認めていただけると…?」

瑞希父「だが認めん! いいか、瑞希はなあ、純粹で優しいんだ。ちつちやい頃から『お父さん、お父さん』と言ってきてだな…」

真司「…嘘はやめてください。基本そんなこと言つてなかつたでしよ、おじさん」

瑞希父「それなのにお前を選ぶだど!? 交際は認めん! 瑞希はお父さんが幸せにするんだ!」

真司「(この人完全に無視したよ…):それが瑞希の望まなかつた選択だつたとしても、ですか?」

瑞希父「そうだ!これが1番いいんだよ!」

ガチャ

瑞希「お父さん!もうやめてよ!そんなこと言うお父さんなんて嫌い!」

瑞希父「……………ま、また嫌われた……………」

真司「おじさん。おじさんの気持ち、今ならなんとなくわかるんです。俺も子供ができたら、特にそれが娘なら、同じことを言うかもしれません。でも俺はいつまでも守り続けるだけが親の役目じゃないと思うんです。親は子より先に死ぬ、それが自然の摂理だから…。確かに俺は不器用で、罪を背負つて、もうどうしようもないバケモノです。人間じゃない、なんて言葉は飽きるほど聞きました。でも瑞希はそんな俺を肯定し続けてくれた。側で支えてくれたんです。だから!今度は俺が支える番なんです。だから、認めてください。お願いします」

瑞希父「……………1発殴らせてくれ。それで認める」

瑞希「お父さん!」

真司「瑞希、これは俺とおじさんの、男のけじめの話だ」

瑞希「でも…」

真司「これでいいんだよ。俺がおじさんだったとしてもこうして
る。おじさん、お願いします」

ドゴツ

…明らかに今の音は殴って出ていい音ではない。真司の頬も赤く
はれ……え？あれだけの音で赤くなっただけ？お前本当に人間か
よ…

瑞希父「瑞希を泣かせてみる。今度は地獄送りだ」

真司「わかっています。瑞希は必ず俺が幸せにします」

瑞希父「なら行け。学校遅刻するぞ」

真司「はい！瑞希、行こ？」

瑞希「うん」ムスツ

真司「おじさん、おばさん、行ってきます」

スタスタ

真司「瑞希、どうして拗ねてんのさ」

瑞希「だって…何も殴ることないじゃん！シン君は悪いことしてな
いのに！」

真司「俺ん家は男兄弟だったし楽観的な人だったからあそこまで
はなかったけど基本的に男ってのはみんなバカで不器用なんだよ。
そのために拳で語るって言葉があるんだよ」

これは作者の勝手な見解ですので悪しからず。

瑞希「なんか男の子ってよくわかんない」

真司「そういう違いがあってもいいってことだよ」

瑞希「…シン君がいいなら何も言わないけど…」

ちなみに病院を出てからここまでの間、2人の目が合ったのは1回
だけだったりする。なぜなら…

真司「あのさ、瑞希…あつ！」カアアア

瑞希「あつ！」カアアア

こういうことである。顔を見ると昨晚の情事を思い出してしま
うようだ。…手はしっかりと恋人つなぎなのだが……んなこと俺の小
説でしてんじゃねえ！こちとら彼女いない歴〃年齢の立派な非リア
だぞ！テメエらのイチャコラ見て楽しいわけがあるか！自重しろや

！バカツプルが！（お前が書いてんだろ、というツツコミは無しの方向でお願いします笑笑）

一方その頃、非リアの僻が集まるでお馴染みのFクラスでは…怒号が飛び交っていた。

須川「おい！垂れ幕の準備はできてんのか！」

…主にこいつが怒鳴ってるだけだが…

横溝「んなこと言ってもよ、須川。本当にあいつら付き合ったのか？」

須川「間違いない。お袋がいま階段で転んで足折って今入院してんだよ。それで見舞いに行ったら坂本たちがコン??ーム割り勘しててな。全てを察した」

横溝「……………間違いないな」

須川「だろ？おい近藤！右に傾いてるぞ！」

ガラガラ

雄二「……………間違えたか？」

須川「坂本、お前も手伝え！俺らFFF団だけじゃ間に合わねえ！」

ガラガラ

秀吉「おは…なんなのじゃ!？」

横溝「秀吉！頼む！俺らだけじゃ過労死する！」

秀吉「……………ギリギリに来ればよかったのじゃ」

ガラガラ

康太「……………クラス間違えた」

雄二「ムツツリーニ！お前もやるぞ！（あいつだけやらないのは許せねえ）」

……………最低な理由である。

ガラガラ

猛「ういー…雄二「猛！」人違いです」

雄二「テメエ、1人だけ抜け駆けできると思ってるんのか？」

猛「仕方ねえ、兄貴になんか言われたら盾になれよ？」

雄二「そのくらいお安い御用だ（まあ、する気はないがな）」

……………こいつは悪魔から生まれたんじゃないか？

ガラガラ

明久「みんな：猛「明久、ちょうどいいところに！」：そういえば鉄人に呼ばれてたっけ？」

「逃すなー！」

明久「イヤダアアア!!!」

ガラガラ

美波「おは：明久「島田さん！こつち手伝って！」：大人しく美春に捕まった方がまだマシだったわ：というより何よ？これ」

須川「見てわからないか？記念の垂れ幕だ」

美波「そうじゃなくて！あの2人はまだ付き合っていないでしょ！」

須川「坂本とムツツリーニが認めた。間違いない」

美波「はあ：真司に何か言われても知らないわよ」

それから10分後：

「できたー！」

………恐るべき団結力である。

ガラガラ

真司「みんなおはよう：ってなんじゃこりやアーーーー！」

瑞希「アウアウ」カオマツカ

真司「雄二イイイイイ！テメエの仕業かああああ！」

雄二「俺じゃないぞ。俺は巻き込まれた側だ」

「須川ですー！」

真司「………なんで須川が知ってんだ？」

須川「実はな、カクカクシカジカってことなんだよ」

真司「そうか。よくわかった………須川、覚悟はいいか？」ゴウツ

須川「ま、魔王モード!」

真司「歯あ食いしばれやああああ！」

ドゴツ

須川 チーン

雄二「ま、まあなんだ。その：もう体はいいのか？」

真司「治りが異常だつてよ。体は問題ない」

雄二「そうか。まあ今日は出番ないだろうし大丈夫だろう」

真司「後ろでゆっくり観戦させてもらおうよ」

雄二「そうしてくれ。さてみんな！Aクラス戦再開だ！気張っていくぞ!!」

「「オオー……!!!」」

高橋「それではAクラスとFクラスの試召戦争を第二試合から再開します。代表者は前へ！」

明久「僕だね」

佐藤「よろしくお願いします」

高橋「科目はどうしますか？」

明久「僕は選択しないから選んで」

佐藤「では物理でお願いします」

高橋「承認します」

佐藤、明久「試獣召喚（サモン）！」

吉井明久 物理 62点

VS

佐藤美穂 物理 389点

勝負は点数差の割に長く続いた。明久の召喚獣の扱いが段違いで上手かったためだ。結果は…

吉井明久 物理 0点

VS

佐藤美穂 物理 104点

明久の負けであった。

雄二「負けたか…勝てるとは思ったんだが…」

真司「あの点数差の中じゃ健闘したほうだ。280点も削ってる。」

明久は健闘した。しかし第一試合の誰かさんのおかげで霞むので

あった…

激闘！Aクラス戦

高橋「これで両者1勝1敗となりました。第三試合を始めます。第三試合の代表者は前へ！」

雄二「行け！ムツツリーニ！」

??「へえ、僕の相手はムツツリーニ君なんだ〜」
スタスタ

愛子「1年の終わりに転校してきた、工藤愛子です。よろしくね？」

高橋「科目はどうしますか？」

康太「……………保健体育」

愛子「ムツツリーニ君は随分保健体育が得意なんだって？でも僕も得意なんだよ？……………君とは違って、実技でね」

康太（……………ポタポタ）

ムツツリーニよ、あだ名に似合わず本当にウブだなお前。

愛子「なんなら見てみる？僕の特技、パン??ラなんだ。」

康太（……………ブシャアアアア）

ちっちゃい僕たち、見てごらん？あれが文月学園名物の赤い噴水だよ〜

明久「ムツツリーニ、大丈夫!？」

康太 チーン

真司「こりや無理だな」

高橋「それでは代理を出しますか？」

雄二「いや、俺たちの負けでいい。明久、秀吉！輸血の準備だ！」

明久「そう言うと思って準備済みだよ！」

高橋「わかりました。それでは第三試合はFクラスの申し出によりAクラスの勝ちとします。続いて第四試合を行います。代表者は前へ！」

利光「僕が行きましょう」

猛「こっちは俺だな。科目は家庭科」

高橋「わかりました。では第四試合を始めます！」

霧島猛 家庭科 838点

V S

久保利光 家庭科 299点

「流石家庭科の神！」

「こいつもバケモンか？」

「こいつら本当にFクラスだよな！」

猛「ま、一点突破ってとこだ」

利光「くっ！やはり分が悪いみたいだね」

猛「そういうこと。一撃で決めてやる！」

ザンツ

霧島猛 家庭科 518点

V S

久保利光 家庭科 299点

「なっ!?!どうなってんだ!?!」

「霧島の攻撃は当たったはずだろう!?!」

猛「いや、俺の攻撃は当たっちゃいない」

「どういうことだ？確かに音がしたぞ？」

利光「それは僕のカウンターが当たった音だ。君の攻撃は見えなかったけど狙っている場所は目線でわかるからね。それを利用させてもらったよ。これで君の攻撃は僕には当たらないよ」

猛「目、か…」

利光「何を考えて動かないか知らないけど今度はこちらから行かせてもらおうよ？」

ダツ

それは確かに速かったし、カウンターの術も見事だった。しかし…

ザンツ

霧島猛 家庭科 496点

V S

久保利光 家庭科 109点

しかし、結果はあまりにも彼にとって残酷すぎた。

「おおっ！今度は霧島が返したぞ!?!」

「すげえ！すげえよ！」

利光「なぜあそこからカウンターを打てた!？」

猛「そりゃオメエがバカなだけだ。あんな意気揚々と語られたら嫌でも対策を考える」

そして…

高橋「Aクラス久保利光、戦死！よって勝者、Fクラス！」

「「うおおおおお！」」

「これでまたイーブンだ！」

「これはひよつとすると起こるかもしれないぞ！奇跡が!!」

「「っ！」」

「奇跡なんて起こる訳ないじゃないの！」

「そうよ！たかがFクラス風情に起こる奇跡なんてないのよ！」

真司「奇跡は起こらないから奇跡、ね。いるよな、そう言う奴。でもな、誰も信じないようなことが起こるから奇跡って言葉があるんじゃないのか？」

「「……………」」

奇跡という言葉にあからさまに動揺するAクラス。それもそのはず。彼らは地道に頑張つてこの地位を手に入れている。故に努力して起きなかつた奇跡を知っているのだ。たつた1点に泣きたつた1点に笑つてきた者たちは伊達ではない。それを目の前の、よりによつてFクラスに奇跡を起こされようものなら溜まったものではない。まるで自分の努力を否定されたかのようにだ、そう思うに違いないのだ。しかし、それさえも違うと言えよう。Aクラスの努力が否定されるわけではない。ただ彼らはあまりにも真つ当過ぎた。真つ当な努力をし、自分を抑えながら生活している。ひよつとするとその押さえ込んでいる感情こそが奇跡の原動力となりうるもの、なのかもしれない。

真司「秀吉」

秀吉「なんじゃ?..」

真司「お前の相手はおそらく優子さんだ。だから必ず勝て。それはお前ら姉弟の関係のためじゃない。勝敗がここまでもつれ、メンツが

ほぼ出揃った今、勝てるのは秀吉と雄二、2人だけだ。」

秀吉「なんでじゃ？島田では無理なのかの？」

真司「勘違いはするなよ？島田さんの点数が低いとは思わない。なんなら数学ならTOP 10にもすがりそうな勢いだ。でも、それでは無理だ。長月中の学年3位がまだ向こうにはいる。奴は、如月創也（きさらぎそうや）は数学に限ってはNo. 2だ：奴の苦手は社会系だが、生憎島田では無理だ。それでも島田との差は歴然だ：敵の出でくる順番を読み切れなかった俺の責任だ。すまん」

秀吉「そういうことならわしに任せておくのじゃ。大丈夫だぞ、必ず雄二に繋げるからの」

真司「ありがとう。秀吉、バカにはバカの勝ち方がある。お前は演劇を磨いてきた。ならば相手の行動になりきればいい。そうすれば一撃も喰らわずに勝てる」

秀吉「できるかはわからんがの、やってみるのじゃ」

高橋「それでは第五試合を始めます。代表者は前へ！」

秀吉「わしじゃ」

優子「あら、それならあたしが出るしかないわね。科目はどうするの？」

秀吉「わしが選ぶのは一つしかないのじゃ。高橋先生、古典で頼むぞい」

優子「やっぱりね。でもあたしも何も考えずにここにきたと思ってるの？」

優子？「そんなの知らないわよ。黙ってかかってきなさい」

優子「ひくでくよくし？なんであんなに今あたしの真似してんのよ！舐めてると受け取っていいのね？」

優子（秀吉）「あら、威圧しかできないの？そんなの猿でもできるわよ？」

優子「っ！試獣召喚（サモン）！」

優子（秀吉）「試獣召喚（サモン）！」

木下秀吉 古典 325点

木下優子 古典 360点

それは誰の目にも間違はなくこの戦争で最も僅差な戦いであることを示していた。そして全員が固唾を飲んで見守る中2体は接敵する。

優子（秀吉）「ほらほら、当たらないわよ？」

ザンツザンツ

木下秀吉 古典 325点

VS

木下優子 古典 195点

「おおっ！妹の方が押ししてるぞー！」

「頑張れ！秀吉！」

木下優子という少女は荒っぽかったが、何事も経験則を大事にそつなくこなす少女だ。だからこそこの場面でどうしたらいいのかわからない。なぜなら装備の違う今の自分と戦うことなどかつての何人もしてこなかったし、できなかつたのである。そうするうちに傷だけが増えていくのだ。

木下秀吉 古典 312点

VS

木下優子 古典 65点

その差、約5倍。おおよそ明久にしか覆せない点差である。しかし、少女は優秀であった。天才ではなかったが、やはり努力をする秀才であった。天才にも劣らない、本物の努力を。その努力はこの場でも生きていた。

優子「秀吉、あんたの行動パターンはだいたいわかったわよ？」

その言葉に嘘はなかった。確かに途中から攻撃が当たるようになっていたのである。

木下秀吉 古典 212点

VS

木下優子 古典 53点

「木下さんが押し返したぞ!」

「頑張れ!木下さん!私たちのためにも!」

しかし、それでも秀才は天才には敵わない。そして弟の秀吉はこと演劇に限って言えば天才であった。天才が努力をするとどうなるか、誰であつても答えはすぐに出る。

秀吉「チェンジ」

その言葉が決着の始まりである。そして天才は…化け物にさえも憑依する。

真司?「お前は俺を怒らせた」ゴウツ

「なっ!?!あれは!?!」

「藤堂の魔王モードだど!?!」

「なんで秀吉が使つてんだ!?!」

真司「あれが秀吉の真骨頂か」

明久「僕もあれまでできるとは思つてなかつたよ笑笑」
ザンツ

木下秀吉 古典 212点

VS

木下優子 古典 0点

高橋「Aクラス木下優子、戦死!よって勝者Fクラス!」

秀吉「わしは…勝つたのかの?」

優子「完敗よ、秀吉。まさか演劇をあんな使い方するなんて」

秀吉「真司が助言してくれたのじゃ」

優子「使いこなしたのはあんたでしょ?ならあんたの力つてこといいんじゃないの?」

秀吉「まだ使いこなしてはおらんぞ。やはり真司の魔王モードは無理があるのじゃ…」

真司「お疲れ、秀吉。後は後ろのやつに任せようぜ」

秀吉「流石にそうさせてもらうのじゃ」

高橋「それでは第六試合の代表者は前へ!」

美波「ウチで終わらせるわ！」

??「ほう？貴様如きが我を倒すとな？この戯けが」

ついにリーチをかけたFクラス。そこに待ったをかけるかの如く最強クラスの男が立ち塞がった…

奇跡よ、おきろ！

??「この戯けが」

その言葉とともにAクラスの集団をかき分けて1人の男が出てきた。

真司「……………如月…創也」

明久「島田さん、悪い事は言わないよ。数学は避けた方がいい」

美波「なんでよ？ウチは数学しか役に立てないじゃないのよ？」

猛「奴は数学超特化だ。お前の勝てる、というか試合ができる相手ではない。数学で600点取れるなら話も別だが」

美波「じゃあどうしろっていうのよ」

真司「家庭科だ」

美波「え？」

真司「もしもの時のためにあえて穴を作ったのが不幸中の幸いだっただ。やつは副教科が苦手なんだ」

美波「そ、そうなの？」

真司「奴の苦手は社会系だがこれは日本語の読み書きに苦しんでいる島田さんには厳しいと思う。だけど奴がある程度低い点数で島田さんがそこそこ高い家庭科ならまだ勝ち目があるかも」

美波「じゃあ家庭科にするわ」

創也「貴様らの無駄な会議は終わったか？何をしても我には意味のないものだろうがな」

美波「高橋先生、家庭科をお願いします」

高橋「わかりました。それでは第六試合、始め！」

島田美波 家庭科 157点

VS

如月創也 家庭科 283点

真司「やっぱこうなったか」

雄二「島田では無理そうか？」

明久「島田さんを信じてないわけじゃないけど難しいと思うよ」

雄二「そうか。俺も準備しておく」

猛「あいつ言動のせいで損しがちだが、基本的に真面目な努力家だからな。副教科を除けば現状確実に勝てるのは総合科目の姉さん、兄貴、瑞希、数学の兄貴、英語の大雅、化学の瑞希、くらいだろうな」
雄二「翔子の単科でも無理か？」

猛「総合力で言えば姉さんだろうけど一つ一つで言うとかケモンみたいな点数は取れないからね。召喚獣を使えば確実に言えないかな」

雄二「あいつ召喚獣の操作も上手いのか？」

真司「100点差以内ならひっくり返せるだろうね。元々逆境の中で生きていた人種だし」

秀吉「そう話している間にもう決着がつきそうぞい」

雄二「なっ！まじかよ…」

島田美波 家庭科 52点

VS

如月創也 家庭科 278点

猛「5点しか削れなかったか…だとすれば万が一雄二が引き分ければ出てくるのはあいつで決まり、だな」

高橋「Fクラス島田美波、戦死！勝者Aクラス！」

真司「島田さん、お疲れ様。ごめんね、こんな役割してもらって」

美波「ウチは気にしてないからいいわよ。というかあいつ召喚獣の操作まで上手いってどうなってんのよ！」

猛「な、あいつに数学で挑まなくて良かったろ？ちなみにあいつの数学は670くらいだ」

美波「それ本当に勝てないじゃないの！」

「これで3勝3敗か」

「勝っても負けても最終戦！」

「頼むぞ坂本！」

「俺たちのために！」

「勝ってくれ！」

雄二「任せておけ」

高橋「それでは最終戦になります。代表者は前へ！」

雄二「ま、こうなるわな」

「期待してるぞ、坂本！」

翔子「……………負けない」

「代表！頑張つて！」

雄二「俺は勝つぞ、翔子。あいつらに約束したからな」

高橋「霧島さん、科目はどうしますか？」

翔子「……………数学」

雄二「っ！本当にいいんだな？」

翔子「……………雄二には負けない」

雄二「わかった」

高橋「それでは最終戦、始め！」

坂本雄二 数学 507点

VS

霧島翔子 数学 433点

「おおっ！坂本の点数が霧島さんを上回っている!？」

「嘘っ！代表が負けるなんてあり得ない！」

「坂本ー！行けるぞー！」

「負けないで！代表！」

様々な応援が飛び交う中、ある5人はそんな声に耳を傾けず、怪訝な顔をしていた。

猛「なあ、兄貴。気づいてたか？」

真司「ああ。明らかにおかしい。…あの顔は雄二も気付いてるな」

瑞希「あの点数はおかしいよ」

真司「瑞希も気づいていたか」

康太「……………情報より低い」

猛「ムツツリーニモか」

真司「俺、どう考えても結論が一つしか浮かばないんだが…」

雄二「翔子、お前本当にいいんだな？」

翔子「……………言っただはす。負けないと」

雄二「…そうか」

猛「やっぱ姉さん引き分けでの和解を狙ってるね」

真司「最初からおかしいと思っただよ。雄二の得意な数学を選んだ時点から」

瑞希「誰も損しない結果だね」

真司「誰も損しない、か…瑞希、本当にそう思う？」

瑞希「違うの？」

真司「そうだな。はっきり言ってこの時点でもう異常なんだよ」

瑞希「どういうこと？」

真司「俺たちのクラスはどこだ？」

瑞希「Fクラスだけど…あっ！」

真司「気づいたか。そうだ、最高クラスのAクラスにとって最低クラスのFクラスに勝てないってことはあつてはいけないんだよ。おそらく初日に高橋先生にそう言われてるはずなんだよ。でも翔子さんは勝つことじゃなくて負けられないことを選んだ。そこには何かがあるはず…あっ！」

猛「何かわかったのか？」

真司「全ては最初から決まっていたんだ。最終戦までいった時点で既にシナリオ通りの形以外なかったんだ！」

ここまで喋ってるのと近くにいたからか流石に気づいた代表メンバーが近寄ってくる。

明久「それどういうこと？」

秀吉「引き分けが決まってたってどういうことなのじゃ？」

真司「今明久でもわかるように説明するよ。猛、翔子さんと雄二の関係は？」

猛「幼馴染兼夫婦だな。夫婦の方は姉さんが勝手に言ってるだけだが」

真司「いつから一緒なんだ？」

猛「長月小で暴力事件があつたら？あの少し前くらいからだ」

真司「やっぱりな。そのくらいから一緒ならある程度相手の思考が読めてもおかしくはない」

美波「どういうことなのよ」

真司「どう説明したもんか…そうだ！おい明久、雄二が学園長室に

行った時お前も一緒に行つたら？再振り分け試験の条件はなんだった？」

明久「Aクラス相手に負けなかつたら、だね。要するに勝たなきゃいけないでしょ？」

瑞希「負けないこと？…あつ！」

真司「瑞希は気づいたか。雄二は一言も勝たなければ、なんて言つてないんだよ」

美波「でも負けないんだつたら勝つしかないじゃない」

真司「いいや、必ずしも勝つ必要はない。第3の選択肢があるじゃないか」

美波「第3の選択肢？」

猛「そうか！引き分けなら負けてない！」

美波「あつ！」

秀吉「そういうことなのかの!？」

康太（……………ココココ）

真司「ほとんどみんな気づいたか。そう、雄二は元々引き分け以上が狙いだった。勝てるわけがないと思つてな。その企みに翔子さんは気づいた。だからこそこの決断なんだよ。自分たちが負けずに雄二の願いを叶える、そのためだけに。猛、いい家庭に拾ってもらつたな、お前は」

猛「俺にはもつたいたいところだよ。兄貴は？」

瑞希「そういえばシン君が引き取られた先つてどこなの？お金持ちだとは思うんだけど」

真司「お前ら名字で気づかんのか…学園長だよ、ここの」
「え!？」

真司「あのクソババア人に家事押し付けて自分はこのうのと趣味ばっかしやる。俺は家政夫じゃねえ！つてな。おかげで口だけは達者になったよ…」

猛「……………苦労してんのな……………」

真司「言うな…それに多分俺より苦労してんのがこの学校にいるからな」

瑞希「誰？」

真司「教頭だよ。いつもあのババアの失敗9割の実験に付き合わされてる。自分の仕事もあるのにな…俺はあの人クレーター起こしても驚かない自信があるね。最近ストレスで髪白くなってきてるし」

明久「もしかしてあのババア長ってロクデナシ？」

真司「ババアもお前だけには言われたくないと思うが、その通りだ」
明久「なにっ!?誰がロクデナシだ!」

真司「お前だよ、お・ま・え。てか試合見なくていいのか?なんか盛り上がってんぞ?」

美波「え?あ、本当だ」

美波が見たスクリーンには…

坂本雄二 数学 60点

VS

霧島翔子 数学 58点

秀吉「なっ!?ここまで接戦じゃと!」

真司「引き分けに持つていくには最後の1撃までにある程度点が近くなきゃいけない。だからだらうな」

「勝て!坂本!」

「負けないで!代表!」

雄二「翔子、これが最後だ。ここを逃すと後戻りは出来ねえぞ」

翔子「……………私は負けない」

雄二「はあ…翔子、いつから気づいてた?」

翔子「……………何のこと?」

雄二「あくまでシラを切るつもりか。ならいい」

繰り広げられる意味深な会話に流石に疑問を感じたのか、Aクラス側からは頭の上に疑問符が浮かぶ。一方Fクラスは…

「坂本お!とつとと決めちまえ!」

「美少女と会話なんて羨ましいぞ!」

「殺したいほど妬ましいイイイ!」

…うん、まあ、あれだ。うん。よく言えばいつも通りだな。

雄二「翔子、一つだけ言っておくぞ。俺は他人に同情されたくてこ

んなことを始めたんじゃない。そんなことで勝ってもやり遂げたとは言えねえな。」

翔子「……………っ!」

雄二「努力してこそ、苦勞してこそ、やり遂げたってことなんだよ!本気でかかって来い!」

雄二のこのセリフに、何かに気づいたAクラス側からついに声が上がる。

「代表ってあんな不良みたいな人のために手加減してたの?」

「だとしたら落ちぶれたね」

「いや、洗脳されてたのかもよ?」

真司「何も知らねえクズが!黙って観戦しやがれ!テメエらが好き勝手言えるほどあいつらの関係知ってんのかよ!雄二が何を思っここまですたのか!翔子さんがどれほどの思いでこの決断したのか知ってて言っただらうな!ああ!」

これらの声に黙っていられるわけがないのがこのお人好しである。完全に頭に血が上っているのか、暴言が目立つ。

瑞希「シン君、落ち着いて」

真司「いくら瑞希の頼みでもこればっかは黙ってらんねえ。テメエらみてえな選抜にも入れない雑魚が好き勝手喋ってんじゃないやねえよ!死にくされ!」

「そこまで言うのならアンタは知ってんでしようね!?Fクラスにしか入れない程度の頭で私たちのことバカにして!」

真司「わかんねえよ!わかんねえから黙って見てたんだ!これ以上黙らねえと俺1人でテメエら殲滅してやろうか!」

「アンタもわかんないんなら黙っていなさいよ!豚は豚らしく豚小屋に引っ込んでなさいよ!」

真司「ああ、わかったよ!そんなに死にくさりてえならふさわしいところに送ってやるよ!数学オリン…」

パァン

当然ここまで言い合えば彼女が黙ってないわけで…

真司「っ!瑞希、何すんだ!」

瑞希「いいから落ち着いてよ！シン君、いくらカチンときたからってそこまで言ったらあつちの人たちと一緒にだよ？」

真司「すまねえ、瑞希」

瑞希「確かに向こうの言い方も悪かったけど、あそこまで言っていない理由にはならないよ」

真司「じゃあ黙ってバカにされてろって言うのかよ」

瑞希「こういう時のシン君てバカになるよね笑笑」

真司「なんとでも言えや」

瑞希「誰も我慢しろ、なんて言っていないよ。暴言はダメだからこうするの。ちようど今は試召戦争中だしね。高橋先生！ちよつと向こうがうるさいので全員と私とで召喚獣のバトルしてもいいですか？操作の練習もしたいですし」

真司「っ！そういうことかよ！先生、みず…姫路さんだけでは心許ないので俺もいきます！」

高橋「構いませんが…」

真司「じゃあお願いします！」

その言葉とともに急遽始まることとなったAクラスVS真司、瑞希の戦い。Aクラス戦はどうなってしまうのか！

決着！最後の戦い

Aクラスの言葉に我慢できなくなった真司と瑞希。別室で行うことになったAクラス戦の会場に着くと…

?? 「水くさいじゃないのよ。ウチたちも呼んでよ」

?? 「雄二をバカにされて我慢できないのは僕たちも同じだしね」

?? 「助太刀するのじゃ」

?? 「兄貴、勝手にやるのはいいけど俺も呼んでよな」

?? 「…………俺もやる」

真司 「お前ら…後悔するなよ？」

喋り口調や内容で分かった方もいるかもしれない。そう、我らがFクラスの主力メンバーである。

「何よ！ちよつと戦力が増えたくらいでいい気になってんじゃないわよ！」

真司 「先生、数学でお願いします」

西村 「わかった。承認する」

藤堂真司 数学 1542点

「はあ!？」

「1500点なんて勝てるわけないじゃないのよ！」

「カンニングよ、カンニング！」

真司 「おいおい、俺らはFクラスにしか入れない程度の頭しかないんだろ？このくらいの点数お前らは取れんだろ？」

西村 「いや、お前が学園史上最高得点だ…」

真司 「へえ、Fクラスにしか入れない程度の頭しかない俺に負けてるなんて、ねえ」

「っ！」

真司 「じゃあ頼むから……………楽しませてくれよ？」

真司のその言葉とともに始まる試合……………もはやこれは試合だったのだろうか？43人VS7人という圧倒的不利なはずのFクラス側だが、この戦いはFクラス側の明らかな蹂躞劇であった。真司、瑞希の圧倒的高火力と共に1人ずつ確実に戦死させていく5人。初め

からAクラス側に勝ち目などなかったのである。それに気づいた時には：もう1人も残っていないなかったが：

真司「てこずらせやがって」

その言葉にはいろいろな思いが込められていたのだろう。真司の顔には複雑な感情が浮かんでいた。

真司「西村先生、こいつらにあの試合見せてやってくれませんか？私的な戦いだから補習の必要、ないでしょ？」

西村「一応、しなければならぬのだが：まあいいだろう」

場所を戻してAクラスの教室内、雄二と翔子のバトルは、というところ

：

雄二「翔子、あれほつといて良かったのか？うちの面々が勝手に連れ出しちまったけど」

翔子「……………いい。雄二のこと、バカにしたから」

雄二「そ、そうか：んじゃあそろそろ戻ってくるだろうし再開すつか」

Aクラス側がいなくなったのもあり、中断を余儀なくされていた。そこへ：

明久「雄二、もう負けたの？」

雄二「お前には一回どう思っているのか体にみっちり聞く必要があるな？」

真司、猛「遠慮はいらないのでしつかりやってください」

明久「ひどい！」

真司「お前の失言が原因なんだから黙って報いを受けろ」

猛「ま、そういうことだな」

まるでコント集団の如く会話しながら入ってきた7人。そう、例の戦いを引き起こした者たちである。

雄二「終わったのか？」

美波「ウチらなんかいらなかったわよ。ほとんど真司が1人でやってたし」

瑞希「キレた時のシン君は凄まじいですからね。仕方ないです」

雄二「そ：そうか。これで邪魔者はいなくなったことだし再開だ

な」

そう言っている間にも少し戦っていたようで2人の点数は…

坂本雄二 数学 45点

VS

霧島翔子 数学 46点

わずかに翔子が逆転していた。しかし、このくらいの点差であればまだまだ同点と言ったところだろう。

雄二「翔子、これで終わりにするぞ」

その言葉と共に高速で放たれた拳に翔子は反応できず、攻撃は的確に翔子の召喚獣の頭を捉えていた。

高橋「Aクラス霧島翔子、戦死！よってこの試合、4勝3敗で勝者Fクラス！」

「うおおおおお！」

「これでここの設備は俺たちのもんだ！」

「ざまあみやがれてんだ！」

雄二「落ち着け、お前ら。俺たちはここと設備の交換はしない」

「はあっ!？」

「おい何考えてんだ、坂本！」

「せっかく勝つたのに意味ねえじゃねえか！」

「ちゃんと説明しろ！」

雄二「わからないなら聞いてやる。このまま設備を交換してみろ。周りのクラスメートは？」

「クラスメートはって俺らだけだよな？」

「ああ、他にいるのか？」

雄二「そうだろう？ではその性別は？」

「全員男だよな？」

「バカ、藤堂夫人と秀吉が一緒だろ？」

「そうか！」

瑞希「夫人て誰のことですか!？」

秀吉「わしは男じゃ！」

美波「そうよ！木下じゃなくて私が女よ！」

「絶壁に興味はないな」

「そうそう」

美波「あんたら、全員殺すわ」

「「すみませんでした!」」

始まるコント劇に流石に頭を抱える雄二だが、そこは切り替え、言葉をついでいく。

雄二「そういうことだ。お前らせつかくいい設備を手に入れたのに男ばつかの中でいいのか?」

「それは嫌だな」

「ああ、女子と使いたいな」

「まさか坂本はそこまで考えて!?!」

「流石だ!坂本!」

雄二「そういうことだ。というわけでババア!約束通り俺らが勝ったぞ!」

カフル「仕方ないさね。Fクラスだけ再振り分け試験をしてやる。希望者は明日やるよ」

「うおおおおお!これで俺も女子と同じクラスだ!」

「そうなりやここから一夜漬けで勉強じゃい!」

真司「あいつら…自分の学力が1日で上がらないこと、知らないのか…?」

雄二「知るわけがないだろう?勉強なんざしたこともない連中だ」

真司「よくそれで入試どうにかなったな」

雄二「そこは…よくわからん」

真司「まじかよ…瑞希、明日はお前も本気出せよ?これじゃおじさんに転校を勧められかねん」

瑞希「明日?明日は受けないよ?」

真司「それじゃ俺らがこんなことした意味ねえじゃねえか!どうしてだよ!」

瑞希「じゃあシン君に聞くけどあんなクラス行きたい?」

真司「…………理由がよくわかったよ」

雄二「それじゃ俺らは解散だ!明日再振り分け試験を希望する奴は

頑張ってこい！」

真司「…あ、そうだ。翔子さん、例の命令権だけど俺らは使うような命令無いから代わりに使っていていいよ？」

翔子「……………ありがとう。真司はいい人」

雄二「真司！テメエなんてこと言ってくれてんだ！」

真司「俺まだコン〇ーム騒ぎ許してないけど？」

雄二「すみませんでした」土下座

真司「で、翔子さんは何を命令するの？」

翔子「じゃあ…雄二、付き合って」

明久「へ？」

雄二「やっぱりな。お前、まだあきらめてなかったのか」

翔子「……………私は諦めない。ずっと雄二が好き」

雄二「その話は何度も断ったろ？他の男と付き合う気は無いのか？」

翔子「……………私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

雄二「拒否権は？」

翔子「……………ない。約束だから。今からデートに行く。」

雄二「ぐあ！放せ！やっぱこの約束は無かったことに…」

雄二が言い終わらないうちに翔子は雄二を連れて行ってしまった。

…その行動力はどこから？

真司「ま、まあ、これで解散で…」

その言葉に哀愁が漂っていたのは言うまでもない。

…次の月曜日…

「「結局こうなるのかよー！」」

その言葉通り再振り分け試験を受けた全員がFクラスに振り分けられたのは言うまでもない。

瑞希と初デート

Aクラス戦が終わってから約1週間後の金曜日。結局顔ぶれの変わらなかつたFクラスにいた1人の男は悩んでいた。

真司「流石に色々すつ飛ばしすぎたよなあ…」

その男の名は藤堂真司、化け物じみた体のまごうことなき人間である。彼が一体何を悩んでいたのか、その原因は2日ほど遡る。

〈2日前〉

瑞希「シン君」

真司「どうした？瑞希、何かあったか？」

瑞希「いや、そんなんじゃないんだけど…私たち付き合ってる訳でしょ？」

真司「まあそうだな」

瑞希「シちやつたけどまだ私たちデートもしたことないじゃん」カオマツカ

真司「わかったよ。次の土曜日にどこかに行こうか？」

瑞希「うん！」

真司「じゃあ場所はこっちで決めておくよ」

瑞希「ありがとう！」

〈〈

真司「瑞希にはああ言ったけど…どこ行けばいいんだ？」

この男、付き合ったことはないのどこに行けばいいかわからなくなつたのである。…贅沢な悩みだな！おい！

真司「行きつけのラーメン屋…はダメだな。あそこは女子が食うには脂が多すぎるし何よりニンニクはダメだ」

行きつけのラーメン屋、なんて誤魔化しているが、ラーメンの量が多くて野菜のコールができる某ラーメン屋である。

真司「やっぱ無難に遊園地か？でも確か瑞希ってお化け屋敷見るだけで泣きそうになってたしなあ…ゲーセン…は…うん、ダメだな」

ちなみにゲーセンをすぐに却下した理由は真司自身にあつたりする。

真司「となるとどうしたもんか…」

「こっただけ悩んで答え出ないんだっいたら多少悪くても上の中から選べよ…」

真司「そうか！動物園だ！」

お前どつからそれ捻り出したんだよ…

真司「となるとチケットは俺が買うとして、あとは飯どうすっかなあ…」

雄二「飯がどうしたんだ？」

真司「ああ、いや…っってお前いつからいた!？」

雄二「たつた今だ。珍しく早く来たんでゆっくり寝てようかと思っただが、辛気臭い顔で悩んでる奴が1人いたからな。気になりもするさ」

真司「そうか。それならその前は聞いてないんだな？」

雄二「ああ…動物園に行くなんて聞いてないぞ？」ニヤニヤ

真司「ようし、わかった。雄二に瑞希を取られそうになったと翔子さんに伝えておこう」

雄二「マジですんませんした」土下座

真司「聞かれたのは俺のミスだから仕方ないけど広めんなよ？」

雄二「いや、広めるも何も…後ろにみんないないぞ？」

真司「……………は？」

美波「ずいぶん考え込んでいたのね」ニヤニヤ

秀吉「広めるも何も相手が他クラスしかないのじゃ」ニヤニヤ
猛「悪いな、兄貴。もう姉さんに情報提供しちまった」ニヤニヤ
康太「……………殺したいほど妬ましい」

明久「こんな真司初めて見たよ」ニヤニヤ

真司「よーし、今ニヤニヤした奴地獄送り（物理）な？」

美波以外「すんませんでした」土下座

美波「地獄送り？」

真司「そうだなあ。お前の好きな人を…」

美波「わあく！ウチは何もしてないんだからいいでしょ！」

真司「ま、そうなりたくなきや黙つてろよ？」

「Sir, yes, sir!」

真司「…無駄に発音いいお前ら」

雄二「まあ、とにかく、だ。最優先は姫路を楽しませられるか、だろ?」

真司「そうなんだけどき。ちっちゃい頃からいろんなところ既に行つたんだよ。だからどこ行くにも目新しさが無いんだよな」

雄二「目新しさが欲しいのか?なら俺たちに任せておけ。場所は動物園でいいんだろ?」

真司「とてつもなく嫌な予感がするんだが…」

雄二「そんなこと言うなよ。俺たちで盛り上げてやる笑笑」

真司「はあ…嫌な奴らにバレたな…」

…次の日午前9時半…

瑞希「シン君、お待たせ!だいぶ待ったんじゃない?」

真司「全然?今来たとこだよ?」

瑞希「シン君は私が隣のアパートに住んでるの、忘れたの?お母さんが30分前には出たって言ってたよ?」

真司「時間的な話じゃないんだが…まあいいか。瑞希、移動するぞ」

瑞希「結局どこに行くの?私何も聞いてないけど…」

真司「まあ、行つてのお楽しみつてやつだ。大丈夫だ、損はさせない」

そう言つて移動を始めるカップル。一方その頃、現地でスタンバイしているFクラスメンバーは…

雄二「なぜここに翔子がいるんだ?」

翔子「……夫を見守るのも妻の役目」

猛「こう言つて聞かないんだよ。言つておくが俺が連れてきた訳じゃないからな?俺より先に家出てたし」

明久「そんなことはいいいじゃん。雄二、愛されてるね?」

康太「……殺したいほど妬ましい」

雄二「そんな生優しいようなもんじゃないぞ…」

明久「じゃあなんなのさ」

雄二「明久、お前は寝ているときに『目覚めのチュー』と言われて

迫られたことはないか？」

明久「なんで知ってんのさ…そう言うことなら、ごめん」

雄二「適当に言ったんだが…伝わればそれでいい」

秀吉「なぜ姉上もおるのじや？わしが家を出るときにはいつも通り家でぐーたらしてたはずじゃが…」

優子「アタシは代表から誘われたのよ。面白いことがあるって。まさか真司君のデートだとは思わなかったけど」

翔子「……………優子がいれば作戦は上手くいく」

美波「あんたたち、真司と瑞希が来たわよ？」

雄二「お、やっと来たか。それじゃ作戦通りにな。各自散開！」

一方その頃、入口についた真司と瑞希は…

瑞希「シン君が言ったのって動物園だったんだね」

真司「まあ、俺が来たかったってのもあるんだけどな。ここだけ昔来たことなかったろ？俺がここ出てからは知らんけど」

瑞希「そういえばここは来たことなかったかも」

真司「それは良かった。初デートはなるべく瑞希が来たことないところにしたかったからな」

瑞希「そんな無理しなくても私はシン君と一緒になら楽しいのに…」

カオマツカ

真司「そ、そうか」カオマツカ

…甘々な会話すんじやねえ、このバカップルが！

真司「それじゃ、行こうか」

瑞希「そうだね。シン君、エスコートは任せたよ？」

真司「こういうところは来たことがないから上手くできるかはわからんが頑張るよ」

瑞希「それじゃ最初はどこ行く？」

真司「じゃあ近場のカンガルーから見に行こうか」

瑞希「うん！」

その頃、カンガルー舎の前では…

翔子「……………雄二。私たちもデートする」

雄二「今日は真司に一泡吹かせる日だぞ？また今度な」

翔子「……………別に今日でも問題ない。真司たちに見せつける」

雄二「恥ずかしくて死んでしまいたいそうだ!」

翔子「……………死ぬのは困る」

雄二「ならやめてくれ!頼むから!」

翔子「……………わかった。夫の意見を尊重するのも妻の役目」

雄二「まだ俺は結婚してねえ!」

猛「往生際が悪いぞ、雄二。もう諦めたらどうだ?…つと2人がきたぞ」

雄二「一度お前と拳でじっくり語り合いたい気分だが、まあいい。

作戦開始だ」

秀吉「了解なのじゃ」

明久「オウそのこのカツプルサン、ミーたちはここハジメテね。ピクチャープリーズ」

真司「明久…何してんだ?」

明久「私のナマエハ明久じゃナイネ。ステイブ||花子、通称エリザベスね」

真司「お前名字どうなつてんだよ!それからその名前のどこにエリザベス要素あんだ!」

瑞希「まあまあ、シン君、落ち着こ?エリザベスさん、写真なら私たちの方も撮ってくれませんか?」

真司「なんで瑞希はこの状況で冷静でいられんだ…」

明久「わかりマシタ。では先にこちらをトツテください」

瑞希「シン君、写真、撮ってあげて?」

真司「つたく…仕方ねえなあ。カメラは?」

明久「カレが持ってマス。ムツソリーニクン」

真司「ムツソリーニ…お前に関してはほとんど呼び名変わってないのな…」

康太「……………そんな事実は確認されていない」

真司「お前隠す気あんのか…?」

互いに写真を撮ってもらい別れた後、近場から回っていくと…
瑞希「シン君、お腹すいてない?」

真司「もういい時間だしな。どっかで昼食うか」

瑞希「お昼なんだけど、お弁当作ったんだ。一緒に食べよ?」コテツ

真司「ブシャアアアア」バタツ

瑞希「シン君?シン君!」

雄二「まずい!真司が倒れた!至急AEDと輸血パックの準備だ!」

優子「なんであんなたちはそんなすぐ輸血の準備ができるのよ…」

秀吉「姉上、これはFクラスでは日常茶飯事なのじゃ。真司が倒れるのは初めてじゃけどな」

優子「どこからつつこんでいいのかわからないわ…」

明久「姫路さん!離れて!300Jチャージ!」

ドンツ!

瑞希「明久君!?!なんでここに?」

明久「理由は後で!とりあえず蘇生するよ!」

康太「……………輸血完了」

秀吉「もう一度AEDじゃ!」

明久「もう準備は完了してるよ!」

ドンツ!

真司「……………あれ?ここは?」

瑞希「よかったあ…」

真司「…そうか、俺はあの威力の前になす術もなかったわけか」

康太「……………写真はここに」

真司「1ダース買おう。さて、こんだけメンバーが集まっちゃったラデオトどころではなくなっちゃまったな」

美波「それなら問題ないわよ。ウチたちはこれで帰るもの」

真司「迷惑かけたな」

美波「そう思うんなら瑞希を楽しませなさい」

真司「わかってる。瑞希、移動しようか」

瑞希「でも…みんないるし…」

真司「みんなもう帰るそうだ。問題はないぞ?」

瑞希「いいのかなあ…」

真司「それに俺は2人で回りたい」カオマツカ
瑞希「えっ？」カオマツカ

雄二「翔子、早く出ろ。これ以上この空間にいたら砂糖吐きそう
だ」

翔子「……………わかった」

雄二「そういうことだ。あとはごゆっくり」

瑞希「アウアウ」カオマツカ

く雄二たち移動く

真司「ごめんな、瑞希。こんなことになっちゃって」

瑞希「それはいいんだけどなんでシン君は倒れたの？鼻血出てたみたいだけど」

真司「そ、それは…（瑞希が可愛すぎたなんて言えない…）」

瑞希「それは？」

真司「な、なんでもないんだ。本当に」

瑞希「本当に？」

真司「そ、そうだよ」

瑞希「…そういうことにしといてあげる」

真司「（これ完全にバレてんな…）他んどこも行ってみよう！」

瑞希「うん！」

それからの行程は特に言うこともないんでカットします。

真司「もう閉園時間になるしそろそろ帰ろっか」

瑞希「もうそんな時間!?シン君、気絶し過ぎだよお…」

真司「ごめん！また今度どっか行こうな」

瑞希「もちろん！今度は私が考えるね？」

真司「そんな、悪いよ…」

瑞希「だめ？」

真司「いいんだけど、なんか申し訳なくてさ…」

瑞希「気にしなくていいよ。私がしたいだけだから」

真司「そう？なら…次はお願いね？」

瑞希「任せて！…ねえ、今夜、家に誰もいないんだ…」

真司「っ！それがどういう意味かわかって言ってるのか？」

瑞希「わかってる…シン君ならいいよ？」

真司「…後悔するなよ？」

その後の2人の様子は…あえて語らないでおこう。(R18になる
ので)

第二章 清涼祭編

清涼祭へ向けて

桜も散り、青々とした葉が生い茂る頃、文月学園では清涼祭への準備が進んでいた。ほとんどのクラスでは出し物も決まり、一致団結して準備をしている。そんな頃、2年Fクラスでは…

真司「おは…なんでこんな少ないの？」

瑞希「あっちだよ。シン君、怪我の具合は？今日診察だったんでしょ？」

そう言つて窓の方を指差す。

真司「あいつら…怪我の方だが、もうスポーツも問題ないらしい。花蓮のお母さんに「あんた本当に人間？」て言われたよ笑笑」

美波「あんた10年は運動できなかったんじゃ…」

真司「なんでかは知らんが治ったんだ。やっと野球ができる。このクラスに野球部いないか？」

瑞希「さすがにわかんないなあ。カバンとかが違ったら気付くんだけど」

真司「仕方ねえ。鉄人にでも頼んで入部届けもらうか」

秀吉「それが確實じゃな。しかし真司よ、練習してなかった期間があつたのに大丈夫なのかの？」

真司「さっきボール投げたら問題なかった。バットも振れてる。まあ実戦の感はこれから戻すしかないけどな」

瑞希「キャッチボールの相手くらい私がやろうか？まだシン君にもらつたグローブあるし」

真司「やめとけ。軟球と違って硬球だと怪我の確率が高い。俺は瑞希にケガして欲しくないんだよ」

美波「瑞希、愛されてるわね」ニヤニヤ

瑞希「アウ」カオマツカ

真司「ほう、島田さんや、罰を受けたいと？」

美波「そ、そんなんじゃないわよ！」

真司「だが、次はないぞ？」

瑞希「もう！シン君、脅さないで！」

真司「うっ！わかったよ」

美波「あんたもう瑞希の尻に敷かれてんのね」

真司「そんなことはないぞ！…多分…」

秀吉「否定できてないのじゃ…」

西村「お前ら！何やってんだ！清涼祭の出し物が決まってないのはFクラスだけだぞ！」

真司「あの声聞こえたってことはもうそろ戻ってくるだろうしとりあえず席ついて考えとこっか」

美波、瑞希、秀吉「賛成（なのじゃ）」

雄二「それじゃあまずは清涼祭の実行委員を決めるぞ。決まったらそいつに出し物は一任する。誰かないか？」

「島田とかいいんじゃないか？」

「ここは魔王様の出番だろ！」

「吉井辺りにやらせればいいんじゃないか？」

真司「俺パス。やつと野球ができるんだ。清涼祭に割ける時間はねえ」

雄二「そうか。大体候補が出揃ったな。んじゃ実行委員は島田、あとは任せるぞ」

美波「え？ウチ？いやあそれは困るなあ…」

雄二「何か問題でもあんのか？」

美波「ウチと瑞希は召喚大会に出るからちよつと難しいかな」

雄二「じゃあ副委員を出せばいいだろ？」

美波「人次第ね」

雄二「んじゃあこつちで候補を出すからそつからお前が2つに絞って全員で投票だ」

「なら吉井だろ」

「秀吉も捨てがたいぞ」

「やっぱ魔王様に…」

「姫路さんもありだろ」

雄二「島田、この辺で候補を2人に絞れ」

美波「わかつてるわよ」

そう言う美波が書いた黒板には…

候補① 吉井

候補② 明久

と書かれていた。美波、お前それどっちも同じ人だぞ…。一方、副委員が確定した明久は…

明久（吉井ってこのクラスに2人いたんだ）

どっちもお前だよ！…まさかこいつクラスメートの名前覚えてねえのか？（作者はそんなすぐには覚えられなかった…）

「んーどっちもなんかバカそうだしなあ…」

「おまけにどっちもクズそうなんだよなあ…」

ここまで言われてようやく気づいたのか、明久は反論する。

明久「こら！君たち悩んでる風で人をディスるな！」

真司「事実だろ？」

明久「真司！君は少しはフォローしてよ！」

雄二「まあ、副委員は明久に決定だ。後は勝手にやれ」

真司「俺も寝るわ」

そう言うや否や寝る2人。本気で何も手伝わないらしい。こういう時に「ちよつと男子！準備手伝ってよ！」と言うあだ名が委員長というタイプの女子がいればいいのだが生憎瑞希も美波もそのタイプではない。

美波「それじゃあ出し物を決めるわよ。アキは出た案を黒板に書いていつて」

明久「わかったよ、美波」

スツ

康太「……………写真館」

「ムツツリーニが写真館で言うことやばそうに聞こえないか？」

「まあなんとかなるだろ」

「ウエディング喫茶なんかどうだ？」

「でも男からすると結婚して人生の墓場って言わないか？」

「それは嫌だな…」

そんな風に好き勝手に喋っている須川の手が上がる。

須川「中華喫茶なんかどうだ？」

美波「チャイナドレスでも着るの？」

須川「そんなんじゃないんだ。本格的な飲茶とかを出すんだよ。そもそも中華ってのは…(中略)…喫茶店だから利益も回収できるし、他ともかぶらないだろ？」

美波「それならいいわね。アキ、書いておいて」

そう言つて美波が黒板の方を振り向くと…

案① 写真館「秘密の覗き部屋」

案② ウェディング喫茶「人生の墓場」

案③ 中華喫茶「ヨーロッパ」

…何をどうしたらそうなるんだ…

秀吉「明久よ…なぜこうなったのじゃ？」

明久「僕のせいじゃないよ！僕はただみんなの意見を書いたただけだから」

猛「お前聞こえた単語をそのまま並べただけだろうが！」

ガラガラ

西村「そろそろ決まったか？」

そう言つて黒板を見る鉄人。

西村「…お前たちの補修をかなりした方がいいな」

「なんでですか!？」

「俺たち何もしてないですよ！」

「悪いのは書いた吉井です！」

西村「バカども！みつともない言い訳をするんじゃない！」

ここだけ聞くとただのいい先生なのだが…

西村「先生はバカな吉井を選んだこと自体が間違いだと言っているんだ！」

…あんたに情はないんか…

明久「罵倒を上塗りされた！」

西村「全く…お前たちは…少しはまともにやれ。清涼祭の利益で設

備を向上させようとか思わんのか？」

「そうか！その手があった！」

「何も試召戦争だけが設備を良くするチャンスじゃないんだ！」

瑞希「皆さん、頑張りましょう！」

「「オオー……!!!」」

美波「それじゃあこの中から決めるわよ。それぞれ1番やりたいものに手をあげて」

「写真館ならかなりの利益が見込めるんじゃないか？」

「バカ！ここは姫路さんにウエディングドレスを着てもらってだな……」

「中華喫茶もなかなかだぞ！」

美波「あー！もう！とつとと決めるわよ！はい！写真館！…次、ウエディング喫茶！…最後、中華喫茶！…はい、中華喫茶に決まり！全員協力するように！」

こうしてクラス代表とクラスの中心人物が寝てる中、出し物がようやく決まったのであった。

美波「吉井、なんとか坂本か真司かどっちかでもやる気にさせられないかな？」

明久「真司は姫路さんが言えばどうにかなるかもしれないけど雄二は無理だと思うよ。興味のないことにはとことん無気力だから。てか美波はなんで僕に頼んだの？親友でもさすがに無理だよ」

美波「だってあんたと坂本ってデキてるんでしょ？」

明久「誤解だ！なんで美波はそう僕をそっち系に持っていきたがるのさ？」

美波「そう聞いたわよ？Dクラスの玉野さんに」

明久「1番誤解を生みそうな人が原因だった！」

秀吉「明久よ、諦めるのじゃ。それよりなぜ島田はあの2人の協力が必要なのじゃ？」

美波「瑞希が転校するかもしれないのよ」

明久「彘？」

美波「あー！もう！なんでこのバカは不測の事態に弱いのかしら

!？」

秀吉「明久、しつかりするのじゃ！」

明久「秀吉、僕がモヒカンになっても好きでいてくれるかい？」

美波「…どう言う思考回路ならこんな答えになるのよ」

秀吉「一種の才能じゃな」

美波「そうじゃなくて瑞希の転校よ！」

明久「はっ！姫路さんが転校するってどういうことなのさ！」

美波「そのまんまよ。体の弱い瑞希には流石にFクラスの設備はしんどいから…」

秀吉「となると純粋に設備の問題じゃな」

美波「そうなのよ。だから絶対に出し物を成功させて設備を向上させなきゃいけないのよ」

明久「なら真司については美波がそのことを話してよ。雄二はなんとか僕と秀吉でやってみる」

美波「やっぱりアキと坂本は…」

明久「デキてないからね！」

美波「まあそのことはまた問い詰めるとして、坂本は頼んだわよ」
明久「任せてよ」

今回は雄二サイドは書きません。知りたい方は是非原作を読んでください。

美波「あ、真司」

真司「島田さんか。どうかした？」

美波「それが…カクカクシカジカ…ってことなのよ」

真司「なんだって!？」

美波「本当の話よ。清涼祭、協力してくれる？」

真司「そう言う事情なら仕方ない。やるよ」

こうして2―Fは丸となって清涼祭へ向けて努力するところとなった。そして、運命の清涼祭が始まる…

不穩の始まり

く屋上く

瑞希の転校の原因である教室自体の改修は俺が竹さん呼んできて2人でクーデター起こすって言ったらあつさりオツケー出してくれました。優しい世界だね!...え?脅しだつて?そんなことしてないよ?どうも、藤堂真司です。さて、そんなこんなで清涼祭が始まるわけなんだが、なーんか3年の動きがおかしいんだよなあ。なんもないといいんだけど...

瑞希「シン君、どうかした?なんかブツブツ言っていたけど?」

真司「ああ、いや、なんか言わなきゃいけない気がしてな」

瑞希「疲れてる?」

真司「そりや、俺だつて初めてまともに準備したんだ。当然だろう?」

瑞希「すぐくツツコミたいんだけどシン君そういうタイプだから仕方ないか...」

真司「そういうこと。いい加減許せよ」

瑞希「それとこれとは違うよ。私はシン君やFクラスのみんなと思いい出を作りたいの!」

真司「わかつた、わかつたから!ちゃんと最後まで全力出すから!それでいいだろ?」

瑞希「そういうこと!ちゃんとね?」

真司「はいはい:てかお前ここにいて良いのかよ?」

瑞希「シン君呼びに来たんだけど...」

真司「それはすまんかった。じゃあ行こうか」

くFクラスく

雄二「おい、姫路はまだ帰つてこないのか?」

明久「みたい。真司も強情だからねえ」

ガラガラ

瑞希「遅くなつてすみません」

真司「なんでお前が謝つてんだよ。なんもしてねえだろうが」

明久「あ、帰ってきた、帰ってきた」

雄二「そろそろ姫路も着替えてこい。今島田も着替えてる」

瑞希「わかりました。では、行ってきますね」

真司「ん？女子は着替えるのか？」

雄二「お前いなかったな。インパクトのために女性陣と秀吉には体張ってもらうんだよ」

真司「また秀吉に女装させんのか。いい加減優子さんからキレられても知らんぞ」

雄二「それは悪い気もするが姫路のためだ。秀吉には潔く犠牲になってもらう」

真司「お前本当情がないのな…」

雄二「情がないんじゃない優先順位の問題だ」

真司「それもそうか。優子さんには俺から言っとくよ」

雄二「そうか？それなら頼む」

真司「了解。で？俺は何すんの？」

雄二「お前それすら知らんのか。接客と調理どっちもやってもらう。姫路が徹底的に仕事させろっていうもんでな」

真司「瑞希は俺を殺す気かよ。後で文句言ったらろ」

雄二「まあまあ。着替え終わった姫路をみたらそんな気も吹っ飛ばぞ」

真司「そうか？期待はしてないぞ？」

雄二「それならそれで良いさ。度肝抜いてやるから」

真司「ああ、そうか…瑞希「お着替え終わりましたよ」………い？」

明久「真司、しっかり見とれてるじゃん」ニヤニヤ

雄二「注文どおりの反応だな」ニヤニヤ

真司「お前らがニヤニヤしてんのは腹立つけどそれは一旦置いておいて………雄二、ありがとう」

雄二「期待以上だろ？姫路もお前に見せるってなったら張り切ってたぞ？」

瑞希「アウアウ」カアアア

真司「雄二、後でお前はシバく」

雄二「なんでだよ！」

真司「この状態の瑞希を見ても理由がわからんか？ならしつかり教えてやらんといけないなあ、体になあ？」

雄二「すんませんでした」土下座

真司「わかりやいいや。んで？もう清涼祭始まつてるよな？なんでこんなに人いねえんだよ」

雄二「わからん。さつき変なクレーマー2人を撃退した後でめつきり来なくなった」

真司「クレーマー2人？」

雄二「3年の常村と夏川ってやつだ。知ってるか？」

真司「3年か…やっぱりな」

雄二「心当たりがあるのか？」

真司「おそらくは。ムツツリーニ、2人のクラスは？」

康太「……………Aクラス」

真司「これで確信に変わった。黒幕はおそらく高城雅春だ。奴はAクラスの代表だったはずだ」

明久「それってあの？」

雄二「なんだ明久、お前も知ってるのか？」

真司「高城大雅の兄貴だよ。小中同じだ」

雄二「ということは狙いはお前と姫路を離すことか？」

真司「間違い無いだろうな。完全に瑞希を転校させる気だ。瑞希、転校の話はいつからだ？」

瑞希「え？なんでシン君が知ってるの？」

真司「島田さんから聞いたよ。なんで言わなかったのかは後で聞くとして、いつからだ？」

瑞希「転校というか留学の話が来たの。ヨーロッパに行かないかって」

真司「なるほどな。確定したわ。奴は確か海外の大学を受ける予定のはずだ。おそらくはヨーロッパだろう」

雄二「自分と同じ地域の学校に行かせようってことか。まあまあな考えをお持ちなようで」

真司「しょうもないけどな」

雄二「まあそう言ってやるな。無い知恵を絞り出したんだろう」

真司「そういうことにしといてやるか。さて、肝心なこの状態の打破なんだが…」

ガラガラ

真司「ん？誰だ？」

葉月「お姉ちゃん遊びに来たです！」

美波「え？葉月？1人？」

葉月「はいです！バカなお兄ちゃんを探しに来たです！」

真司「バカなお兄ちゃん？ここには候補がたくさんいるんだが名前はわからないのか？」

葉月「わからないです…でも、すっごくバカなお兄ちゃんでした！」

「吉井（明久）だな」

明久「ひどい！僕に小さい子の知り合いはいないから絶対に人違いだと…」

葉月「あ！バカなお兄ちゃんです！」

雄二「絶対に人違いがなんだって？」

明久「人違いだといいなあ…」アハハ

真司「明久お前遂に小学生にまでバカにされるようになったのか…」

明久「遂につてなんだ！遂につて！」

真司「いや…そんな気はしてたんだが…」

明久「真司…君には一度僕のことをどう思っているのか聞く必要がありそうだよ…」

真司「そしたら対価はお前の体に払ってもらおうぞ」

明久「…やめとくよ…」

真司「賢明な判断だ」

明久「それで？僕に小学生くらいの女の子の知り合いはいないと思うんだけど君は？」

葉月「え？知らない？お兄ちゃんひどい…葉月、一生懸命「バカなお兄ちゃん知りませんか？」って聞きながらここまでできたのに！」

雄二「バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

秀吉「バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのお」

猛「ちびっ子、バカなお兄ちゃんみたいには絶対なるんじゃないぞ？」

真司「こうならなかったためにもしっかり勉強しような？」

明久「泣きたい！」

葉月「そう言えばさつき変な人たちが2―Fは汚いから行かない方が良いつて言ってたです！」

雄二「変な人？それって坊主とモヒカンだったか？」

葉月「そうでした。綺麗なお姉さんたちがフリフリの格好でいるところで大きな声で言っていたです！」

雄二「何っ!?それはうちのクラスのためにも（ローアングルで）調査する必要があるな！」

猛「それって姉さんたちのクラスじゃ……」

真司「面白そうだから黙っておこうぜ。ついでにそこで俺たちも飯食ってくるか。瑞希、好きなもん食え。奢ってやるから」

瑞希「いいの？嬉しいけどなんか申し訳ないなあ」

真司「気にすんな。まあ俺が払う必要はないかもしれないけどな」

瑞希「どういうこと？」

真司「見てればわかるさ。みんな、行こうぜ」

くAクラス前く

雄二「ここだけは勘弁してくれ！」

明久「雄二もいい加減諦めればいいのに」

猛「恥ずかしがってる旦那は置いておいてとつと入ろうぜ」

雄二「誰が旦那だ！」

ガラガラ

翔子「…………お帰りのさいませ、ご主人様、お嬢様。…………今夜は帰しません、ダーリン」

真司「雄二、よかったじゃないか。愛しの翔子さんから愛の告白なんて」ニヤニヤ

雄二「その顔やめろ！」

猛「姉さん、9人だ。空いてるか？」

翔子「……………空いてる。席はこつち」

真司「どうやらちびっ子が言ってた2人組は今はいねえみたいだな」

葉月「ちびっ子じゃなくて葉月です！」

真司「悪かったな、ちび…じゃなくて葉月。ところでここで2人組を待つのか？」

雄二「唯一の手がかりだからな。ま、すぐにでも来んだろ。俺らはここで飯食つちまおうぜ」

真司「そんな簡単にことが進む訳ねえだろってんだ。ま、先に飯つてのは賛成だな」

すると…

ガラガラ

その音とともにAクラスに入ってきたのはハゲとモヒカンの2人組。

真司「嘘やん…」

猛「兄貴…それバラエティのリアクションじゃねえかよ…」

真司「そりやそうなるだろうよ。こんだけタイミングよく来られちゃ」

雄二「まあお前の反応はどうでもいいんだが…やつらが来たな。おい、翔子！メイド服を貸してくれ」

翔子「……………わかった」ヌギヌギ

瑞希「大胆すぎますう…」カオマツカ

雄二「バカ！何脱いでんだ！」

翔子「……………雄二が欲しいって言ったから」

雄二「予備のがあれば貸せてんだ！ここで脱がせる趣味は俺にはねえ！」

翔子「……………残念。優子に頼んでくる」

スタスタ

猛「まあ旦那も嫁の肌は他人に見られたくないだろうしな」ニヤニヤ

真司「見せつけてくれるねえ、霧島雄二さんや」ニヤニヤ

雄二「俺は旦那でもなけりや婿入りもしてねえ！」

優子「代表、頼まれたメイド服なんだけどこんなの何に使うの？」

真司「あ、優子さん」

優子「真司くんじゃない。お疲れ様。秀吉は？」

真司「店番。うちのバカどもが秀吉に女装させて喜んでてな…優子さんにはまた迷惑をかける…」

優子「もう気にしないことにしたわ。それよりあなたたちが代表と一緒にすることはこれを頼んだのは？」

真司「雄二だよ。ハゲとモヒカンの撃退に使うっばい」

優子「どうするのかは知らないけどあんまり汚さないでよ」

真司「そこは問題ないと思うよ。あいつもそこまではできないだろうしね」

優子「どう言うことなのよ」

真司「雄二は翔子さんに頭上がんないからね。そこまでできる度胸はないよ」

優子「代表は何をしたのよ…」

真司「聞きたい？」

優子「いえ、やめとくわ。嫌な予感がするもの」

真司「賢明な判断だ」

雄二「真司！秀吉を呼べ！明久の女装だ！」

真司「…そう言うことね。まああの状態じゃあ向こうは暇か。わかったよ…ま、女性陣とムツツリーニ、それと猛は先に注文しちゃっててよ。俺も加勢してくる」

猛「そんな面白そうなことを俺にはやらせてくんないの？」

真司「加勢って言ってもバカ2人のお守りだぞ？やりたいのか？」

猛「俺先飯食ってるわ」

真司「賢明な判断だ」

猛「んじゃ、兄貴、後はよろしく」

真司「はあ…猛にはああ言ったが、誰か変わってほしい…」
く4人大暴れちうく

猛「女性陣はそろそろ注文は決まった？」

大幅カットしてるんですが、ここまで10分経ってます…

瑞希「私は『ふわふわシフォンケーキ』にしようかと。美波ちゃんはどうしますか？」

美波「ウチもそれにしようかな。葉月は？」

葉月「葉月もお姉ちゃんと同じのにするです！」

猛「よし、全員決まったな。姉さん！注文を頼む」

翔子「……………何にいたしましたでしょうか？」

猛「女性陣はみんなシフォンケーキで…俺は…」

翔子「……………それでは、注文を繰り返します。『ふわふわシフォンケーキ』が3個と『メイドの膝枕』が1個でよろしいでしょうか？」

猛「よろしくねえしそんなメニュー無かったろ！…そういうのはあそこで奮闘…つてもういねえや…」

真司「そう言うこった」

瑞希「シン君、もう終わったの？」

真司「全員出たつたからな。もういいだろ。あ、俺、カレー食いたい」

翔子「……………カレーはない」

真司「マジか…じゃあオムライスは？」

翔子「……………ある」

真司「んじゃそれで」

猛「俺も」

翔子「……………わかった。少々お待ちください」

く時を戻そうく

雄二が考えた作戦は常夏コンビを痴漢犯に仕立て上げて追い出すというもの。

明久「すみません。足元の掃除をさせていただきます」

夏川「掃除？さっさと済ませてくれよ？」

常村「結構可愛いなあ」

明久「(不快すぎる…)ありがとうございます。では…」

夏川「ん？なんで俺に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて…」

明久「くたばれえ！」

そう言いながらのバックドロップが完全に決まるが…

夏川「なっ…お前はFクラスの吉井！まさか女装趣味があったのか…」

まだまだ元気な様子の常夏。これに対し明久は…

明久「この人変態です！今私の胸を触りました！」
作戦通りとはいえとんでもない冤罪である。

雄二「こんな公衆の面前で痴漢たあゲス野郎！」

常村「何見てたんだ！明らかに被害者はこっちだろ！」

雄二「黙れ！たつた今こいつはウエイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！俺の目は節穴ではないぞ！」

雄二よ…この場にいる誰しもが思ったことを言つてやろう…

お前の目は確実に節穴だ！

雄二「おい、そのウエイトレス。そっちで倒れてる男は任せたぞ」
そう言われた明久がすることは…

明久（任せるつて言われてもなあ…あ！そういえば秀吉に押し付けられたこれがあったなあ。こいつの頭につけとくか、瞬間接着剤で！）手にブラ

真司「明久…お前それじゃどうにもできてないだろ…ちゃんと拘束はしとけよ。事情を聞かなきやなんねえんだから」

明久「拘束つていってもなあ。真司、なんかないの？」

真司「俺は猫型ロボットじゃないんだが…まあハンカチで手後ろに縛つて柱にくくりつけとけ。そんなくらい持つてんだろ？」

明久「あいにくだけど僕ハンカチ持つてないよ？」

真司「は!?ハンカチちり紙は携帯必須だろうが！お前小学校で…何も学んでなかったな…すまん…」

明久「何で謝るのさ！」

真司「学んでたら小学生にバカなお兄ちゃんなんて呼ばれないはずだが？」

明久「何も言えない…」

真司「まあいいや。これ使えよ」結束バンド

明久「ありがとね。…って何でこんなのもってんのさ！これ普通の高校生が持つてるものじゃないよね！」

真司「ん？ああ…昔、ちよつとあつてな…」

明久「…聞かないでよくよ」

常村「おい！夏川！そこでブ○ジャー被つてないでとつとと逃げるぞ！」

夏川「んなこと言つたつて拘束硬くて外れねえんだつての！」

常村「なんでもいいから逃げるぞ！」ダッ

雄二「待てコラ！追うぞ！アキちゃん！」ダッ

明久「そのあだ名はやめてもらえるかな！」ダッ

真司「めんどいから追うのはいいや」

「そして時はまた戻る」

真司「このオムライスうめえな。瑞希も食うか？」

瑞希「…私はいいや（太っちゃいそうだし…）」

真司「そうか？まあいいならいいけど」

「食事終了後」

真司「さて、んじや教室でも戻るか」

瑞希「そうだね。みんなのこと、手伝わなくっちゃ」

翔子「お会計は野口英世が2枚、または坂本雄二1人になります」

猛「んじや、坂本雄二1人で頼むわ、姉さん。旦那と仲良くな」

翔子「ありがとう。猛は姉想い」

真司「そういう訳じゃないとは思うんだが…まあいいか。瑞希、島

田さん、そろそろ4回戦だろ？準備しなくていいのか？」

瑞希「え!?もうそんな時間!?行きましょう！美波ちゃん！」

美波「次の相手はわからないけど数学なら負けないわ！」

真司「次は古典だった気がするんだが…」ボソツ

猛「面白そうだから黙つてようぜ」ニヤニヤ

真司「つつてもそれが原因で瑞希が負けるのは解せん」

猛「はいはい、ごちそうさん」

この選択が合ってるか間違っているのかそれは神のみぞ知るの
ある。

ファーストラウンド

結果から言うと瑞希たちは負けた。…なんでこんなダイジェストになってるかって？答えは簡単だ。原作とほとんど変わんねえんだよ！絶対に作者の文章力の問題じゃねえよ!?違うって言ったら違うんだからな！

違うのは瑞希が明久をシメる理由くらいですねえ。彼女曰く、「幼馴染が犯罪に手を染めるのは見ていられない」とのことですよ。純粋な子って素晴らしい理由で行動するんですね。お兄さん感心するわあ。そんな純粋な子の現在は…

真司「なあ瑞希、いい加減元氣出せよ」

瑞希「だつてえ…」

そう、絶賛いじけております。なんで泣いてるかは聡明な読者ならすぐにわかるだろうよ。

真司「とりあえず明久が小学生に手を出すようなやつじゃないのは瑞希もわかってんだろ？」

瑞希「それは…そうなんだけどさ…」

真司「だつたらあいつを信じてやれよ。あいつが下手なことできないってのを一番知ってるのは小中を一緒に過ごした俺たちだ」

瑞希「…そうだね！理由はわかんないけど下手なことしたら美波ちゃんに○されるもんね！」

真司「あんさん、それ冗談にならんわ…」

瑞希「終わったことよくよくよしてもしょうがないし、戻ろつか」

真司「落ち込んでたんは瑞希の方じゃんか…」

瑞希「それはいいでしょ！シン君早く行くよ！」

真司「わーったよ…：先に行つててくれや。用事ができた」

真司の目線の先には1人の男が笑顔を浮かべながら立っていた。その目線に気づいた瑞希もそちらに目を向けた。

瑞希「あの人、知ってる人？」

真司「…まあ、ちよつとな。…向こうにいた頃の知り合いだ」

瑞希「…そつか。積もる話もあると思うし、先行ってるね（シン君、

何か隠してる…)」

真司「(…ばれてるか) ありがとう」

スタスタ

真司「…時間より早くないか?」

真司と男の視線がぶつかる。男は真司の質問を無視しながらこう切り出す。

男「これはこれはたいそうな御身分じゃねえか。え? お前の女か? しんくん?」

真司「…聞きたいことはそれじゃないんだろ?…隴(おぼろ)」

隴「釣れねえなあ。せっかくお前の彼女つぽく呼んであげたのに…少しは俺とおしゃべりしようとは思わないのか? 真司?」

真司「残念ながらそんな時間はないんでな。用があるなら手短にしろ」

隴「…時間がないのなら仕方あるまい。最重要案件のみ話す。お前の敵にはとある大企業の社長が関わっている。生半可な策では大きな力の前には太刀打ちできまい。覚えておけ」

真司「…大企業だと? どのやつかは知らんが気には止めておこう」

隴「…公の場では其の力は現れることはない。然れど真の黒幕と相見えんとす時、必ずや強大な力をもって押し潰さんとす。…と姫様からだ」

真司「お嬢が言うなら間違いあるまい。…と言ってもなあ分からんもんは分からんな」

隴「お前なら真実に辿り着くだろうと姫様はおっしゃられていた。此度は序章に過ぎんよ」

真司「お嬢に伝えておいてくれないか、委細了解と」

隴「承知。…久々に話していたかつたが、もう時間か?」

真司「そろそろだな。敵さんがいつ仕掛けてきてもおかしくない」

隴「ならば行け。…今度は失うなよ?」

真司「…もう3度失った…失ったものは帰ってこない…それでも進み続けるしか残ってないんだよ、俺には」

タツタツタツタツ

そう言い残し駆けていく真司。隼はその背中に真司の覚悟と迷いを感じ取っていた。

隼（真司…辛いのはわかる…だが、覚悟を決めないと手遅れになるぞ…）

くFクラス前く

真司「（ん？なんか静かだなあ）…お前ら、儲かってんのか…？」

明久「真司！大変だ！秀吉と島田さん、葉月ちゃん、姫路さん、それにAクラスの霧島さんと木下さんが連れ去られた！」

真司「なん…だと…？クソツ！俺が目を離さなければ…」

雄二「真司、落ち込んでる暇はないぞ。ムツツリーニが今連れ去られた場所を特定している。特定しだい俺たちで乗り込むぞ」

真司「…わかつてる。こんなだったらあいつをここにつれてくるべきだったか…」

猛「あいつって誰のことだよ、兄貴」

真司「向こうにいた頃の知り合いに索敵能力と戦闘能力は一級品である社長の一人娘の護衛の奴がいるんだが…」

隼「俺を呼んだか？真司」

真司「お前まだこっちにいたのか…まだ時間はあるのか？」

隼「嫌な予感がしてね。追ってみればそういうことか。…時間はまだある。それにこの事件を放って帰るようなことがあれば旦那様に殺される」

真司「心強いな。…雄二、ムツツリーニはどこに？隼、手伝ってくれないか？」

雄二「そいつの素性が分からんが真司の今の話を信じるならいいか…ムツツリーニは屋上だ」

隼「真司、案内を頼む。…久々に共同戦線だが、お前はついてくれるか？」

真司「当たり前前だ。”あの時”とは違う。もう遅れは取らない」

隼「信じよう。…”あの子”を守れなかったこと、忘れんじやねえぞ」

真司「俺はどこにも逃げん…絶対に！」

猛「俺たちも準備しておく。場所がわかったら教えてくれ」

タツタツタツタツ

〽屋上〽

真司「ムツツリーニ！状況は!？」

康太「……………大まかな場所は絞れた。後は細かい位置」

隴「ならば、私の出番だろう。そのパソコンを貸してくれないか？」

康太「……………連絡はもらった。頼む」

隴「委細承知。……………ここまでできているのなら……………ここをこうして……………出たぞ、埠頭4番倉庫だ」

真司「了解！向かうぞ！」

〽4番倉庫〽

不良A「奴ら、こんな上玉侍らせているとは…へへっ、ボス、俺も
う我慢できねえっす！ヤっちまってもいいっすか？」

ボス「お前の脳みそは股間にでもついてんのか？まあ少し我慢して
おけ。後でたっぷり味わわせてやるからよ…」

美波「あんたたち！こんなことしてただで済むと思ってるの!？」

不良B「思ってるも何もこの数相手に勝てるのか？ええ？」

埠頭4番倉庫に集められたその数、およそ30。ヤクザも混じって
いるため、少なくとも普通の男子高校生が10人集まったところで勝
てる相手ではない。

ヤクザA「お前ら、お上からのお達しだ。そこの女どもは売りもん、
手荒な真似はするな、と」

ボス「わかりました。…しかし、俺たちは勝てるんですかい？相手
は彼の悪鬼羅刹でしょう？」

ヤクザB「お前ら、俺たちを侮ってないか？悪鬼羅刹程度はその辺
にゴロゴロ転がってる世界が…こんなだよ。その程度に負ける？こ
れは面白いジョークだ笑笑」

ボス「そうですね。おまけにこっちには人質もいる。負ける要素
がなかったです」

ヤクザC「分かればいいんだよ、分かれば。だが、負けるなんて思っ

た奴が無傷でいいわけねえよなあ？ああ？」

ボス「す、すみません！しかし…」

ドガツ！

ヤクザD「でもストもあるか、アホ。お前はしばらくそこに寝てろ。後でたつぷりシゴいてやる」

ボス「う…あ…」バタン

この時彼らは後にこの行動を後悔することになるとは夢にも思っていないかった。そう、彼らが暴れ始めるまでは…

真司「ここか!？」

隼「落ち着け、真司。ここから声が聞こえている。数は…ざつと30といったところか…舐められたもんだな」

明久「その数で舐められてる、なんて思うの君だけだよね!?僕ら一般人からしたら暴力的な数だからね！」

雄二「明久、うるさいぞ。中まで聞こえるだろうが」

明久「悪いの僕!?君たちが異常なだけだからね!？」

真司「…お前の鼻と口にガムテープ貼ってやろうか?ああ?」

明久「すんませんでした!」土下座

真司「チツ…隼、敵の配置、分かるか?」

隼「俺を誰だと思ってる。…入り口に10、裏口に10、真ん中に10といったところか。人質は真ん中だ」

猛「よっしゃ、行くか。…姉さんたちを取り返しに…」

雄二「お前も落ち着け、猛。どこから侵入するか決めてないだろうが」

猛「んなもん真正面からに決まってるだろうが」

真司「バカか、お前は。んなことしたら人質で一発アウトだ。入る入り口…そうだな、上の窓でどうだ?」

隼「及第点だな。上の窓に俺と…ムツツリー二と言ったか?お前だ。正面はお望み通りお前ら兄弟、残りは裏口だ」

雄二「だろうな。…全員、死ぬなよ。作戦開始だ」

ガシヤンツ

ガンツ

バリーンッ

真司「…お前からあ…覚悟はできてんだろくなあ…全員まとめて…かかって来いっ!」

不良A「敵襲だーッ!」

ヤクザA「来たか…つて、なっ!お前は!竹原隼!何故鳳(おおとり)家の門番のお前がここにいる!」

隼「んなこと敵に教えるわけねえだろうが、バカどもが!」

ヤクザD「お前から人質がどうなつてもいいのか!?こいつら殺すこともできんだよ!」

雄二「どこ見てんだ!人質はもう返してもらったぞ!」

ヤクザC「んなっ?!いつの間!」

真司「この程度の戦力で勝てると思うなあ!」

ドガッ

バギッ

ボゴッ

真司「…今度は…守れたのか…?」

瑞希「シン君…!」

隼「強くなれたんだな…真司…」

真司「ありがとなあ…隼…俺、ちゃんと大事なもん守れるようになったよ…瑞希、無事か?」

瑞希「…怖かったよお…」

真司「失わずに済んで良かった…」

雄二「お前は死ぬ寸前みてえなこと言ってるじゃねえよ。とりあえず全員無事だとわかったんだ。とつとと帰るぞ」

そう言つて踵を返す雄二の腕にはいつのまにかSHOKKO KI RISHIMAが装着されており、色々台無しだ。

く帰り道く

明久「そういえば真司、あの子、とか、あの時、つて何のことなの?」

真司「…さあな」

秀吉「明久よ、本人があえて隠していることは話すまで待つておると

いうことは…すまぬ、できんかったな」

明久「秀吉まで僕をそんな目で見るの!?!…いや、話したくなければいいんだけどね?」

真司「…すまねえ」

猛「兄貴が何か隠してんのは今更だろ?ま、自分から話すまで待つてやるさ」

ここで痺れを切らしたのか、優子が隴の方をチラチラ見ながら話を切り出す。

優子「…誰も聞かないからアタシが聞くけど、貴方、誰?」

真司「…あ、紹介忘れてた。男どもはともかく女性陣は何も知らないよね。こいつは竹原隴。母親が鳳財閥の人間でな、普段は北海道にいるんだが、父親がこっちにいるんで時たまこっちにも来るんだよ」

隴「竹原隴です。母が鳳の分家なので総本家で姫様の護衛をしています。以後、お見知りおきを」

瑞希「シン君にこんな礼儀正しいお友達がいたなんて…」

美波「合わないわね…」

真司「あのなあ…」

隴「鳳家の門番と身体能力ゴリラじゃそうなくても仕方ねえだろ」

真司「納得いかねえ…」

優子「…あれ?竹原ってどこかで聞いた名前ね。どこだったかしら?」

真司「ああ、教頭だよ。こいつの親父、うちで働いてっから。…

まあ、鳳財閥で働いてた竹さんを強引に引き抜いたのがうちのクソババアって訳なんだが…」

隴「まあ、最終的に選択したのは親父だから気にすんなよ」

真司「選択ねえ…選択肢なんぞあったんかも分からんけどなあ」

そう言っつてすまなそうにしている真司の背中には哀愁すら漂っていた。ちようどここが別れ道になっていたため、男子で分担して女子を送り届けることとなった一団は木下姉妹、坂本夫婦、猛、ムツツリー二の6人と藤堂夫婦、明久、隴の4人に別れて帰って行った。

この学園祭の間は彼らにこれ以上厄介ごとが飛んでくることはな

く、
平和な学園祭を過ごしたそうなの。